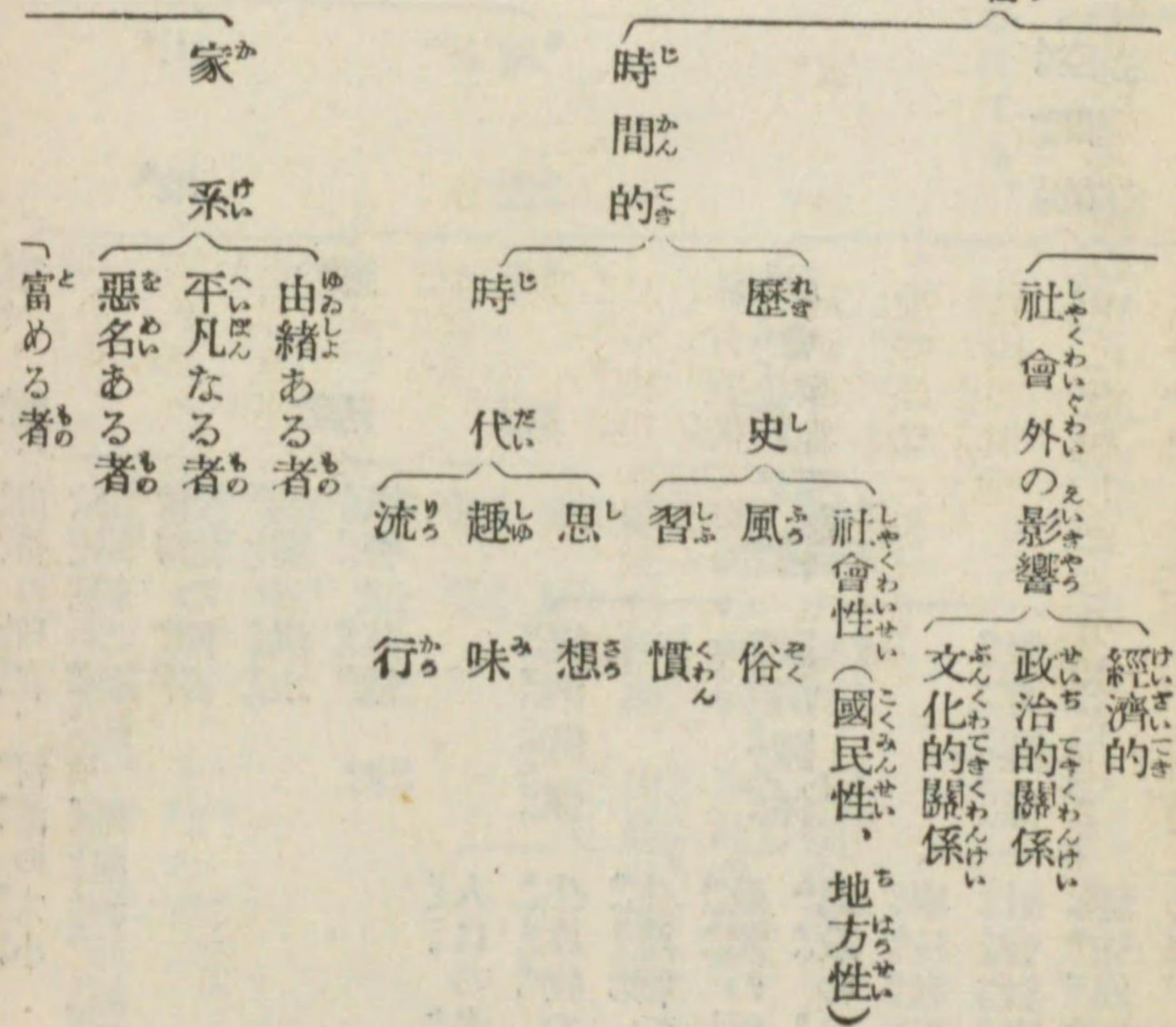
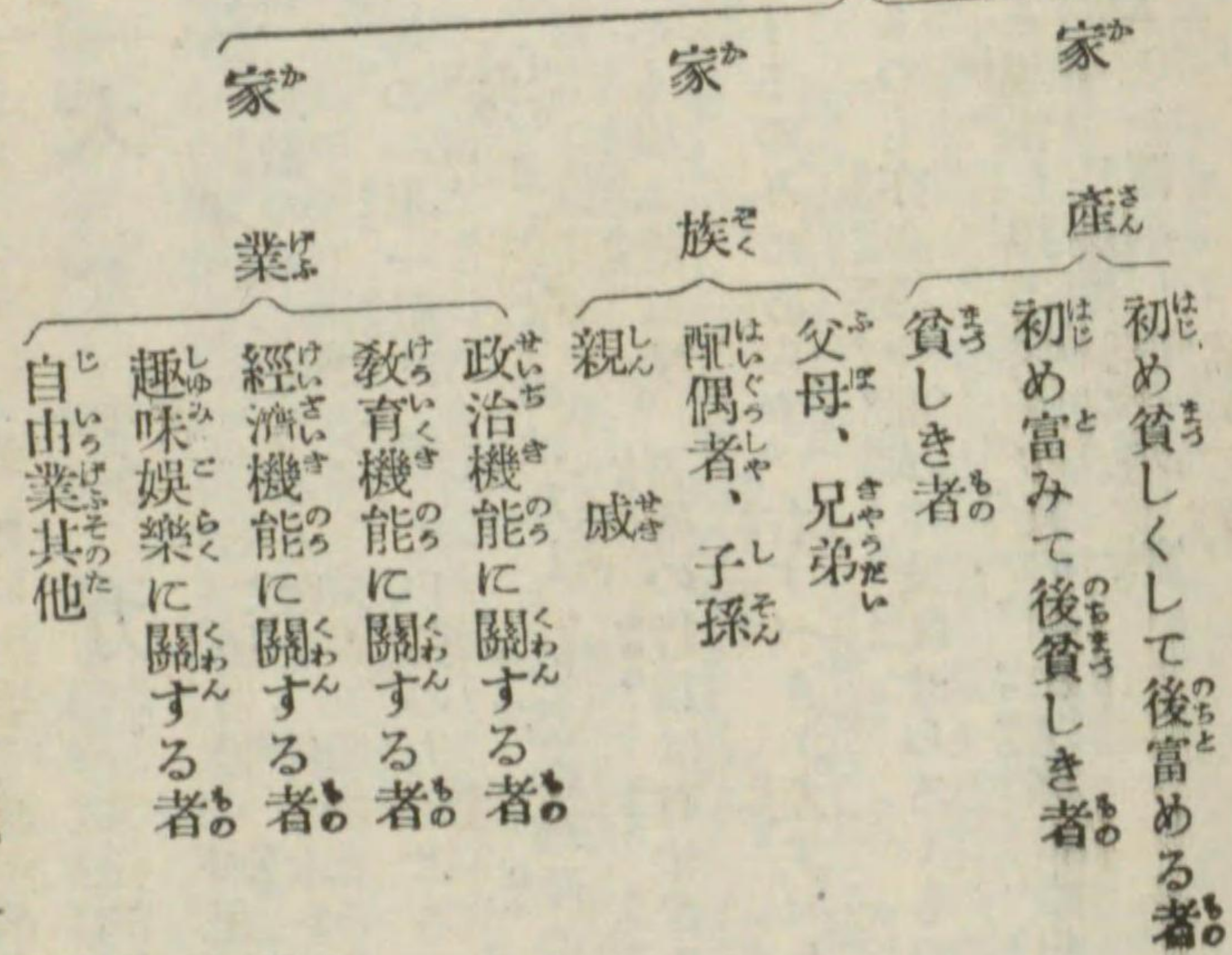


社會の影響



家庭の影響



を算し得べし。これ予が運命論の中に概観したる分類に過ぎずして、更に一々に就いて其の影響し來る所を見んか。吾等は實に是等無數の事情の爲に制縛せられ、無限の境遇の爲に支配せ

らるゝの外、一步をも動かし得ざる一傀儡に過ぎざるなきか。所謂我力なるもの何の所にかある。

大なる力

我は天地の一塊、無数の糸に操らるると雖も、其の本を握るもの必ずしも他人にあらず。客観的に之を見れば吾等の一舉一動は悉く自然の力によるの外なきが如きも、主観的に考察するとき、行くも歸るも心のまゝならぬはなし。必然の理法の我を壓迫するは否むべからざれど、我に自由意思の存するも疑ふ能はず。吾等の行爲は右せざるべからざるが故に右し、左せざるべからざるが故に左するのみにあらず。右すべきか左すべきかを選択するの自由あり、嚴密にいへば此の自由なるものも亦必然の理法に支配せらるゝものなるやも知るべからざれど、吾等は自ら選擇し得べしと思惟し得るなり。此の自由選擇の意思これ直ちに吾等が人格の中樞たるものにして、我と他人とを區別し得る所、實に此にあり、我これによつて我が個性を立し、萬有

中の何者とも異なる自我なるものを認む。人に此の自由選擇の意志なからんか、其の個性は埋没せられ自我は破壊せられて、瓦礫と同じく木石と異なるなからむ。人の人たる權威は此に根ざし、自我の尊嚴は此に礎を築く。蓋し此の根は個々差別の現象の上に養はれずして、深く一味平等の本體の上に立ち、此の礎は萬象歴々たる事相の上に築かれずして、堅く萬象を一貫せる實在の上に置かる。天の高きも覆ふ能はず地の厚きも載する能はず、却つて天地を以て自家胸中の風光と識認する無限實在の迸り出でたるもの、頂天立地、屹然として他と異なり、萬人否と云ふも獨り諾といひ得るの權威と、白刃も其節を屈する能はず、黄金も其心を動かす能はざる尊嚴とを有す。我が身は父祖に稟け得たるも、我は父祖にあらず、我が行爲は四圍の境遇に動かさるゝといふも、我は自から我が行爲の責任を辭するの口實を有せず。宇宙雙日なく、乾坤唯だ一人、小なりと雖も無限の宇宙の一部分、我を除いては宇宙亦其の無限大を誇る能はず、短しと雖も悠久なる天地の壽命に繋る。我を除いては天地も無量壽をいふ能はず。沉んや深く其の根柢を探れば宇宙は來つて我を培ひ、天地は集つて我を養ふ。我と天地、我と宇宙、何の貫通せ

ざるものかある。此故に我が一舉一動は直ちに天地に影響し、我が一言一行は宇宙に波及す。外界の力の我を動かすは否むべからざれど、我の又外界を動かすの力を有するを拒む能はず。現代の文明は此力によつて築き成されたるにあらざるか。人若し唯だ遺傳と境遇によりてのみ左右せらるゝものならば、進歩もなく發展もなく、與へられたる運命に安んじて何等の改善をも企畫せられざりしなるべし。幸に人には求めて息まざる欲求あり、發して自然力を征服し、其の與へられたるものゝ中、存すべきは存し、卻ぐべきは卻げんとす、此の努力は、やがて文明の母たるにあらずや。想ふに人の行動せる一切の事象は、必然の理法と自由意思との反比例に成るものにして、自由意思の薄弱なる原始民族は只管に必然の理法の支配に任せて其發展も遅遅たるものなりしが、何事をも人爲を以て定めんとする現代文明の素は猛烈なる自由意思によつて必然の理法が漸次に其の領域を削減せられたるに依るにあらざるか。偉人と凡人との差も全くこれにあり。偉人は自我の權能を發揮せんとし、凡人はたゞ自然の力によつて盲動し、境遇の壓迫に屈從するのみ。我が力に頼り、我が力に立て、さらば汝の生をして意義あらしむることを得ん。

新しき生命

吾、我が力を振うて何とかする。我が生はこれ蜂蟻の如きものにあらすやと。これ眞に生を解したるものにあらず。百歳をも長しと算したるは、生より死に至る現相の上のみ。先のガルトンの法則によるも吾等は無窮の昔より生を稟け、而して永劫の未來に傳ふべきものにあらずや。死は一切の終りにあらず、物質の不滅と勢力の恒存は理學者これを認め、細胞の不死と種の繼續は生物學者これを證するにあらずや。よし宗教的の未來觀は其人の疑ふに任すとも、吾等の社會に印せる足跡は終に消ゆべき時なし、先に自我を否定し生を否定したるは其の目前の現象に驅らるゝの弊を矯めたるのみ。大否定の後には大肯定あり、此の現象の光榮の裏面には永劫に滅せざる實在の風光あり、吾等若し此の風光を看取するを得ば、其處には不斷の生命あり無窮の人生あらん。大乘佛教徒の聲を嗶らして絶叫する所は、此の興趣を識得せしむる

にあり。其の久遠實成の法身佛を説き無量壽の如來をいふもの實に之に外ならず。夢の如き生を否定して覺めたる生を肯定し、幻の如き身を否定して金剛の佛身を體得す。これ佛道の極致とする所にして小さき我を没して大なる我に入れ、果敢なき此身を御佛の懷に收めて安らけき生を樂み、我と佛と二にして二ならざるに至つて悟道の妙、入信の眞、現はる。此の佛を外に表示する他力の教は、我を振り棄て、之に憑依せしめ、限りある力を抛つて限りなき力に攝取せしむ。徹底して此の信を得んか、我を平伏さしむるものは我を立たしむるの力。此の力の加はつては何の他に累ひせらるゝものゝあるべき。佛を内に置く自力の教は、深く我を徹見せしめて我と佛と何の異なるなき即身即佛の境に入り、限りありと見たるは事象に迷へる妄執にして、もと限りなき力の伏在するあるを知らしめ、こゝに發奮の動機を自得せしめんとす。我が生限りあり我が力限りありと見たる迷妄より覺めて佛我一體の境に入らんか、彼の念佛上人の黃蘗の獨湛が「汝は幾歳ぞ」といへるに對し、「彌陀と同年」と答へ、其の「彌陀は何歳ぞ」と反問せるに「我と同年」と酬いたるが如き超脱の心を得て、曾ては外界の爲めに

動かされたる心を、今は心を以て外界を動かすの自由を得、現象即實在の理を體現して應用自在なるべきも、これら宗教上の理論は姑く別稿に譲り、其の社會に現はれたる事象に就いて見ると、吾等の一舉一動は没するなく、一言一行は消ゆるなくして社會に永存するは、過去幾萬年、死者其の數測られざるも、彼等の足跡を没し去つては、現代の文明は現出せざるにあらずや。現代の文明、否、今後に幾轉變を経つゝ傳へらるべき此の文明は、又實に過去幾轉變を経て現出し來つたることを知らば、死者終に何の足跡を印せずとは斷ぜんと欲して斷じ能はざる所にあらずや。百歳に満たずとも吾輩が此世に印したる足跡は、死と共に滅せずして永劫に人の世に傳へらるべきや否定すべからず。肉に死して靈に生くるは聖者の教訓にして志士仁人の體現せる所。豈それ靈に生くると云はんや。吾等は個人に死して社會に生くべき貴重の生を營めるにあらずや。此の生を味ひ此の力を振ふ。これ人生をして最も意義あらしむる所以にあらざるか。我、抑も幾許の寄與をか人生に爲し、幾許の力をか人生に振へる。秤量一番忸怩たるものなくんば幸なり。(乙卯三月)

新時代の修養

力の修養

世は進みつゝあり、されど人は尙ほ昔ながらの岐路に彷徨ひつゝあり。修養に新舊の別なしといふは、此の昔ながらの人心に立脚しての議論であるが、進み行く世も亦進み行く人の心の反映なるを知らば、古今亦修養の差なしと云はず。新しき時代には新しき修養を要す。新時代の修養は其の根柢を此に立てねばならぬ。昔の修養を云ふものは、其語の「静以て身を修め、儉以て徳を養ふ」に萌せるが如く、専ら個々の人心に就いて靜的修養をいひ、對社會的なる動的修養に於て缺くところ多く、超世脱俗「こゝも亦浮世なりけり、よそながら思ひしまゝの山里もがな」と身は山に墨染の衣と共に世塵を隔離して獨り其の心神の清澄を樂むを事として、其の少しく動的修養をいふものも、僅に自己を中心としたる小範圍の對社會道に就いて云爲する

のみにして、今日の如き世界的生活に於て説く所多からず、これ其の現代と相容れざるもの少くからざる所以にあらざるか。交通機關の整備して萬邦比隣の如く、世界の風は忌憚なく山家の奥をも訪るゝ今の世に於て、獨り山院靜に養ふ所あるを喜び得べきか。これのみならず、生活難の逼迫は津々浦々に遍くして、此の山院の行者を閑却せず、生存の意義と價値とを沒了せる枯木死灰の徒ならばいざ知らず、苟も志を當世に有し、我が生存を意義あらしめ價値あらしめんとするものは、進んで此の世界的生活の禍中に投じ、十重二十重に押し寄せ來る生活難と奮闘せざるべからず。現代の修養は力の修養なり、此の力緊張せずんば我が生存を支持する能はず、吾等の生命と財産とを保障せる國家も亦此の力の弛廢によりて倒る。現代の生活は個人として難澁なるのみならず、國家としても亦難澁なり。渾圓球上、國を建つる唯心力の緊張による。少しく緩めば忽ちに他に侵略せられ、少しく怠れば浮萍斷梗、國破れて山河空しくあるの悲運に遭遇せざるを得ず。此の國家の生活難は、さなきだに逼迫せる個人の生活難を層一層逼迫ならしめ、又悠々たる靜處の靜養を許さず。吾等は動處に靜養するの工夫を講ぜざるべからず。

嗚呼、放散せらるゝこと多くして、蓄積せらるゝこと少き吾等の力は、如何にして之を緊張せしめ得べきか。新時代の修養は此點に於て一層切實に現實問題に觸れ、一層切實に實生活の上に體現せらるゝものならざるべからず。新修養論は個人としての修養よりも深く國民としての修養を説き、世界人類としての力の緊張を語らざるべからず。

血と汗との結集

世界的生活を背景とせざれば現代に於ける國民的生活の眞實義を闡明する能はず、昔は國と國とは相互に隔離して時々の接觸も未だ以て世界的潮流に洗はるゝことなかりしも、今の國民生活は、恰も個人が國民として國家の中に包含せらるゝが如く、國家は又世界の一員として禍福共に其の影響を享受せざるべからず。

吾等は最早原始時代の如き素朴なる部落の民にあらずして、國民として機制ある國家を組織して生活し、其の國家と國家との關係が直ちに個人の生活に鋭敏なる關係を有する世界的生

活に立てり。此の國家は抑も何人が組織したりしか、此の世界的生活は如何にして營まるゝに至りしか。現代を解せんとするには過去に遡らざるべからず、遠き遠き昔より不斷に流れ來れる時間の中に、人類の奮闘し努力せる跡は終に今日の生活を築き成せるものにして、現在一利那の生活には過去久遠の力を集め、未來永劫の素質を偶す。人類社會てふ集團より吾等を引き離して考察せんとしたる舊き修養論は現代と相觸るゝ少し。吾等は何處までも世界的生活の上に立てる國民の一人として其の修養の歩武を進めざるべからず。修養の論議を此の方面に向くるに於て、吾等と最も密接の關係を有し來れるものは、過去に於ける吾等が努力を追懐し得べき文明史上の事實にして、東より西に西より東に流溢せる文明の潮流を考究し、時代々々に影響せられたる前人修養の跡、其の又前人が不斷の努力によつて新に爲し來れる新時代の進歩向上、これやがて吾等の前途を示すの光となり得るものなれば、新修養の論議は、眼を此の歴史の中に横溢せる人心の流動に注ぎ、之を吾等が心裏に潜める要求に質し、現代生活の上に如何に實現し得べきかを研究せざるべからず。超世脱俗も時には社會の清涼劑たりしと雖も、

現代の文明は決して是等の人によつて造り做されたるにはあらず、血と汗との結集こそ現代文明の寄與者なれ。吾等は文明史上に人類の流せる無用の血と汗とあるを否定せず。されど此の無用の血は、やがて之を有用に轉すべきの方途を示し、無用の汗は其の放散によつて、終に有用なる計畫の大成せられたるを見ざるべからず。吾等の前途にも尙多くの血と汗とを要す。吾等は吾等を阻害する一切の外物と戦はざるべからず。吾等は其の前程に横はる荆棘を刈除して進み進まざるべからず。此の方面の觀察を疎外しては到底新時代の新修養を説く能はず。

全心の要求

文明の歴史は、人心秘奥の必然的なる要求より溢れ出でたる理想實現に對する吾等が祖先の努力に満てり、彼等は自然を克服して吾等の意の如くにならしめんとし、人と人との關係を規制して共に俱に圓滿なる生を樂まんとす、山を抜き海を渡るの機械は此の要求に應じて出現し、政治、法律、道德、宗教は又此の要求によつて産み出され、幾たびか更改せられ、幾たびか築

き直され、時代々々の潮流には或は理智に傾きて情意を閑却し、或は情意に流れて理智を度外し、冷やかなる理眼を以て此の人生を解釋せんとし、燃ゆるが如き情熱に史上を焚焼し來りたることあるも、絶えざる人心の要求は、一方面にのみ發展には満足する能はず。吾等が精神生活の全部に互れる満足の追求は、去來の波を爲しつゝ求めて止まず。吾等の修養も亦古人が力説したるが如く、たゞ理智のみを光りとして情意の要求を見ること仇敵の如く、之を征服するを以て能事となせるが如き制慾主義のものなるべからざると共に、先人が呼號せるが如く理智の小なるを啣ちて情意の満足に渾身の力を集め、迷妄に類する信仰に囚はるゝものなるべからず。吾等は何の偏する所なく、我が精神生活の全部に慰安と活力とを興ふる修養の方針に就いて耳を傾けねばならぬ。理に於て承認せらるゝとも情に於て満足せられざるものは、以て我が全心を率ゐるに足らず、情に於て満足せらるゝとも理に於て承認せられざるものは、以て精神生活の中樞たる能はず、如何に理と情とに識認せらるゝとも、實生活と相渉るなくんば又以て新修養の目標たるの價値なきものと云はざるべからず。現代の文明は人心全部の要求より築き

成さる。現代人としての吾等の修養も、また全心に互りて考究せざるべからず。

文明の缺陷

昔人の夢想だもせざりし文明の美は今や現出せられたり。されど缺陷は尙ほ多く、輪奐の美の裏には醜陋の事實存し、圓滿に近づきし社會の中には原始的なる野性と獸性とは其影を潜めず、絶えざる人心の要求より之を見れば、進むこと愈々多くして足らざること愈々繁し、完からしむる努力怠りなくして、缺けたることの發見はそれにも優り、人の世は常に缺陷を免れず。此の缺陷の充足こそ吾等の求むる所にして、力の修養は此處に尤も其要を感じるなれど、其の發揚にして當を失へば、徒らに古人が失敗の跡を尋ねて自から陷穽に落ち、終身營々として脱出する能はざる苦境に沈淪して、何等自他に貢獻するなきに終らざるを得ず、古聖先賢の修養訓は、先づ之を警告して吾等の前程を誤りなからしめんとす。吾等は如何に新時代の新修養を標榜するとも、此の古聖先賢の教示に聳ふる能はず、徐ろに其の教ふる所を味ひ、靜に其の警むる所に

に聽き、更に其の缺陷充塞の策を講じ、後より進むものをして禍を二たびせしむるなきの法を立つるを要す。内より起るものは人心の缺陷なり。其の缺陷を充塞するは古聖先賢の教示に基き、吾自から我が心を改めざるべからず。これを修養の對自的方面とし、外より起るものは社會の缺陷なり、之を充塞するに於ては多くの社會改良家の芳躅が示せる如き革新の斧を振はざるべからず、其力を養ふものを修養の對他的方面とす。新しき修養は此の點に於ても一石子を下すを要す。(乙卯一月)

國民的內省

文明の假面

鐵火相觸れて現代文明の真相は暴露せられたり。海に潜航艇あり陸に飛行機あり。現代の戰爭は又往時の弓矢刀槍の戦ひと其の趣きを異にしたりと雖も、人を殺し家を焼き、鮮血を喜び

灰燼を樂む人類の癡猛なる性情は今猶ほ昔の如し、物質文明の進歩は機械の發明となり、其の最も精緻なるものを殺すの器に過ぎたるはなし。これ文明の恩澤か、文明をして若し此の如きものたらしめば、吾等は之を呪ふに於て何の躊躇する所を見ず。高尚なる理想は提唱せられたり。公正なる人道は唱道せられたり。しかも人を殺して快哉を叫ぶ人道いづれにある。他を斃して獨り誇らんとする理想いづれの處に存する。劍戟相觸れ兵火相交りて夢の如き理想は消え夢の如き人道は没す。五千年來、人類が營々として築き成せるもの果して此の如きものなるか。吾等は屢々好戰國民の名を以て野蠻視せられ、たゞ武以て列強と比肩すべきのみなるを恥ぢたり。しかも吾等は未だ正しからざる名に兵を動かさず、已むを得ざるに出でずして戦ひたることあらず。其戰ふに於ても、小心翼翼、國際の條規に依據して、未だ其の埒外に出でたることなし。然るに自から先進を以て誇る文明國の行動や如何、妄りに中立國を侵害し、擅に國際條規を蹂躪し弱を虐げ、備へなきを害し暴威を逞しうして恬として恥づるなし。之をしも好戰國民と云はずして將た何とか云はん。文明の假面は剝がれたり、開化の真相は發かれたり。

吾等は今回の戦争に於て、痛切に所謂泰西文明の必ずしも隨喜すべく渴仰すべきものにあらずるを看取し、二千年來、博愛を説き平和を教へ來れる基督教の力も、此の人類の野性に對しては、未だ何等の矯正をも試みる能はざりし彼等の執拗に驚かざるを得ず。

自家の寶藏

吾等は久しく東洋の一孤島に僻在したりし後進國民として、事毎に彼等の云ふ所を重しとし、物毎に彼等の爲す所を學び、自から何の教ふるなきを恥ぢたり。今にして想へば、これ彼の物質文明の赫灼たるに眩惑せられて、此中に包まれたる卑野なる精神を透視する能はざりしなり。其の外見の美を見て内實の醜を逸せるなり。其の云ふ所の立派なるに惑はされて、其の行ふ所の之に副はざるを思はざりしなり。東亞の文明は外見に於て何の誇るべきなかりし、されど内實は三千年の歴史に醜醜せられたる深遠なるものあり。物質文明に於てこそ後るゝこと百年なるべきも、精神文明に於ては進むこと多大なりしにあらずや。よし進むことなきまでも、斷

じて後るゝことあらざるべきを證するの根據を有す。試みに現時歐洲に於て喧傳せらるゝオイケンに見よ、ベルグソンに見よ、其の思想の夥しく東洋的色彩を帯びたるは識者の認めて疑はざる所、たゞ維新以後、只管に西を尊んで東を疎んじ、自家の寶藏を開くことを忘れて妄りに他人の手裏を羨み、其極、却つて他に啓發せられて、初めて内に亦此の寶珠あるを知るに至りし逆輸入の状態を演ぜしのみ。勿論、彼と是とは其の思想の徑路を異にし、彼は科學の根柢より其の結論を抽出し、これは思索によつて先づ此の結論に到達して未だ科學の試練を経ざるあり。彼は多く歸納論法に立脚し、これは多く演繹論法に發足す。これの彼に學ぶべきは云ふまでもなけれど、又別に彼の是に學ぶべきものあるを逸却する能はず。これたゞ思想上の問題のみならず、制度の上にも、我が國家組織は彼等が近時唱道せる諸種の主義を調和し、皇室を中心として平等の權利を人民に與へ、國家が權力平衡の主體となれる如きは、彼等の羨望して而して實現し能はざるものにあらざるか。慷慨死に就く武士道の精華は、彼等の今にして學ばざるべからざる所にあらざるか、殺戮を事とする戰場尙ほ一條の道義あり、之を滅却するは野武士の行爲として指彈したりしは、今の歐洲國民に教ふる所なしと云ふべきか。舊幕時代の五人組制度の如きは、彼の喋々せる地方自治の根源要素たるものにあらざるか。吾等はいかに二三の例證によつて泰西に誇らんとするにあらず、たゞ我にも亦美所長所あることを識認して、妄りに他に瞞せられざるは國民自重の最も必要なる精神たるを云ふのみ。

國民生活の獨立

吾等は今に至つて鎖國時代の夢を語るにあらず、されど日本は三百年鎖國の間に何等必需品を外國に仰ぐことなくして悠々太平を樂みつゝ生活したりしは事實なり。否、其間に相應の進歩と發展とを企畫し來れるも疑ふ能はず、今は昔と異なれりと雖も、泰西文明を享受して既に五十年。國民の生活はよし變化したりとも、我が國産に於て我が國民の生活を支持し難きの理なし。しかも一たび歐洲戰亂の結果、輸入の杜絶するや。吾等は日常生活に於て少からざる不便を感じるに至りしは何ぞや。維新以來、外を尊みて内を卑み、舶來品といへば必ず之を上

等視し、和製といへば劣等のものとし、一意外國品を需要し來れる因襲の去り難き其一なり。條約改正の必要に驅られて淺見なる政治家が國情の如何を顧みず、外國の風習を模倣せしめたる政策の餘弊其二なり。外に仰ぐの利便に慣れて内に發明の努力なかりし産業家の不熱心、其三なり。よし發明と稱するものありとも、模倣以外に歩を進むること少くして粗製濫造たまく、以て外國品の優秀なるを示すに至れる其四なり。かくて年々輸入超過の悲況を呈し、國民は又一日も外國品なくして生活し能はざるに至りしなり。これ豈に國家の慶事ならんや。一國の獨立は主權の他に侵犯せられざるにあるは云ふまでもなけれど、それを支持し確保するには又國民生活の獨立なかるべからず。國民の生活にして全く賴他的ならんか、國家は勢ひ經濟的基礎に於て危殆に瀕せざるを得ず。かく云へばとて吾等は、彼の佐田介石翁が明治の初期に絶叫したりしが如き時候遅れの外國品拒絶論を主唱するにあらず。今日の生活は世界的生活なり。我々に足らざるものを外に仰ぐ、もとより不可なしと雖も、我にありて事足るべきものまでをも外國に仰ぎて我の彼に出すべきもの少くして、彼の我に入るゝものゝみ多からんか、其の經濟關係は相互的にあらずして常に我は債務者の地位に立たざるを得ず、かくして國民生活の獨立焉にかある。今回の戰亂は國民反省の好時期なり。必要は發明の母、輸入杜絶——少くとも減少の——不便は、吾等をして國産使用を餘儀なくす。若し此の時期に於て此の好習慣を造り、生産者も亦粗製濫造の弊を矯めて國民をして必ずしも外國品に依頼するの必要なきを看取せしめば、我が財政家の苦慮せる輸入超過の嘆をも輕からしむることなき能はじ。日本は日本なり。吾等は政治上に於ける日本の獨立を疑はず、然れども經濟上に於て獨立を高聲に呼號し得べきか、日清日露の戰役を経由して我が國威は宣揚せられたり。しかも是れ頗る高價なるものなりし。吾等は今尙ほ多大の債務を外國に負へり。債務ある獨立、借金ある獨立、是れ國民の寤寐にも忘る能はざることにあらずや。借金は返さざるべからず、買った品物の代價は拂はざるべからず、此の二重の責務を負ひつゝ、賣つた品物は到底これに充つるに足らずとせば、一面國産使用を奨勵して買ふものを少くし、他面に生産を奨勵して其の販路を大にし、賣るものを多くすべきは、智者を待たずして知るべきの事なり。吾等は此點に於て我が國民が今一層痛切に感

係は相互的にあらずして常に我は債務者の地位に立たざるを得ず、かくして國民生活の獨立焉にかある。今回の戰亂は國民反省の好時期なり。必要は發明の母、輸入杜絶——少くとも減少の——不便は、吾等をして國産使用を餘儀なくす。若し此の時期に於て此の好習慣を造り、生産者も亦粗製濫造の弊を矯めて國民をして必ずしも外國品に依頼するの必要なきを看取せしめば、我が財政家の苦慮せる輸入超過の嘆をも輕からしむることなき能はじ。日本は日本なり。吾等は政治上に於ける日本の獨立を疑はず、然れども經濟上に於て獨立を高聲に呼號し得べきか、日清日露の戰役を経由して我が國威は宣揚せられたり。しかも是れ頗る高價なるものなりし。吾等は今尙ほ多大の債務を外國に負へり。債務ある獨立、借金ある獨立、是れ國民の寤寐にも忘る能はざることにあらずや。借金は返さざるべからず、買った品物の代價は拂はざるべからず、此の二重の責務を負ひつゝ、賣つた品物は到底これに充つるに足らずとせば、一面國産使用を奨勵して買ふものを少くし、他面に生産を奨勵して其の販路を大にし、賣るものを多くすべきは、智者を待たずして知るべきの事なり。吾等は此點に於て我が國民が今一層痛切に感

得せんことを願はざるを得ず。日本は日本の日本たると共に亦世界の日本なり。
 我にして精巧にして廉價なる製作に勤めば、以て販路を世界に求むべし。従來の我が商業は退嬰主義なりし、少くとも一步を歐米製品に譲りたること、猶ほ思想界の常に彼を師として内我に尋ぬるなかりしが如し。開國當時、一たび泰西文明に眩惑したりし我が國民は、久しく其の迷夢を除く能はざりし。今や其の假面は剝がれたり、彼等が抱藏せる獸性は遺憾なく發揮せられたり。これ豈に國民的内省の好機にあらずや。

恃むは我あるのみ

彼等は口に人道を唱ふ、然れども、彼等と共に人道を談ずるは虎狼と食を談ずる如きのみ。彼等は平等をいふ、されど人種的偏執は依然として抜く能はず、彼等は博愛をいふ、されど異人異種宗教に對して何の實をか擧げたる。正義を基礎としたる國際の條規も、利害の前には一片の空紙たるに止る。同盟といひ協商といふも、一度利害の反するあれば棄て、顧みず。今

の時に當つて恃むは我あるのみ、我力あるのみ。我が國力を充實し、我が國富を養成し、吾、我道を行ふ。志を共にする者は來れ、異にするものは去れ、外國の去就、吾に於て何の關するなし、毅然として獨行し得るの素地を養ひ、彼等の口にして未だ手に行はざる所を行ひ、正義に力を與へ人道に光あらしめ、彼等が築き成せる外見の美に相應しき内容を添ふるを得ば、我が國民も初めて世界の文明に一臂の力を加へたりと云ひ得べし。吾等は先づ此の覺悟の上に立ちて新時代の修養を論ぜざるべからず。而して其の第一歩は國民的内省にあり。己を知るは智、我が國民果して自己の境遇を自覺したりしや。他を知るは明、我が國民は能く世界の趨勢に於て一隻眼を有したるか。吾等は今回の戰亂を機として、眞面目に吾等の個人として國民として、將た世界人類としての修養を考慮せざるべからず。現代の世界は實力の競争なり、之に伴はざる理論は正しと目せらるゝも行はれ難く、實力あるものは能く無理をも通さんとす。此時に當りて吾等の養ふべきものに過ぎたるはなし。吾等の所謂靜的修養は力の蓄積を談ずるなり。其の動的修養は力の發現を語るなり。靜處に養ひ來つて動處に應用す。新時代の修養は力

を離れて別議存するなし。(甲寅十月)

世界的自覺

日本の識認

其の部局は東洋の一隅に限られたりとは云へ、我が帝國の世界的交戦に参加したるの一事は、我が國民を驅りて眞面目なる世界的自覺に入らしめたり。由來我の彼を見る徹底せざるもの多かりしと共に、彼の我を見るも亦不精到を免れず。歐洲文明の眞相は之を捉へ難く、我が國粹の精髓は之を傳へ難きものあり。彼を崇拜するものは徒らに我が文明を卑下し、一も彼に及ぶものなしとし、我を尊ぶものには彼を見る夷狄の如く、漫りに國自慢を振り翳して頑固の弊に陥らんとし、一は進歩の假面を被りて歐米崇拜に流れ、他は國粹の名の下に我が短所をも保持せんとす。兩是又兩非、要は彼の眞相の窺ひ難く、我が内省の足らざるものありしに因す。

今や彼が眞相は暴露せられたり。我が國民にして内觀省察に於て誤ることなく、仔細に比較考量するあらば、世界文明に於ける我國の地位歴々として掌を指す如きものあらん。我國の歐洲各國に知られたるは、マルコ・ポロの東方紀行に淵源すと雖も、彼我の初めて相知りしは天文年間^{ねんかん}に於ける葡萄牙人の來航に因す。此の來航によつて我は當時に於て最も精銳なる武器たりし銃砲^{じゅうぱう}を傳へられたると共に、久しく歐洲の信仰を支配したりし基督教を得たり。しかも後者は我が國情と衝突するものあり、且つ其教への或種の目的に供せられし之の故を以て、我は終に國を鎖して彼我の交通を杜絶するに至り、未だ十分に世界に認識せられざりき。

維新の改革と共に國を開いて世界文明の吸收に努力せしより、彼等は我國を認むるに至らも、それは僅に東洋の一小獨立國としてのみにして、未だ其の蘊蓄する所のものを認むるに至らざりしが、一たび日清兵を構へてより、初めは一孤島を以て四百餘州の大帝國に對するを危みたりし彼等も、其の連戰連捷を見ては我が武力の東亞に冠たるを識認したるのみ。武力に於て侮るべからざる好戰國民として知られたるのみ。世界の強國に對しては未だ遽に比肩し易から

ずとしたる彼等の目を駭かしたるは日露の戦役なり。露西亞は北方の強、歐洲列國の共に恐るる所、我は能く此の恐るゝ所のものを膺懲したり。彼等は我が武力の列強と劣るなきを認むると共に、此役の終始に於ける我が公明の態度を見て、我が能く正義人道に於て彼自から誇る歐洲文明國に賞讃の辭を禁じ能はざらしめしは、當時のロンドン・タイムス通信員が我が捕虜待遇法を見て、捕虜は優遇せられたり、彼等の取扱ひは自國の負傷兵に優ると報道し、國際法學者をして吾等は異教國民たる日本に於て學ぶ所頗る多きものありと云はしめたる等の事實、之を證明して餘りあり。更に一二の評論を紹介せしめよ。旅順開城の當時に於てロンドン・タイムスは、「旅順攻圍戦は優に世界の戦史上に覇たるを得べし。其の軍略に於て最近科學によりて支配せられたる有力なる聯合運動の結果を示すことにより、戦史上一新紀元を畫したる點に於て尤も重要なり。歴史家は之によりて西歐文明の結果を積集し、それらを實際に應用し外人より教ふべからざる巧妙を以て運用し得るの國民は全く異種の文明によりて養はれ、僅に三十年以内に於て能く吾人の有せる錯雜せる文明を體達左右し得たるものなることを悟るべし」と

言ひて日本の武力を賞讃し、アルフレット・ステットは其著「大日本」に於て「世界各國中、日本ほど國際協同の點強きものあるや否やは疑問なり、もとより日本とても其の眼中にある他國には利害の厚薄に就いて別なきにあらざるも、決して之を無視するものにあらず、日本は最も忠實に國際關係を重んず」といひ、又「正義の行爲、これ實に日本の教示したる教理なり」と云ふ。日本は實に自から後進國たるの謙遜と、文明の斑に列せんとするの熱心とを以て事毎に國際公法を遵守したるは事實なり。而して其の尤も蹂躪せられ易き戦時に於ても、能く敵を受するの慈仁を示したるは、文明を糊塗せんとする野心にあらずして實に日本武士の顯現したるものに外ならざるなり。之を今回の歐洲戦亂に於て自から結べる訂盟を抛ち、若くは永久中立の國を蹂躪し、戰鬥力なき都市を砲撃し、敵人は之を斬り殺せ、捕虜とすること勿れと揚言するものあるに比して、霄壤の差あるにあらずや。しかも吾等は之を彼等の暴露したる真相なりと祝んと欲す。

國際法と歐洲

羅馬帝國は曾て同一主權の下に歐洲を統治したりき。羅馬帝國の没落は民族移動の活劇を現出し、民族の軋轢は實に歐洲の歴史を一貫せる風潮たりき。相互に他民族を虐待酷遇し鮮血を史上に流すべかりしも、幸ひに基督教の力は之が調停に偉大の功を奏し、羅馬法王の勢ひは能く各國の上に超絶して其の主權者を左右するの力を有し、宣戰媾和に法王の諾否に出づるものありし。しかも其の反動は異教徒の上に現れ、劍とコーランとを手にして入り來れる回教徒に對しては毫も假借する所なかりし。彼等は初めより回教徒を以て對等のものとして遇せざりしなり。それには回教徒の慘虐の激發せしめたるもの少からずと雖も、基督教國民の異教徒に對するの態度も決して博愛仁慈を以て許す能はざるものありし。羅馬法王の權漸く衰へ、宗教改革の唱道せらるゝや、曾て各國民を精神的に統一したりし法王は、此に同教内に起れる叛逆者として新教徒を虐殺し、流血淋漓として史上を汚し、其の法王に懺焉たる各國の之に與

するものあるに至つては、之に對して舊教の外護を以て任するものあり、相互争うて歐洲の天地をして刃の福音と血の洗禮の爲に文化は杜絶し、農工は行はれず、死屍野に横はり、餓殍途に滿ち、腥風吹き荒ぶ大戦亂を惹起し、終に法王以外、教義以外、正義の指導する所によつて各國の去就を規定せんとする國際法の萌芽を生じ、和蘭の法學者グロチウス（一五八三——一六四五年）此の慘狀を滅じ基督教國をして戦時に一定の規則を守らしめんとし、耶蘇國が戦争を爲すことを得るも、其の戦争に當り人類の本性に基きたる確乎不拔の權利に對しては、殘忍暴戾なる所以を以て犯すことを得ずとの主張は、戦亂の慘劇を自撃せる歐洲人を覺醒して、國際法の發達を促進せしめたりき。されど其の初め基督教國に基礎を置きしが故に、基督教以外の邦國には適用せられず、國際法を以て同教徒間のみ遵據せらるべきものとし、其の稍進みたるものも、異教國に基督教國の承認を経るにあらざれば國際團體に加入するを得ずとの思想は、牢として彼等の腦裏に深刻せられたるものなりし。これ土耳其の久しく領事裁判に苦み、我が日本が不對等なる條約に惱まされ治外法權に國權を侵害せられたる深因なりし。今や彼等

の迷夢は覺めて異教徒とせる我國の正義と人道とは一般に識認せられ、彼をして却つて學ぶ所ありと云はしめ、我が赤十字隊は其の救護班を歐洲に送りて、仁慈の手を彼等の傷病者に垂れんとす。これ彼にあつて怪訝に絶えざるべきも我に於ては決して稀有の事實にあらず。

武士道一隻眼

歐洲に於ては激甚なる民族の競争ありき。しかも我に於ては悉く是れ大和民族、遠き昔に於て諸種の民族の混入せざるにあらざりしも皆同化せられて渾然たる一大家族、敵となり味方となるも、戦ひ已んでは手を執つて一堂に笑話を試みるを得たりし。此に於て民族的憎惡の其間に介在するなく、彼に於て見るが如き慘虐は我が戰國の史上に見ること少く、加ふるに宗教も亦我が國民性に洵治せられて、哲理としての論争は之ありしも、干戈を動かすことは少く、異教民に對する憎惡は血を流すには至らざりき、切支丹の迫害は國家自衛の上に出でたるものにして、もとより教派的憎惡の然らしめたるにはあらず。(よし其間多少の誤解の介在するを免れ

ざりしとするも) 而して其の我を教化せる佛敎は慈仁を旨とし、折伏を云ふも慈悲を離れず、儒敎は孔子が犀利の筆を以て春秋列國の戰爭に對して倫理的批判を試みたるに基き、仁義を本として之に背くを許さず、源平鎬を削るも、南北相争ふも、武士の情は寛如となり慈仁となつて幾多の美譚を後昆に傳へ、降つて戰國時代に於ても、干戈相交ふると雖も一諾の信は千金よりも重く、義を見て爲さざるは勇なしとし、殊に將士の待遇各禮あり、城の明け渡し又其の作法あり、越後の上杉は敵國武田の甲信の地にありて鹽なきに苦むを察して之を送ることを拒まず、中國の毛利は織田信長の薨するに當り休戰の約を守りて秀吉をして後顧の憂ひなからしめ、徳川家康が敵國の曲りたる矢の根を用ふるを不仁なりとして採用せざりし等、算し來れば、今日の國際條規の小規模なるもの少からず。我が武士道はたゞ死を顧みざる勇武のみにあらず、守るべきを守り來りし美しき道義を有す。我が國民は之によつて訓練せられたるなり。明の朱舜水の我が水戸藩に入るや、其の禮讓の正しきを見て、眞に是れ君子の美風ありと讚稱したる、此の君子國の美を世界に光被し、曾て小範圍に行うたることを大範圍に行ひ、其の國內

に行ふ所のものを國外に及ぼし、以て正義と人道とに於て、範を世界に示すは亦以て我が國家を光榮ならしむる所以にあらずや。世の武士道をいふもの、此點に於て又一隻眼を有するを要す。

自から顧みて恥づるなき乎

吾等は物質的文明に於て及ばざること遠きを知る。これを知るが故に維新以來四十有餘年、汲々として之を求め來れり。四十餘年は短日月なりと雖も一波動いて千波萬波相應ず、神經過敏なる現時の世界に於て、彼の文明を消化するの實力に於て必ずしも足らざるもの多きにあらず、物質的文明は漸く平等に均霑せられんとす、此上の覺悟は彼の日進月歩に遅れざると共に、更に我が國內に咀嚼して藍より出でて藍より青き生産を世界の市場に提供するにあり、一面吾等は此點に於て劣るなきを期すると共に、他面に於て「之ヲ古今ニ通ジテ謬ラズ中外ニ施シテ悖ラズ」と宣はせたまひし日本道徳の精華を世界に示すの覺悟なかるべからず。是れ此の精華は一

切の上に顯現せらるべし。我が國家としての價値は一に繋りて此の努力奈何に存す。幸ひに國際法の準據並に武士道の顯現に於ては、世界に識認せられたり。商工業に於ては如何、吾等は如何に最眞目に見るとも、私の彼に優れるものあるを認むる能はず。一個の日常品を取りて彼と此とを較するも、彼の耐久力に比して私の及ばざること遠く、彼の精巧なるに比して私の粗悪なるは、覆げんとして覆ふ能はざる事實なり、舶來品崇拜は明治以後に於ける我が迷信の一に算せらるべきも、迷信にあらずして事實なるもの却つて多きにあらずや。之を以て世界の市場に覇を唱ふる能はず、最も利便の地を得たる支那に於ても常に歐米諸國の爲に壓倒せられんとしつゝあるにあらずや。是れ實に久しき階級制度に因襲せられて、商業と云へば素町人の行為として之を侮蔑し、彼等も亦た目前の利に汲々として永遠の計に疎く、粗製濫造、以て一時の利を得んとしたるに由り、且つ其の取引も僅に一地方に限られ、志あるものも鎖國政策の爲に國外に發展する能はず、慣性となつて氣宇の大を缺き、平和の戰爭に於ては常に人後に落ち、商業道徳に於ては、彼の指彈を免れず、戰爭道徳に於て得たる赫々の名も其の爲に失墜

するの不幸に遭遇せんとす。此の如くにして君子國の美、何れの時に發揮し、好戰國民の名、何れの目にか滅すべき。宇内は一家、世界は一族、一個の作品にも一國の榮辱に關し、一言の掛引にも國家の名譽は宿る。吾等は此點に於ても世界的一員たるの實を自覺し、平和の戰爭に於ても亦世界に學ぶ所あらしむるの意氣込あるを要す。(甲寅十一月)

優勝精神論

征服か屈從か

人生を以て一個の戰場とせば、吾等が生を送るの方法は征服か屈從かの二途の外はない。即ち自己を擴張し自我を發展せしめて、他をして自己の勢力範圍の中に屬せしむるか、自己を放棄し自己を没却して、他の勢力範圍に從屬するかの二つである。吾等は抑も其の孰れを探るべきであらう。最高道義は常に告げていふ。自我の執着を抛てと、全く自我を抛てば自然に屈

從し他人に隸屬して、吾等が生存の價値は何れの所にあるであらう。吾等の生存をして意義あらしむるの道は、自己が人格の權威を尊重し、自己の存在を明かにするの外はない。それは勢ひ他の爲に屈せられず、他をして自己を仰望せしめんとする精神がなくてはならぬ。吾等は暫く之を名づけて優勝精神といふ。優勝精神とは他に超越せんとする本能より出發して人類進歩の源泉となるものである。人類に若し此の精神が無かつたならば、自然の壓迫や、他の動物の迫害に打克つこともなく、自然は其種を奪ひ、猛獸其生を蹂躪したのであらう。これを原始民族に見るも、既に業に自然に打克ち猛獸に打克つの工夫をなし、他の部落に負けじといふ優勝精神は盛んであつた。此の精神によつて今日の文化は開け、此の精神によつて我等の生活は向上し來つたのである。文化の母も向上の本も實に此の精神にある。此の精神にして沮喪せんか、其國は亡び其人は衰へ去る。今日の國家は實に其の人民の克たんとする努力によつて産み出され、其の盛衰興亡は一に懸つて其の人民に此の氣宇ありや否やによつて決せられるのである。小なる希臘が大なる波斯に對して敢然として起ち、波斯王サーキセスが百餘萬の兵を率ゐ

て邊境を壓し來るの時、スパルタ王レオニダスは少數の希臘兵を率ゐてセルモピリーの險に據り、ザーキゼスが使を遣はして降伏を勸むるや、傲然として來つて自から取れと壯語したる此の氣宇は、終に希臘をして覇を天下に唱へしめたる所以にあらざるか。老大なる羅馬大帝國が北狄の一番族ゴール人の爲に土崩瓦解を餘儀なくせられたるも此の精神の萎靡したる爲ではないか。獨逸が世界を敵として一步も譲らざりしは、此の精神が内に充滿せるが爲ではなかりしか。ツライチユフに鼓吹せられベルンハルデイに唱道せられたる獨逸國民の優勝精神が此の頑強を致せるを思へば、吾等は此の精神が興國の氣運に伴ふ大なるを看取せずんばならず。勝敗は兵家の數、よし倒るゝとも此心あるものは復起つことを得べし。屈從可なり、我はたゞ平和を求むといふやうな意氣地なき精神にては、國家の興隆は得て期し得べきではない。徳川三百年、優勝の惰力に甘んじたる江戸幕府は、久しく優勝の氣、内に鬱勃たりし薩長土肥の健兒によつて倒されたではないか。薩の負けじ魂、土肥の瘠我慢、長は少しく趣を異にすと雖も、關ヶ原以後逆境にあつて常に江戸を凌がんとしたる氣象の横溢せしを見れば、維新の改革も

亦、此の精神の發現によつて演出せられたと見るべきである。之を個人に見るも、此の精神あるものは常に活氣に満ち、此の精神なきものは衰弱を伴ふ。所謂青年の元氣なるものも其本を叩けば此の精神にして、老人の意氣沮喪も此の精神の消耗より來る。吾等は個人としても、國民としても、此の精神の横溢を望まざるを得ない。たゞ此に注意すべきは此の精神の標的が何れにあるかである。

男らしき服従

優勝精神は之を二種に區分することが出来る。一は負けじとする防禦精神、他は勝たんとする攻撃精神である。負けじとする防禦精神のないものは、常に人後に落ちて恥づることを知らず、たゞ生涯を運命の翻弄に任せて毫も自から守るの心なき懦弱の民たるを免れない。よし勝たずとも、負けじとの覺悟あつてこそ人生に活氣あり、社會に生氣が生じ來るので、此の防禦の努力をも面倒とし、徒らに安を偷み樂に就けば、其國亡び其人衰ふるの外はない。正當防衛

は人類の權利である。彼右の頬を打たば我左の頬をも出せ、彼奪はんとすれば我喜んで之を與へよと、極端なる無抵抗論者は此の如きの言を以て平和を享受せんとするも、是れ構暴者流をして跋扈せしむる所以にして、我が獨立は傷つけられ、我が自由は奪はれ、我が人格の尊嚴は汚されたるのである。吾等は來つて我を侵すものに對しては敢然として起たねばならぬ。國亡びて山河空しくあり、他の勢力範圍に屬しても民は其の安きを樂むといふやうな風で、何うして一國の獨立を支持することが出來よう。吾等は國富み財豊にして、しかも民に此の精神なきが爲に日に衰へ行く國を見るに難からぬ。個人としても、國民としても、吾等は此の氣概の世に立つ上に於て避くべからざるを看取せざるを得ない。併し此の精神は一步を誤れば頑固となり執拗となつて、争ふべからざるを争ひ、却つて事をして紛糾せしむるの弊害の伴ふことがある。我に防禦の權利あれば他にも亦防禦の權利がある。吾、我が權利を尊重するが如く、又他の權利を尊重せねばならぬ。他の主張にして理ありとせば、我は私情を棄て、公道に順ひ、頑迷なる抵抗を抛つて男らしき服従に就くの雅量がなくてはならぬ。男らしき服従、是れ共同

生活の根本要義にして、人に此の雅量あつて國家の秩序は維持せられ、社會の調和は保たるゝのである。こは他の優勝に服従するにあらずして、至公至明なる眞理に服従するのであり、他の權力に叩頭するにあらずして、公共の爲に自己を犠牲に供するのである。最高の道義は此に活き、共同生活の美は此に現る。彼の支那の史を繙くものゝ何人も知悉する廉頗藺相如の争ひは私憤であつた。廉頗の輕侮に對して何等の防禦をも用ひざりし藺相如は、私を棄て公に就いたもので、これを聞き其の私憤を抛つた廉頗は實に男らしき服従を敢てしたものである。彼の黨派根情に支配せられ理を枉げて自己の主張を貫徹せんとし、公を思はずして私を思ふが如きは、眞に大丈夫の恥づべき所業である。吾等は防禦精神の必要をいふ。しかもそれと共に此の男らしき服従を懲慚せざるを得ない。男らしき服従を敢てするの雅量なく、強ひて理を棄て、情を執し、公を顧みずして私に就かんとするものは、終に自己の存在をも危殆ならしむるものたるを免れないからである。吾等は此の條件の下に無抵抗主義をも認容すべき餘地ありとするものである。

勝たんとする努力

防禦精神は受動的であるが、これに對する攻撃精神は發動的である。併し此語は處世上に適用するには穩當でない。吾等は寧ろ競争の心、又は勝たんとする努力の語を以て之に充つるを適當とする。生存競争は自然の大法、優者は存し劣者は倒れる。勝たんとする努力は人の生存を價值あらしむる所以である。吾等は勝たねばならぬ。勝つて以て我が存在を價值あらしめねばならぬ。文明の生活は自然に打克つて得來つた生活であり、國家の存立は人民の男らしき服従と其の共同の敵に對する勝たんとする努力によつて鞏固たるを得るのである。一家これによつて起ち、一郷これによつて興り、一國これによつて立つ。吾等は勝たんとする精神の横溢するを喜ぶ。然れども勝たんとするには他を屈せしめざるべからず、自から勝たんが爲に他を屈せしめて顧みぬことは、果して正しい行爲であらうか。優勝劣敗は自然の天則なり、飽くまで他を侵害して人道は成立するであらうか。吾等が優勝精神を力説するは、徒らに他を排し他を

害して自から勝てといふのでは無い。來つて我を侵害し若くは我が發展を妨ぐる共同の敵に對してこそ、敢然として起つの氣概なかるべからずとは云へ、強ひて我より敵を求め、平地に波瀾を起す如きの態度は、却つて是れ人類の平安を危害するものとして排斥せねばならぬ。此點に於て吾等は今回の獨逸の暴擧を認容することは出来ない。他を排斥せねば自己の優勝を保つことの出来ないのは眞の優勝者ではない。自から優れよ、さらば他は自から其下にあらん。吾等の所謂優勝精神なるものは他を壓し去るにあらずして、自から他に超越するのである。自から他に超越する所あれば他來つて我を侵さず、我亦他を壓するの必要が無い。他の待つなきを恃まずして、自から待つあるを恃め、自から恃む所の他に優れたるものあらば、自からは是れ他の水平に立ちたるもの、防ぐの要なく攻むるの要なし。優勝精神の問題は此に一轉して自から恃むの有無に關し、自から恃むの有無は實力如何の問題に關聯し來る。頂天立地、恃む所のものは我、吾が恃む所のものは實力、これを外にして他に優勝するの途は無いのである。

實力を養へ

自から實力の恃むなくして他に優らんとす、此に於て譎詐となり、偏曲となり、排他となる。此の如くにして得たる優勝の地位は、是れ手段によつて獲得したので、實力の伴ふのではない。實力の伴はざる優勝の地位ほど危険なものはない。危険な手段を施し危険なる地位を贏ち得て何の恃む所とならう。押しも押されぬ實力の涵養、是れ實に優勝の地位を贏ち得る正當の手段である。優勝の地位とは位階でも名聲でも金錢でも無い。位階や名聲や貨殖は外部から我を飾るもので、位階を去り名聲を去り其の金錢を奪つたる赤裸々なる我、これ其人の實力である。實力の伴はざる位階は沐猴にして冠するもの、實力の伴はざる名聲は鍍金も同様、何時かは剝落せざるを得ない。若し夫れ金錢の力を頼つて優勝ならんとするものなれば、よし優勝たり得たりとも、それは其人の優勝なるにあらずして其の金錢が優勝したのである。吾等の優勝ならんとするは人として優れんとするので、我以外の力を以て粉飾せんとするの

では無い。世には自己以外の力で優勝の地位を誇るものが無いではない。これ所謂運命の寵兒、否運一たび襲ひ來れば一敗復た起つ能はざる危険なものたるを免れぬ。恃むべからざるを恃まずして恃むべきを恃め。負けじと思はよ其力を養へ。勝たんと思はよ又其力を養へ。我が實力以外に我の恃むべきものは無いのである。

他を排する勿れ

優勝精神を有するもの、常に免れざるは嫉妬排擠の思想である。之あるが爲に自分の力を付らずして徒らに他の優勝を羨み。この羨望は終に他を排擠して自己の地位を進めんとする妄動を試みるに至る。よしや排擠にして一時其功を奏することありとも、身は又他の怨府となり嫉妬の標的となり、失脚落ち來つて何の得るなく、功を奏せずんば心中常に苦悶の情に囚はる。これ自から求めて苦むもの、大道は廣し、一人途に横はるとも他に進むべき所が無いではない。他を排せずとも悠々として濶歩することが出来る。其の之を思はずして強ひて他を排せん

とするものは自から其力の足らざるを思はざるもの、其他を排する暇に却つて自からの力を養ふの有利なるに如かざるのではあるまいか。自から優れたりと思ふが故に他を排擠す。自から優れたりと思ふものは、最早進歩の杜絶したるもの、未だ優れたる所ありと反省する所に優勝精神の油然として沸き出づるものがあるのである。此優れたる所ありとの反省は、やがて自奮の力となつて優勝の地步を占むるの道程を開く。時は小止みなく過ぎ世は間斷なく進む。此間に處して自から優れたりと思惟せば、そこに衰殘の氣は遠慮なく襲ひ來つて其人を葬り去らんとする。吾等は斷えざる反省によつて自己の短所を補ひ缺點を除き、以て他に優る力を養はねばならぬ。此の覺悟あり此の精神あれば、徒らに他を嫉み惡むの愚を除却することが出来るのである。

氣宇を大にせよ

眼光豆の如く、見る所小なるものは、其の進まんとする道途狭きが故に、他の其道に横るを

邪魔にせざるを得ぬ。氣宇を大にせよ。其處には汝が優勝の進歩を占むべき道途は開かれる。一家に踞踏して一國を思はず、一國に踞踏して世界の氣勢に通ぜず、其の氣宇徒らに小にして、勝心なきものは小成に安んじ、勝心あるものは蟻蚌の争ひを事として終に漁夫の利となるを知らず、吾等は小成に安んずるもの、元氣沮喪を見ると共に、蟻蚌の争ひを事とするもの、却つて世の進運に害あるを思はざるを得ない。一郷より打算して一家を、一國より打算して一郷を、世界の大局より打算して國家を思ふの氣宇あつてこそ、其の競争も私のものでなく、其の勝心も自己本位の小齷齪より脱し去ることが出来るのである。我争ふは私事にあらずして公事、我勝たんとするは、やがて是れ共同の利益を増進するなりといふ覺悟あるならば、農夫が一頃

の田を耕す上に於ても、職工が一個の器具を製する上に於ても、これ一郷の生産を他に優れたりめんとするが爲なり、これ一國の産物をして他の製品に勝たしめんが爲なりと思念する其心中に興國の氣運は熱し來る。人に能不能あれど業に大小は無い。大なる心を以てするなれば如何なる小事と雖も是れ大人の業、小なる心を以て私を營み安を貪るならば、假令天下國家を経

理するとも、それは小人の事業たるに過ぎぬ。昔、白河樂翁侯が領内を檢分せられた時に、金方村の一つの井戸に老婆の番をして居るのがあつた。如何なる仔細かと尋ねられると、此村は昔から水の出ない土地と云はれて一つの井戸もなかつた。其爲に常に隣村の世話になつて一村の不便此上もない。此の老婆の夫五左衛門といふもの、如何かして隣村に負けない井戸を掘りあて、一村の便に供せんと此處彼處と掘り、其數も八十以上に達したが、何處からも清水は出て來ず、五左衛門は其爲に財産を蕩盡して日傭稼ぎとなり、晝は終日働き夜は地を探しては井戸を掘つたが、村民は之を氣狂ひとして誰一人相手になるものも無かつたが、彼は少しも撓まず、終に此の清水を掘りあて、一安心すると共に間もなく死歿した。其爲に村民は何百年來の不便から免れ、皆此の恩澤に浴することが出来るのであるから、せめて報恩の爲め其妻の老後を樂にさしてやらうと、かくは水を汲む毎に僅の金を與へるのであるといふ。侯、これを聞いて撫然として嘆じて曰く、我一國の領主として何の爲す無く、其徳一農夫五左衛門に及ばざる遠しと云はれたといふことがある。彼は實に一郷の爲に一身を犠牲にして、終に自然に打克つた

のである。五左衛門は一匹夫のみ。しかも其心は大人と等しいでは無いか。道は廣く業は多い。徒らに他を排せずとも無競争地に絆々として吾等が打勝ち行くべき道途はある。吾等が此處に優勝精神を鼓吹するは、徒らに競争心を煽り瘡我慢を鼓吹せんとするのでは無い。今の世の惰氣の横溢せる、終に活氣縦横なるべき青年まで、小康に甘んじ一時の安きを偷まんとする姑息の風に浸染せんとし、其の勝心あるものも、たゞ私情によつて公義を害し、小範圍に輸贏を争ふのみで、更に廣く更に高き着眼を缺くを悲むの餘りに出た提言に過ぎないのである。(乙卯六月)

徹底の氣風

不徹底なる國民

徹底の氣風、これ現時の日本人に最も缺くる所のものでは無いか。

人を信ぜば飽くまで之を信じ、信じて赤誠を他の腹中に置けば、他も亦容易に我を瞞するものではない。人を疑へば飽くまで之を疑ひ、疑ひ疑うて其の監視を怠らすんば、我亦他の爲に欺かるゝことは無い。信するでも無く、疑ふでも無き不徹底の取扱ひほど自から損じ他を害する甚しきは無いのである。

自から信ぜば飽くまで之を信じ、終に俯仰天地に恥ぢざるに至れ。自から疑へば大疑一番自己を點檢して、其の眞價を監別するに至れ。信するでも無く、疑ふでも無き遣り方は、決して自己を増益するもので無い。

事を成さんとすれば、飽くまで之を成せ。小蹉跌に逡巡し小障碍に辟易し、成すでも無く、成さぬでも無き中途に彷徨するは、徒らに時間を空過するのみにて何の功もあるべきで無い。事を成さざらんとせば、凡てを放下し去つて復其事を顧みざるに至れ。手を切らんとして切る能はず、低徊顧望、就くにもあらず離るゝにもあざざる態度は、事を紛糾せしむるのみで寸毫の得る所も無いことを知らねばならぬ。

世に中途半端ほど自からを害し他を損するものは無い。何事も徹底的なれ。これ現時の日本人に警告すべき最も恰好の語ではあるまいか。

徹底の語

徹底の語、もと禪家に出で、其の之に到らざるものを未徹底として排斥す。喩を設けていへば、兎の川を渡るに水の表面を飛び、馬の川を渡るに脚其底に着かず、象の川を渡るに脚痕を水底に印す。兎は是れ皮相の悟り、馬は未徹底、象に至つて初めて徹底する。皮相を去れ中途半端を除け、事を成すには須らく象の川を渡るが如く徹底せよ。我が日本人の事を爲すに當り、果して兎の如く馬の如くならざるか。速成は則ち之あり、しかも其の巧遅に如かざるや遠い。如才なきは則ち之あれど徹底せるは無い。歐米の思潮一たび我が島帝國を訪るれば、直ちに之に倣ふこと頗る速かなるも、一事未だ徹底せずして直ちに其次に移り、甲から乙、乙から丙へと、たゞ流行を追うて一も自得すること無く、所謂學者と呼ぶるものは早く歐米の書を讀ん

で之を模倣せんとするのみ、毫も之を我が國情民意に考察して自己の物たらしむるの技量無く、學はまなぶなり、まなぶは眞似るなりと、たゞ是れ模倣を事として其の根本を自覺しないのである。學者は之あれど一人の覺者無きも此の徹底的氣風を缺く所以ではあるまいか。學者既に然り、其の工藝に従事するもの、亦徒らに流行を追うて一時を糊塗し、外觀の美を銜うて内實を空虚にし、終に信を中外に失うて恬然として顧みざるもの、亦此の徹底的氣風を缺く所以では無いか。殊に現時の青年が何事も胡魔化しを主とし、宜い加減に満足し、脚痕其底に印せず、漫然として百藝に通じて一能を缺き、殆ど何事も出來ざるは無くして、一事も十分に爲し能はざるもの多きは、深く此の氣風の浸染したる故にあらざるか。

禪の徹底

禪家の所謂徹底は、宇宙の根本義に徹底し、人生の歸趣に徹底し、自己と宇宙の眞理と二にして一ならざる境地に入るので、或人の反省一番、舊夢覺め來つて初めて自己の眞面目を徹了し、

夢さめて見れば恥づかし寢小便

といへるに對し、これ未徹底なりとて、

恥づかしとまだ夢さめぬ寢呆坊

と喝破し、一遍上人の念佛三昧に入りて、

唱ふれば我も佛もなかりけり

南無阿彌陀佛の聲のみぞする

といへるに對し、これ未徹在なり。佛我一體、聲何が故にか遺れる。更に參究一番を要すとい

はれ、熟慮數年、終に

唱ふれば我も佛もなかりけり

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛

と、乾坤この念佛以外に一事なきに徹底せる如き常に引用せらるゝ話頭である。かく萬法の歸する所に徹底するのが禪家の本領であるが、吾等は此の禪の理法を應用して、吾等の日常生活

活にも徹底の必要を提唱せざるを得ない。

徹底と研究

萬河、流れを異にするも等しく海に朝宗する。八千八水の信濃川も、落ち行く先は新潟瀧頭の水である。萬法歸一。業異なり事同じからざるも其の源底を探れば悉くこれ一、大たると小たるとを問はず、基く所に異りは無い。一事は萬事、一事に徹底すれば萬事に應用が出来るのである。其の一事にも徹底することの出来ないものが萬事に通じ得べき筈がない。吾等の徹底的氣風を提唱するは、其の何事たるを問はず徹底し、其の終局まで達するの風を養へといふので、此の風は、やがて熱烈なる研究精神となり、其處に別個の天地は創造せらるゝのである。林檎は何故に落ちるぞ、雲烟過眠視するものには、玄微なる引力の大法を發見することは出来ないが、湯氣に上る鐵瓶の蓋も、これ何が故ぞと徹底的に考察し來れば、終に人類生活に一大革命を興へたる蒸氣力の利用は創造せられる。我が日本人の模倣に巧みにして創造に拙なるは

一に此の徹底的氣風に基く研究的態度を缺如せるに坐するのではあるまいか。曾て人の英獨佛露の氣風を語るを聞く。

人あり口にすべからざるほどの熱湯を佛蘭西人の前に出すとせよ。佛人は佛然として此の如きもの飲み得べきかと之を退けたるも、英吉利人は莞爾として「これは如何にも熱い、少し水を入れて下さい」と如才なく之を請求し、露西亞人なればジツと其冷むるを待つて徐ろに之を飲む、如何にも應揚の所あり。獨逸人は此の熱湯、如何にして飲むべきかと工夫に工夫を積んで終に飲み得るに至らしむ。

と、我が日本人は獨に類せりとするか、露に似たりとするか、英の如しとするか、抑も亦佛に等しとするか。感情的なる我が國民の、獨のそれに似るべくもあらぬは萬人の認むる所。獨逸の長所は徹底的なるにあり。之を以て其の哲學は甚深にして根本に達せずんば止まず、其の工藝は堅實にして胡魔化しを避く。吾等は此の深みあり重みある獨逸民族に學ぶ所なきか。

英傑と徹底

大人豪傑の偉大なる所は、毫も他の毀譽褒貶に顧慮せず、驀直に自己の信する所に進前する徹底の氣風に富む所にある。彼等は人を相手とせず、故に左視右盼する必要なく、人の氣を憚る臆病な所が無い。邁往直進し快刀を以て亂麻を斷つが如くに事を處理し、獅子の群羊を追ふが如くに横行濶歩することがある。自から信すること弱く、他の批判に左右せらるゝものは、到底思ひ切つたことが出来ない。仁人の見て以て傍若無人と見る所に、却つて英傑の秀拔なる所あるは全く之が爲で、人を相手とせずして天を相手とするのである。此に於て事に表裏なく俯仰天地に恥ぢざれば萬人否といふも我獨り諾といふの果斷となり、衆人退くの時我獨り進むの敢行となり、左右悉く氣沮むも、我獨り勇を鼓して進み、群俗、我を愚と呼ぶも、我は自ら是とする所を行ふ。耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、進み難きを進み、行ひ難きを行ふ、これ皆徹底的なる自信が産み出す勇氣であつて、これぞ其大を成す所以である。何れの時

にか中途半端の英雄あり、宜い加減の豪傑あるべきぞ。英雄豪傑の要素は一にして足らずと雖も、此の徹底的氣風は實に其の主要なるもの一である。思想の深味が之によつて生ずるが如く、人物の重味も亦之によつて生ずる。

名人と徹底

一藝一能に達し、名人と呼ばれ上手と云はるゝの士は、皆其の一藝一能に對して此の徹底的の氣風を有するからである。一時の間に合せを以て無事に其場を過すやうな精神で、業の成し遂げらるゝものではない。ダニエル・ウエブスターは著名の雄辯家であつた。しかも其の突然演説を頼まれた時、「我は未だ此の問題に於て精査せず、此の問題は未だ我物と爲り了らず、我未だ之に就いて公衆に訴ふる言なし」と辭退し、一言一句も自から深く信するにあらざれば吐かざりしといふ。此の氣風は、やがて彼の名を成さしめた所以である。近代の名優某、曾て人に語つていふ「觀客の多い少いで、藝に獎みが出来たり緩みが出来たりするのは、未だ其藝に

忠實なものではない。如何に観客が少くとも、自分で満足の出来るやうにやらねば名人とは云はれぬ」と、観客は胡魔化することが出来ても、自己の良心は胡魔化することが出来ない。自己の満足、是れ其技の神に入る所以では無いか。昔、鼓の名人森田宗禪の尾張侯に招かるゝや舞臺の準備全く成り能役者の出でんとするに鼓打ちの宗禪の在らざるため、座敷からは頻りに催促され、役者達は狼狽する時、宗禪は悠々として厠より出で来る。其姿を見るや役者達は、何とてかくは悠々たるぞ、御座敷よりの催促甚だしく、殿は以ての外の御腹立、かくては此の御屋敷を失策るべきにと語り寄れば、宗禪の曰く、各方の御迷惑はさることながら、我、頃日来、腹を病みて下痢を催すこと甚だしく、殿の機嫌を損せじとて之を忍び打たんには、我藝に不十分なる所あるべし、鼓は小技なりと雖も我道とする所、尾張侯の機嫌を損ずるは我が一身の不利なるも、それを思うて不十分なる技を演ずるは是れ藝道の恥なり、これ余が殿の怒りを顧みず静に腹を整へし所以と。此の氣風は終に彼をして一代の名人と稱せしむるに至つたのである。また鉦の名工義廣は、人と生れては人の中の人と云はれ、職人としては其の仕事の何

時までも遺るを心掛けよといひ、マードンは或成功者の言を引いて、「善いピンを一本造る人は悪い蒸氣機罐を一個造る人よりも多くの利を得べし」と曰うた。世に名人と云はれ上手と稱せらるゝ人の成功は、其技に全人格を打ち込んで最善を盡すに由る。其技に全人格を打ち込む、是れ徹底的の氣風によつて初めて成るべきものではないか。

全人格を打ち込む

獅子の兎を捕ふるにも尙全力を盡す、吾等をして随時随所に全力を用ふるの習慣を造らしめよ。事の大小を論ぜず。一たび自己が與へられたる事業なることを思へば、之に全人格を打ち込める、此の氣風は其の人格を向上せしめ發展せしむるの素地を爲すのである。人或は此の如きの報酬を以ては到底全力を用ひ難しと云はんも、吾等が全力を用ふるの習慣は報酬以上、更に大なるものを得る所以で、報酬を秤量して用ふべきの全力を用ひず、爲すべきの最善を盡さず、宜い加減に中途半端に胡魔化し了る習慣を造らんか、我が人格は其爲に墮落し、我が能

率は其爲に削減せられ、終には何事に對しても全力を用ふる能はざる不眞面目の態度となり、一時的、皮相的なる胡魔化しを以て一生を曠過し、其の名譽は失はれ、其の性格は疑はれ、攫むべき機會を逸却し、得べき利益をも失ふに至るのである。

嗚呼、不徹底なる政治、不徹底なる思想、不徹底なる宗教、不徹底なる教育、不徹底なる工藝、是れ實に我國を荼毒する根本要因である。不徹底なるが故に不眞面目となり、不眞面目なるが故に一時的となり皮相的となる。吾等は先づ何事にも徹底せんとする氣風の浸徹を望まざるを得ない。(乙卯八月)

悩める人に

不徹底なる國民の弊害は、何事にも結論を急ぎ考慮の耐久性なく、少しく思うて決し得べくんば直ちに人生不可解を叫び、思うて空寂の點に至れば、一切の終極こゝにありとし、死を以

て萬事を解決せんとす。彼の青年の自殺、其情の諒とすべきものもあるも、徒らに解決を急ぎたるの責は辭する能はず。彼等の悩む所は古聖先賢の會て悩む所、悩み悩みて後昆に指示す。普く指示を探りて我が思ひの足らざるを補ひ、廣く學びて其の説く所を味ふなく、獨り自から我が思ふ所を以て前古無比の大疑團とし、自己の解く所を以て先人未見の眞理とす、固陋寡聞、自から誤るものあるにあらざるか。上下茫々五千載、幾多の哲人、更に甚深の疑團に觸れて其の解決の途を示す。吾等は博く學び深く思うて、解を有識に求め見を先輩に問ひ、徐るに其の思想を養ふべし。思うて益なし、學ぶに如かず、古聖我を欺かず。(乙卯八月)

修養時言

現代の要求

現代の人心

大官に收賄の事實あり、武夫に愛錢の罪跡現る。頼み難きは人心、世を擧げて信賴すべき人なきは現代の弊竇にあらすや。世は何が故に此の如くに墮落し、人は何が故に此の如く頼み少くなれる。想ふに明治維新の改革は舊來の陋習を打破すると共に、舊來の美所長所をも滅却し、過去に於て一世を指導し、人心を支配したりし道德の權威を奪ひ、宗教の勢威を蹂躪し、人をして、たゞ皮相に努めて内心を等閑にし、目前に走りて永久を忘れたるものあるに由らすんばあらず。一千有餘年來、深く人心に浸染せる佛教は其の信仰を疑はれ、少くとも三百年來世道に權威を有せし儒書は反故同様に取扱はれ、新來の基督教は未だ以て民心を支配するに足ら

す、因果の理は嘲笑せられ、倫常の教へは疎外せられ、神の福音は忌憚せらる。人に敬虔の心なく、世に崇敬の中堅なし。此の如くにして墮落に墮落を重ね、腐敗に腐敗を重ね、寧ろ怪しむを要せざるに非ずや。之に加ふるに物質文明の横溢と、生活難の壓迫とは世界の大勢に伴うて我國を襲ひ、皮相を貴ぶ虚榮の心、苦難を免れんとする自利の念は益々人心を險惡ならしめ、刑罰の伴ふ法律に對してこそ多少の畏怖はあれ、それさへも糊塗の策を施して免るゝの道を講じ、たゞ利を是れ事として道の聽くべきなく節の語るべきなく、「人を見れば泥棒と思へ」の警告は現代に處するもの、瞬時も忘るべからざる信條たらんとす。

文藝家、道德家、社會改良家、宗教家

文藝家は此の現代の頹廢を見て、罪を人心自然の要求と現社會の缺陷とに歸し、滿腹の同情を以て之を描寫し、愛憐の至情、筆端に送り、道德家は慄然として道心惟れ微に人心これ危きを慨し、例を古聖先賢に取り當來の人士を警めていふ、汝の前途には陷穽あり、進む勿れと。

しかも尙其言の用ひられずして相率ひて罪惡の巷に墜落するを見るや、叱責して其罪を鳴らし、益々以て來るべきもの、警戒を嚴にせんとし、社會改良家は、此の如き手段を以て手緩しとし、陥れるものに同情し陥らんとするを警む、これ枝葉のみ。先づ此の陷穽を填塞せよ。然らば又來つて之に陥るものあらじといふ。論は頗る美なるも、直ちに以て現下の陥れるものを救ふに足らず、宗教家の手は之に下されざるべからず、而して何等策の講ぜられたるを聽かず。彼等は文藝家の如くに同情し、道德家の如くに警告し、社會改良家の如くに論議し、眞に宗教の眞面目を發揮して、此の黒闇の裡に沈淪するものをして救済の靈光に浴せしむるの至心を缺く、毒矢、既に身に加はれり、徒らに其の苦痛に同情するとも、妄りに其箭の寸尺と其毒の性質とを論議したりとも其箭の來りし所を尋ねて之を防止せんとするとも、直ちに之を抜き去るの努力と、之に毒消を供するの親切とを缺かば何れの時にか醫すべき。吾等の宗教家に望む所のものは之、吾等の宗教家に待つ所のものも之に外ならざるなり。

信頼せらるゝ人

今の世に要する信頼し得べき人とは、心と言と一致せるの人なり。心にもなき世辭追従を喋々し、心は南東にあつて言は北西にあるが如き危険ならざる人物にあり。若し夫れ更に言と行ひとの一致し得るあらば信頼も亦一段を加ふべし。言に訥にして行ひに敏ならんは古聖の望む所、今の世は言に敏にして行ひに訥、ウカとは信じ難き口の人の多きぞ現代の恨みなる。心と言と一致し、言と行ひと一致し、しかも其の行ひに表裏なくんば、以て大事を託すべし。言行忠信、表裏相應、是れ現代に求めて最も得難きの人にあらずや。皮相を飾る現代人、人前を街ふ當世流、油斷のならぬ世、氣の許せぬ人、現代は此の爲に多くの缺陷を生じ出せるにあらずや。人、何が故に表裏ある。蓋し其因は人を相手とするを知つて人以上のものを相手とするの敬虔の念なきに萌す、人は欺くべく世は偽るべし、人を相手とするもの、皮相に流れ偽善に流るゝは必至の勢ひ、人以上のものを相手として初めて表裏相應の行ひを現出すべし。何をか

人以上のものといふ、曰く天、曰く神、曰く佛。これと人との感應道交する所に宗教の根柢あり。これを監督者とする上に道義の淵源あり。今は其の本枯れ其の源濁る、其の枝葉の凋落し、其の下流の溷濁するもの寧ろ當然のみ。

窮して通ず

宗教の形骸は立てり、其の生命は奪はれたり。信仰の様式は遺れり、其の精神は失はれたり。一世を統御するの權威なく、人心を支配する勢力なし。何を以てか現代人を救はん。今の宗教は其の權威を失ひたるも、人の宗教を求むる情や切。今の信仰に勢力なくとも、世は物質の文明に飽きたり、人々心中に此の要求あり、個々念頭此の靈火を認む。若し教界革新の機運熟して何人か一點火を施せば、慧風、魔境を焚焼して、靈界清淨の地を現出する亦難きにあらず、窮して通ず。今は是れ窮の又窮なるものにあらずや。

人は大官の收賄に世の腐敗を慨き、武夫の愛錢に時の澆季を語る。しかも是等の事件は當然の事として黙過せられたる良心麻痺の時代よりは、一段の覺醒を示し來るにあらずや。腐敗の暴露は慨くべきも、腐敗は腐敗として覆はれたる時よりも、廓清に一步を進めたるにあらずや。大正の維新は舊來の陋習を打破すると共に、明治以後久しく失はれたる或物の必要を認め來りしにあらずや。(甲寅二月)

政治思想の普及

現代の政弊は内閣の罪にあらず、議會の罪にあらず、政黨の罪にあらず、罪は國民自から政治に冷淡なるにあり。冷淡といふは尙可なり。其實全く盲目なるにあり。盲目なるが故に政黨に瞞着せられ、議會に壟斷せられ、内閣に籠絡せらる。彼等は自家の生活に汲々として又此の公共の事體に心を注がず、自家頭上に甚大の關係ある國政を以て全く政治屋と稱する一種の營

業者に委託して毫も顧みることなく、上下一途、萬機公論の聖世に於て上下疎隔し、萬機私論に動かさるゝも知らざる爲して過ぎんとす。是れ眞に忠良の民たるを得べきか。

國憲尊重は、明治大帝の殊に殄念し給ひし所にして、勅語の明文炳として日星の如く、立憲國民忠良の實、之に於て擧げ得べきに、久しき武家專制の餘風は深く國民の腦裏に印して、身は立憲治下の民たりながら、立憲の德澤に浴すべきを知らず。自己の國家を見ること當局者の國家の如く、與へられたる權利を放棄して、之が行使の法を誤り、恬然として日本國民を以て居らんとす。不忠これより甚だしきはなし。上下一心とは上の者の心をして強ひて下の者に體せしめんとするにあらず、下の者の心も上の者之を諒せざるべからず。内閣諸公の心は國民の心となり、國民の心は内閣諸公の心となつて一心の實此に擧がる。萬機公論とは一黨一派の議論にあらず。舉國一致の聲ならざるべからず。今の世、果して此の一致を見るべきか。事の皇室に關することに於て僅に之を見るの外、國家爲政の問題に對しては、大多數の國民は何の識見なく、何の操持なく、政治家の大聲叱呼に盲從して適歸する所を知らず。此の如くにして

能く國憲尊重の聖旨を奉體し得べきか。漫りに内閣の不信任を憤る勿れ、其の内閣は議會の多數を後援とするなり。妄りに議會の腐敗を罵る勿れ、其の議會は國民自身が信頼して選舉せる議員によつて組織せらるゝにあらずや。罪は國民にあり、國民にして今少しく政治的自覺を有したらんには、議會の腐敗も今日の如く甚だしからず。従つて内閣も亦不信任の行動を敢てする能はじ。現代の積弊を救ふの道、國民に政治的自覺を與ふるより急なるはなし。所謂「通俗教育」なるものも亦此點を閑却すべからざるにあらずや。しかも之に従事するもの皆自から政争の渦中に入るを避くるに急にして、此の緊切なる問題に對して何等教ふる所なきは、自ら守るに専らにして他を救ふに忠ならざるの譏りを免れざるにあらずや。勿論政治の事は常に利害の問題に近接し、やゝもすれば一黨一派に偏して公平を缺くの憂ひを免れず、偶々以て政黨者流の利用に資せらるゝことなきにあざれど、そは枝葉の問題なり。政治の根本を説くに於て何の支障かあらん。事實の問題は時と場合とによりて是非あるべきも、根本原理は萬古不變、偏私なく黨曲なし、取捨は其人に任すべし。公平に立憲國民の知悉すべき要件を教ふるは、

教育勅語宣傳の一要件にして、最も心を注がざるべからざる所たり。此の一大事を閑却して國民教育を計らんとする寧ろ失當の甚だしきものにあらずや。これを政治屋の提唱に任せば黨曲あり。政黨者流の宣傳に委ねれば偏私を免れざるべきも、公平なる教育者が其の根本を説くに於て、國憲尊重の聖旨は普及せられ、愛國の思想は初めて痛切なるべし。國民にして痛切に立憲の主旨を自覺せんか、一國の選良其人を誤るなかるべく、議會の健全得て期すべし。吾等は世の教化に従事するの人士が今一層此點に注目せられんことを慫慂せざるを得ず。(甲寅五月)

選舉と道德

此一票

修養の極致は、頂天立地、他に動かされざるの自己を徹見するにあり。此の自己を徹見する

もの、亦何ぞ情實に泥み利害に纏はれて、其の眞骨頭を没却して、叩頭の度數によつて選否を決し、黄金の多寡によつて守る所を失ふの愚をなさんや。

立憲國民の基礎は、此の一票に自己の全人格を叩き込むにあり。吾等は徐ろに今次の總選舉の何に由つて起りしかを査究し、此の一票は直ちに將來の國是を定むるの重大責任を有し、陛下の問はせたまひし民意の所在を告げ奉る唯一の方法たるを考慮し、候補者の心にもなき大言壯語に惑はされ、運動屋の出來もせぬ甘言に釣り込まれず、我は眞に陛下の赤子にして立憲國民の一人たるを自覺し、自由に其の代表たるべき人物を選出し、帝國の將來を光榮あらしむると否とは懸りて此の一票にあるを認識して、其の取捨を決すべきなり。

名利の議員

想ふに衆議院議員は其の任重くして其の俸少し。頼んで出て貰ふべきものにして、頼み廻つて出づべきものにあらず。其の歳費は僅に二千圓、都門一歳の生活を支ふるには足らざる所多

し。しかも甚だしきは巨萬の運動費を支出して此の生活費にも足らざる歳費を獲得せんとするもの、彼等は何等かの手段を以て其の足らざるを補ふの術策を其の任期間に弄せんとするか。然らざれば衆議院議員なる名譽を以て僅に郷黨に誇らんとする名聞漢のみ。利にあらずんば名、名にあらずんば利、此の二者若くは其の一を贏ち得んとするの輩、焉ぞ能く國家の休戚を託すべき國民の選良ならんや。吾等は斷じていふ、運動費の多きほど油斷のならぬ人物なり。叩頭の度盛んなるほど自から人格の下劣を公示するものなりと。眞に憂國の士ならん議員たらざるも、尙國家の經綸を補翼し、民人の休戚を雙肩に擔ふべし。彼等は議員たるも可、議員たらざるも不可なきの意氣を有す。此の意氣あるものは敢て散財せず、敢て叩頭せず。悠然として天下を以て任とす。此の如きものを推薦し、此の如きものを選出し、之に天下の大任を託して、以て其意を強うすべし。

政治的教育

選舉場裡の腐敗は選舉人をして其の責任を自覺せしむるより切なるはなし。選舉人をして其の責任を自覺せしむるは、彼等に健全なる政治思想を普及せしむるより急なるはなし。彼等の政治的知識にして健全ならんか、彼等は徐ろに被選舉者の政見を聴取して自由に之を判斷し、取るべくんば即ち取り、捨つべくんば即ち捨つ。取捨一に政見の異同にあり。此に於て初めて民意の存する所は此の代表者の口によつて現れ、立憲政治の實全く擧るべきも、不幸にして此の教養を缺くが故に情實に動かされ、金錢に瞞せらる。之を動かすもの、非は云ふまでもなけれど、動くものも亦是ならず。之を瞞するもの、奸なるは云ふまでもなけれど、瞞せらるゝもの、愚も亦言語道斷なり。其の愚を改めしむべき教育家が政治を見ること蛇蝎の如く、其非を矯むべき宗教家が政治を度外視するは、是れ自から國民たるの資格を抛ち、陛下の忠良なる臣民たるの權能を放棄するものにして、腐敗の責は其の一半を此輩に歸すべきにあらずや。かく云へばとて吾等は教育家、宗教家を將て政治屋たらしめんとするにあらず。所謂政治屋たるものは黨派心に驅られ、偏見に囚へられて公平なる思想を普及し得べきものにあらず。政治は國民

の政治にして政治家の政治にあらず。國民たる宗教家、教育家が公平に其の見る所を明かにして教化の任を盡す何の不可かある。寧ろ國民は之に依つて多大の參考資料を提供せらるゝに非ざるか。

金で得た権利

曾て某有権者の公々然として「吾等は吾等が營々として働かし汗粒を税金として漸くに得たる此の権利なり。金で得た権利を金で賣る何の不可かある」と。現時の選舉有権者の心裡には此の思想の潜在せしもの尠少にあらざるべし。之を抜くの道は選舉權を金で賣る如き現今の制度を打破して、苟も日本國民たる以上は、何人も代議士を選出し得べき普通選舉の制を布くの一法あるのみ。普通選舉は國民選舉なり。眞に國民をして國民の代表を議會に送るべき自覺を得しむる、之を外にして他に良策の存するなし。此資格は金で得たるにあらず、陛下の赤子なるが故に與へられたるなり。豈に之を金に代ふるの非道を自覺せざらんや。よし尙ほ此の如き非國

民ありとも、普通選舉の行はれんか、有権者は現時の百五十萬人なるに對して少くとも九百二十五萬人たるを得べければ（一戸一人の有権者として）約七倍となりて到底買收の行はれざるに至るべし。更に丁年以上の男子をして悉く有権者たらしめば其數も從つて多く、巨萬の富を以てするも、尙ほ此貴重の権利を買收するに足らざるに至らん。斯くして選舉の弊は拔本塞源するを得んか。されど、これは將來の問題なり。今時の總選舉に於ては、たゞ此一票を重んずべきを知りて他に動かされざる修養を喫緊事として已まん。（乙卯三月）

辯論の修養

人に理想の存するなく、世に缺陷の認むべきなくんば則ち已む。苟も理想の現實と相應せざるものあらんか、如何にして其の理想を現實せしめんとする努力は、言論となり文章となつて公表せらる。此の公表に動かされて現實は動き、缺陷は救はる。雄辯法の大家ダツキーいふ。

雄辯の根本義は理想と現實、及び其の調和にありと。云はんと欲する所のものは理想なり。しかも現實の理想と相背くなくんば云ふべきことなきも、其の相反し相悖るを見るや、如何にかして之を調和せんとし、こゝに演説となり講話となる。此時に當りて辯士は理想の體現者にして社會は是れ現實の體現者、聽衆は實に其の代表者たるなり。此の理想と現實との調和を計らんとする滔々數萬言の説述は、社會改革の本となり、經世利民の原動力となる。理想如何に高くとも現實と相應するなくんば机上の空論、徒らに他の嘲笑を買ふに止まり、計、行はれず、事成らざるに了らん。辯士の注意すべきは自己の理想が現代に於て幾分まで實現せられ得べきか、又幾分まで之に近寄りつゝあるかを看取し、聽衆と共鳴する所のものを捕へ來つて着々其の歩武を進めしむることに着眼するにあり。現實に没交渉なる議論も、文章としては知己を百年に待つを得べきも、辯論としては目前に於て首肯せしむる所なかるべからず。よし俚耳に入り難き大經綸大抱負なりとも、それに耳を傾けしむるまでに説明するは辯士の技倆なり。しかも亦た目前に首肯せしむることを是れ努めて現實に阿り、一時的なる聽衆の喝采を博するに

汲々として、何等理想の傳ふべきなきは、これ徒らに口舌を弄するものにして濟世利民に於て何の功なき閑葛藤たらんのみ。云ふべきなくんば言はざるも可なり。説くべきなくんば説かずるも妨げなし。強ひて言を弄し議を玩ぶものは吾等の斷じて取らざる所、たと云ふべきあつて之を傳ふるの術に拙く、説くべきあつて之を説く法を知らず、心に大經綸を蓄へて世に問ふ能はず、胸に救世の志を有して之を人に傳ふる能はざるものに至つては、これを空過するは社會の損失、吾等は彼等をして語らしめ、社會をして聽かしむるの方策を講ぜざるべからず。專制の昔、布衣、經綸を抱いて告ぐるも行はれず、庶民、濟世の志あつて説くも顧みられざりしと雖も、立憲の世は、輿論の時代なり、衆と共に事を計るべし。此時に當り獨り黙々胸中の劃策を洩らす能はざるは、自己の不満足のみならず、社會の不満足たり。辯論修養の必要此に於てか起る。

由來、東洋の舊修養は沈黙を貴び、寡言を徳とし「物いへば唇寒し秋の風」といひ、口舌を目して禍害の根本とす。蓋し是れ專制治下の舊習に支那流自利思想の混在して、獨りを潔う

し、獨りを全うするに汲々として、社會と交渉なる超越主義を採るもの、これ治國平天下を旨とする孔孟の主意にあらずと雖も、苛政に苦しめる支那人の口舌、身に累するを思うて終に此に至れるもの、孔席暖かなるに違なく、孟軻四方に遊説するもの皆辯論の力を頼みとするもの、之を釋迦の横説堅説に見るも、聖賢必ずしも辯論を輕視せず、否、彼等の生涯は辯論の生涯とも目すべし。思想を他に傳へ、主義を世に布く、辯論の力に頼らざるはなく、孔孟釋迦、却つて文章の後昆に傳はるなくして獨り言論の傳へらるゝもの寧ろ異とすべきにあらずや（孔子には春秋の如き例外あれど、其の主要思想たる論語は門人の筆録に成るもの）、思想の涵養は修養の靜的なるものにして、辯論の修養は實に其の動的なるもの、思想の涵養は本なり、されど其發するや辯論に待たざるを得ず。發して以て自己を擴張すべく、説を以て志を天下に伸ぶべし。新修養を説くものは此辯論の修養を輕視すべからず。しかも本なくして末立たず。妄りに言説を弄するを知つて、内に養ふ所なきものは、其の言深からず、其の議顧みるに足るものなし、辯論の修養の前提には思想の充實あるを忘るべからず。内に充ちて外に發すること

粟の實の如くにして、其の言味ふべく其の語耳を傾くべし。其の言味ふべく其の語耳を傾くべしと雖も、口を開くの前には現實の觀察に於て徹底する所なかるべからず。學者の論の常に机上の空論と目せらるゝは主として之に因す。書齋以て想を養ふべくんば、街頭以て世態を觀察すべく、山院靜に想を養ふものも都市以て人情を知らざるべからず。世態の觀察、人情の洞視は辯論に従事するものゝ忘るべからざるの修養なり。此の修養を閑却して壇に立たんとするものは、對手を知らずして戦ひ、目を閉ぢて門を探らんとするもの、勞して功無き當然のみ。思想、内に充實し、觀察、外に明かなり。準備已に成りぬ。しかも其の思想を傳ふるには言語の媒介によらざるを得ず。言語は實に思想を現實に紹介するの通譯者なり。通譯宜しきを得ずんば眞意傳はらず、媒介其法を失せば、折角の思想も幾多の誤解を生ぜん。辯論の修養は言語と思想とを一致せしむるより切なるはなし。これ易きに似て頗る難く、想と言との確に不離なるを得んには幾多の努力を要す。よしの確なるものを得たりとも、難解なれば人に傳へ難く、晦澁なれば誤りを招く、多く讀み、多く聴き、多く想ふ。三多は獨り文章に於て必要

なるのみならず。言語の修養に於て逸すべからざるの注意なり。修辭學者のいふ。平易なるを採れ、趣味あるを選べ、而して更に音調に於て注意一番せよと、其の此の如きを得るは言語の數を多く知るより便なるはなし。ロード・チャサムは此の目的のために幾回もベレーの辭書を讀破したりと傳ふ。既に言語の數を知る。次に來るべきは説述の方法なり。何れを前にし、何れを後にすべき、前後緩急、悉く以て人を動かすに影響す。論理、心理、美學等、皆來つて其の基礎學科たり。加ふるに文法修辭の主要學科たるあり、辯論の修養容易の事にあらず。若し其れ耳の感覺の心理に聯想を生じ來るものを見んか。一音一聲、輕々に發し難し。曾て聞く、古昔希臘に一辯護士あり、原稿を依頼者に示して曰く、「予は明日法廷に於て此の如く辯論せん」と、其人、其盡さざるものあるをいふ。辯護士笑つて曰く「足下は讀むが故に此の如くいふのみ、明日これを法廷に聞け」と。抑揚あり、緩急あり、同一義もこれを聞くに於ては盡さざるなきに服したりと。言語必ずしも文章と一致せず、人のフォックスに稿を示すや、彼いふ「立派なる文章なり。されど黒き演説なり」と。其然る所以のものは聲音にあり。聲音を主として

見れば演説は一個の藝術なり。自己の經驗したる感情と言語を媒介として他人に移し、他人をして同一なる感情を経験せしめんとする活動たるに於て、少くとも羈絆藝術の斑に列すべきもの、修めて此に到らんとす、辯論の修養は深く自我の根本に立脚して他と共鳴せしむるに於て其功を完うすべきもの、然れども、吾等は演説を以て純藝術の假象に生くるに反し、人と人と相面し一切の假象を脱離して眞面目に心より心に射て功あるを想ふ毎に、聲音を重視するの末にして、言語の選擇も亦重要部分を領せず。心より出でて心に入るべき根本要義の存するを思はざるを得ず。何をか心より出でて心に入るといふ。誠意なり、誠心なり。萬人の心を通じて共鳴すべきもの之より切なるはなし。虚偽の千言萬語、何の功かある、飾り立てたる演説、豈に能く人を動かさんや。心より出でたる片言隻語は胸に穿ち、溢れ出でたる熱情の泉は滾々として他に浸染す。辯論の修養、其の究極する所は人格の修養なり。自から云はんとするの熱情あれば其の眞意は自から流露して他に傳ふべく、人に教へんとする親切あれば、慈愛の聲は自から人の耳に響くべし。自から信する所淺きものは他に動かされて、自己の理想は却つて現

實の爲に埋没せられ、他に傳ふる心弱きものは人に左右せられて云ふ所、其意を悉さず、辯論の爲に辯論を弄するは斯道の賊、言はざるべからずして云ふ、其信する所深く、其説く所眞情籠れば、心より心に入つて他を首肯せしめずんば止まざるべし。強き者は弱きものを服す。自己の信強くば以て他を服せしむべし。信する所、弱くんば言語の洗練、音聲の緩急、以て人耳を快くすべきも、以て心服せしむる能はじ。他に接するの道、愛より切なるはなし。胸に湛ふる愛の逆らぬはなし。訥々語り出す慈母の御伽噺の他人の流暢の辯よりも兒を喜ばしむるもの一に之に囚す。聲を以て語らずして心を以て語り、語を以て聞かしめずして愛を以て聽かしむるもの辯論修養の根本義なり。

辯論の力、豈に金錢の力に劣らんや。而も尙ほ辯論の輕視せらるゝ所以は、之を以て一時を欺妄し、目前を偽滿せんとする陋手段に採用せられ、眞に至情を流露して聽者の心を射るの至誠の人なきに由るのみ。眞に辯論の根本學に通達せば三寸の舌頭豈に天下を動かすに足らざらんや。孔孟の教時に容れられざりしも、之によつて三千年の天下を經緯し、釋迦は之によつて

衆生濟度の術を擧ぐ、遠く古聖を引かずとも、天下はジョージ三世の笏によつて左右せらるゝか、フォックスの舌によつて左右せらるゝかといはれし雄辯家は、英國政治家中最も眞率の人にして、自由か死かの一語、全米の人を起たしめしパトリック・ヘンリーの一語は至誠の叫びに外ならざりしなり。響くものを打て、三寸の舌頭も能く人を動かす。響かざるものを打つ、千金と雖も共鳴するものなからん。(丁卯四月)

新婦人と舊婦人

覺めたるか、迷へるか

男は女の敵ではない。新しき女が若し男を敵として起つものであるならば、それは大なる誤りで、女の敵は寧ろ女にある。異性相引き同性相離るゝは自然の理法、女は男に對して共同の要求あり、此に於て同性相競ひ相嫉むの傾向を有するも、男は則ち然らず。彼は常に女の味方

となるの傾きあり、舊き女はたゞ之に依頼し之に憑據して自己の個性を没却せんとす。これも亦譽めたことでは無い。譽めたことでは無いが、自然は之を壓迫し、境遇は之を餘儀なくしたのである。

何が故に自然は之を壓迫したかといふか。それは男女の生理的約束が違ふ。體質に於て男の強くして女の弱きは之と身長に見、體量に見、腕力に見て明かである。しかし之は自然でなく、永き歴史の因襲で、久しく其業を異にしたのに因するとするも、生殖機能の差異は之を自然に歸せざるを得ない。此の差異は女に妊娠の苦を與へ哺乳の任を賦し、殊に青春の時代より其の生涯の大部分を通じて月經の厄を有せしむる先天的素質で、此の素質が、やがて男の如く出でて社會に活動を試みるに不自由を感じしむる最大原因となり、此爲に女は常に男の庇護の下に生存せざるを得ざるに至り、人生婦女の身と爲るなけれ、生涯の苦樂男子に頼りて、三界に家なき生活を續け來らしめたる所以に外ならぬ。一切の問題の中心には生活の問題あり、女性の生活が全く男性の庇護の下を脱する能はざりし時代に、女性の常に男性の願使に甘んぜざ

るを得ざりしは已むなきの數で、男性は爲に柔順を要求し、女性も亦柔順を以て、身を保つる第一義と心得たるは免れ難き趨勢であつた。

されど女性も人である。思慮もあれば分別もある。漫りに異性の凌辱の下に屈すべきではない。人我に強ければ我も亦人に強く、其愛の濃かなるものに付き、冷かなるものに離るゝは自然の情、男性も亦野獸ではない、同情もあれば戀愛もある、好む所には己れを犠牲にして惜まず、此に於て弱きもの却つて強く、強きもの却つて弱く、堂々有骨の丈夫、巾幗の織手に左右せられて、古き時代に於ても女性の却つて男性を願使するの例を見るに難からず。所詮人生は男女の兩性に成り、人心は生存の本能と生殖本能とによつて葛藤し、人生は個人の生活と種の繼續との一大要件を以て錯綜す。男貴きに非ず女卑しきにあらず。同じく是れ人、たゞ其の本領を異にするのみ。舊き女は其異なる所に執して同じき所以を忘れ、新しき女は其同じき所以を主張して異なる所を逸却せんとす。共に中正を得たものでは無い。異中同あり、同中異あり、明月に鶯を藏し、銀盃に雪を盛る、女をして人たるを自覺せしむるは則ち可、しかも其女たる

を忘れしむるは眞に覺醒せしめたるものではない。

掠奪結婚の昔より賣買結婚となり、女は久しく其の人格を没却せられ、近く尊屬親の自由に任ぜられても尙其の個性は認められざりし身の敢然として個性の解放を主張し、幼にして父母に従ひ、長じては夫に従ひ、老いては子に従ふといへる思想の深く浸染して、我も人も疑はざりし婦女の其の自由を唱道せんとするはさることながら、極端より極端に走りて其の生理的約束をも忘れて男性と同等の活動を試みんとするは、人たるを自覺せんとして誤つて男たらんとするもの、殊に男にあつても、尙ほ慎むべき放縱の行動を敢てして、自から其の新しきを誇らんとするは、たとひ一時の反抗的行爲なるにもせよ、是れ却つて覺めんとして迷へるものではないか。

羨むべきか、憫れむべきか

生活は人生の一大苦痛、此の苦痛の大部分を男性の肩に負はしめて、其の庇護の下に生存す

る權利を得來れる女性の歴史は羨むべきものである。多少の例外は之ありとするも、人類奮闘の歴史は男性の血を以て成り、文明の進歩も社會の發達も、亦皆男性の行ひを以て成る。婦人は晏然として奮闘の域外に離れ、額に汗せずして進歩の惠澤を受け發達の恩に浴す、誰か婦人の身と爲る勿れといふ、男子の外にあつて營々として働くの時、婦人は家にあつて安逸を貪り得べきでは無いか。されど束縛は人類の苦痛にして桎梏は罪囚の身に繋がるもの、女性の歴史は束縛の歴史にして、婦人の生涯は桎梏を脱する能はず、憫れむべしとせば之より憫れなるは無い。文明の進歩も社會の發達も、主として男性の努力經營に成るとは云へ、男性は常に自己を中心として自己に都合よき法律を造り制度を設けて女性を壓迫して居る。新しき女の此の桎梏を脱し束縛を離れんとするは、寧ろ同情すべき叫びではあるまいか。しかし此の桎梏といひ、束縛と見るは一種の僻見で、其實、彼等を庇護せんとする好意に出でたるものではあるまいか。彼等が此の庇護を脱する時は、自から生活の渦中に投じて其の苦楚を嘗めざるべからざるの時ではあるまいか。生活の苦楚は甘んじて受くべし、自由の束縛は忍ぶべからずといふ、

是れ人類自然の要求、此の要求に對して吾人は不服を唱ふるの權能は無い。たゞ纖弱なる女性の身が能く男性の手を離れて獨立の計を營み得るかを氣遣ふ婆心と、此事が果して社會全體の爲め、男女兩性を通じての福利なるや否やの疑ひが残るのみである。

生活の獨立

今の女は昔の女のやうでは無い、昔の女の職業は僅に男性の手助けたる副業か、洗ぎ洗濯針仕事の如き家庭的のものに過ぎず獨立の生活を營むには微弱なものばかりであつた。若し家庭以外に活躍するものありとせば、それは男性に媚を呈する賣笑婦の類のみであつたが、今は女の職業は家庭より離れて社會的なるものが多くなり、從來家庭的なりしものも近代科學の進歩は機械の發明となり、大工場の増加しては女子も出でて之に通ふこととなり、一面生活難の逼迫は、女性の生活をして單に男性にのみ頼らしむることを許さず、着々男性の領域を浸染して女官吏も出來れば女事務員も生じ、女醫者も出來れば女教師も出で、女子の活動方面は次第に増

加し、男性の手を借らずして獨立の生計を營み得るものも多くなつた。よし獨立とまでは至らずとも、生活の全部を男性に仰がざるを得ざりし境涯から脱離し得た。是れやがて女性の權利の漸次に擴大し來つた原因で、彼等は男性の庇護なくとも自由に生活し得るに、何を苦しんで永く男性の桎梏の下にあらんとは其の自覺を助けた有力なるものであらう。實力のある所即ち權利の存する所で、生活の安固は其の主張を自由ならしむるは、養蠶の盛なる地方に女天下の稱あり、収入多き女髮結の亭主を尻に敷くもの多く、持參金ある花嫁の跋扈し給ふにても其例を見ることが出来る。平政子は昔の覺めたる女であり、淀君は昔の解放せられたる女であつたらう。彼等が諸將を操縦したのは有形無形の實力が彼等に存したに外ならぬ。今の女は次第に此の實力を得來らんとす、其の主張の昔の女の如くならざるは當然である。殊に女性の周圍を圍繞せる社會の風潮は次第に不平等不自由の打破せられて、制度、法律、習慣、道徳、すべての上に不平等なるものは斥けられ、個性の自由は一切の上に承認せられんとするに於ては、如何に時勢と没交渉に進み來れる女性の身にも此の自覺の萌し來れるは止むなきの數である。一

葉落ちて天下の秋を知る。今日の所謂新しき女の運動そのものは微々たるものであり、或は一時の奇矯的反抗や、又は歐米思想の模倣傳播もあるであらうが、中には眞面目なる要求の宿りて、來るべき時代に於て是等の思想、是等の運動の社會の表面に現れ來るのは免れないことであらう。吾等は一時の妄動として笑殺するなく、徐ろに人道の大義に則り、社會の利害に考へて此の問題に注意を拂はねばならぬ。

嚴なるべきか、寬なるべきか

よし生理的素質の差はあれ、女も亦男と同じく人である。男の都合のみを主として女子と小人とは養ひ難しとして無視すべきでも無ければ、始末にをへぬ動物として排斥すべきでも無い。其の生理的素質の許す限りに於て男と對等の權利も賦與し、同一の待遇を與ふるは人類平等の本義の上から當に斯くあるべきことであるが、さて新しき女の此の要求は男の如く寬にせよといふのか、男をして女の如く嚴ならしめよといふのか、法律の上にも社會の制裁に於ても、

今日の所、女に嚴にして男に寬なるは明白なる現象で、有妻姦は嚴罰せらるゝが、有妻姦は隨所に行はれて咎めるものも無い。蓄妾は男の働きとして寛容せられても、女のかゝる行爲は嚴密に制裁せられざるは無い。等しく人である、女のみ斯の如く束縛を受くる理由は無い、男の如く自由に解放せられたしとの請求であるならば、之は由々しき大事である。倫常地を拂ひ、社會の秩序は紊亂せられ、文明の社會をして野蠻の昔に歸らしめ、人をして獸の如くならしめんとするもの、吾等は極力之に反對せざるを得ない。併し男の制裁をして女の如く嚴ならしめよ、有妻姦を罰すること有妻姦の如くならしめよ、男の蓄妾を責むること女の放縱を責むる如くならしめよとの請求ならば、多少研究の餘地が其間に存するとしても、大體に於て吾等は當然の主張として社會的覺醒を促さざるを得ない。しかも今の婦人、自己の解放を云ふに急して、此の當然の主張を閑却するは寧ろ奇とすべきである。

社會的活動

かゝる性の問題にあらずして、社會的地位の上から立論して、男にも與へられたる參政の權利を女にも與へよといふ女子參政權運動なるものがある、英國に於て盛に活動せられて居るが、これ果して社會に福利なるべきか、女性自身に於て幸ひなるべきか。女性の政治的要求は其の唯一の味方たる男性を通じては遂げられないものであるか、國家の施設は女性を參與せしめて十分なる活動を爲し得べきか、現代の國家は武を以て立たざるを得ない。尙武の氣あるものは盛に、文弱の弊あるものは衰ふ。女性の參與は果して尙武の氣象を旺盛ならしむるに力あるか、文弱の弊を馴致するの恐れは無いか、吾等は之に就いて多く語るを要せず、目下女子に參政の權を與へ、女權を絶頂まで擴張せられたる芬蘭の現状を見れば足りると思ふ。芬蘭は一千九百五年以來婦人代議士を有して居る、しかし此國は軍隊のない國である。年々一千万マルクの金を露國に拂うて兵役を免れて居る國である。否、既に獨立の存在を失うた國である。これに近き那威は一千九百十年から婦人に參政權を與へた。此國は有名な劇詩人イブセンを出し、新しき女の模範たるノラやヒルダやヘツダは此の詩人の筆から現れたのである。しかも其の國

勢は如何、何人も隆々乎たりとは云ひ得ぬではないか。吾等はたゞ一二の例に於てのみ云ふのではないが、今日の文明の程度に於て女子の參政は其の時期では無い。さすがに此の問題は未だ日本に於て盛に唱道されて居らぬから詳論を避けるが、此の如きことをせずとも女には女の務があり、女の當然爲さねばならぬ本分がある。其の本分に立脚して優に男性を凌駕する活動を演じ得べきでは無いか。

女たるを知れ

女性の生理的素質の家庭的である一事は、種の存續に對する其の本分を全うせしむる自然の暗示ではないか。哺乳育兒のこと誰か之を小なりとする。かくて人類の第二世は女性の手によつて造られ、次から次へ永へに續けらるゝでは無いか、將來の社會は女性の手によつて運命を決せらるゝでは無いか、殊に近世生活難の逼迫は男性の外に出づること多く、家庭のことは一切女性の手に委ねざるを得ざるやうになつたでは無いか、此際此時、何の暇あつて外に何つて

勤かん、家庭の中に女の大任はある。かく云へば、或はこれをも男性が女性に強請する束縛であり、桎梏であると云ふかも知れぬが、それでは此の社會に何うしようかと云ふのか。社會のことは如何ともあれ、自己のみ自由ならば則ち足れりと云はゞ是れ自己自から其の存在を危くし、女子と小人とは養ひ難しとの言を實現するものでは無いか。眞に覺めたる女は此の如きものではあるまい。社會にはまだ、男性の及ばざる所に女性の盡すべき道は幾許もある。男の領域を侵さずとも女は女として發展すべき餘地がある。家庭内助のことは別とするも、生存競争の激甚なるに従ひ社會的病弊益々多く、これが救濟的計畫は女性の特色たる慈仁の手に頼らざるべからざるものが多い。女性はこれによつて外より男子を助けざるべからず、内助外助、女子の責重く任大。而して永久の女性の特色は此に存する。

迷へる女、汝は人たるに覺むると共に女たるに覺めよ。女たるに覺むる時、そこに男と比肩して相下らざる權能あるを自覺せん。(癸丑五月)

戰爭五題

戰爭

人類の歴史は戰爭の歴史、往古今來、矢たけびの聲、耳に絶えず、旌旗、風に翻らぬ日とはなし。偶々小康を得るも亦これ一種の休戰状態、陣容備はりては旗鼓相見え、糧食足りては兵火相接す。魚鱗鶴翼、山河を彩り、虎嘯龍蟠、天地を震動す。嗚呼、人の世は惡魔に魅せられ、人の心は殺氣に捕はるゝか。血の洗禮は平和の假相を剝奪し、刃の福音は文明を粉飾す。蘇東坡いふ、「兵を好むは猶色を好むが如きなり。生を傷ふこと一にあらす。而して色を好むものは必ず死す。民を賊すること一にあらす。而して兵を好むものは必ず亡ぶ、これ理の必然なるものなり。夫れたゞ聖人の兵、皆己むを得ざるに出づ、故に其勝つや安全の福を享け、其の勝たざるや意外の患なし」と。人生の戰場、此の如くにして漸く禍なきを得んか。

一指頭、世界を動かす

吾等は曾て屢々小の必ずしも小ならざる所以を説けり、一波動いて千波萬波。現下の歐洲動亂に於て更に確實なる適例を見るを得たり。歐洲の動亂、否、世界の動亂たる空前の事變は、其もと塞比亞人の奧太利の皇儲を暗殺せるに挑發せられて、塊先づ動き、獨之を助けんとし、露之を防ぎ、佛又獨を敵とし、英も亦之に與みし、白は其の獨立の危害せられんとして敢然として立ち、伊も動員し、土も亦戰鬪準備を怠らず、餘波は遠く極東に及びて、我國も亦義に由つて立つ。正に是れ世界を動かすもの、而して其の導火線たりし暗殺の一舉は、刺客の手にせる短銃に一指頭をかけたるによるに外ならねば、一指頭直ちに世界を動かすといふ、誰か妥當ならずとせん。小終に小ならず。吾等の修養は常に此點に着眼するを要す。

世界的知識

日清戰爭に於て支那を理解し、日露戰爭に於て露西亞を理解し、一事變起る毎に吾等の知識は一段を進めり。歐洲の何れに國するか、其の所在をも一般には知悉せられざりし塞比亞、今や世界動亂の禍源として視察せられ、これに比隣するブルガリア、モンテネグロ又邦人の話頭に上り、英佛露獨等列強の實力は目前に展開せられ、邦人の世界的知識に一段を加ふる今日より宜しきはなし。世の通俗教育に従事するもの、常に機に應じて教化の實を擧ぐるを忘るべからず。由來邦人に缺如せるものは此の世界的知識なり。たゞ紋切形の國民道德を説き處世の要旨を示すのみが通俗教育にあらず。

熱狂なる勿れ

戰爭は人をして熱せしむ。熱するは可なり。此の熱情によつて敵を伐つべし。されど狂して其の理性を没却し、憎むべからざるを憎み、公憤を私情に用ふるが如きは斷じて不可なり。我が帝國は今や義によつて立つ、我が國民も亦此の公義によつて立つを忘るべからず。

頼むは實力あるのみ

平和の時には外面を糊塗して、其の實力を粉飾し得べきも一旦事破れて赤裸々にして兩々相對す、糊塗も用を爲さず、粉飾も其效なし。頼むは其の實力のみ。此の一事は以て吾等の處世の要訓たり。世は國技館上の相撲のみ。實力以外何の優劣を決すべきあらん。力の充實、これ國に於ても人に於ても自から立つの基礎、これを外にして頼む所あらんとするものは覆滅のみ。失敗のみ。(甲寅十月)

時事漫言

人生の興奮劑

何人か無限の時間を刻して年とし月とし日とする、人生若し曆日なくんば、生れて長じ、長

じては老い、老いては死す、たゞ死生あつて年齢なし。悠々たり葛天氏の民、人智徒らに累を爲して日を劃し、月を劃し、又年を劃す、劃し劃して自から悲しみ自から苦しむ。しかも、吾等は之によつて、屢々發奮の機を得、改過の時を失はず。歳晚は終歳の決算期、一臯よのほほんどころか年の暮、吾等は慚愧と悔恨とに満たされざるを得ず。しかも是れ人生の興奮劑。曆日の區劃、偶爾ならず。

たゞ二途あるのみ

吾等が艱難に遭遇したる場合、これに處するの道は、たゞ二途あるのみ。一は仕方なき運命として之を諦むるか、更に活手段を講じて之が脱離の方法を畫するか、其一を擇ばざるべからず、禍を轉じて福と爲すは英靈漢の手腕。施すに術なくんば甘んじて之を受けんのみ。徒らに煩悶し懊惱する痴兒の行爲は大丈夫の斷じて避くべき所。

守常の士

春日潛庵いふ、「大海時ありて狂瀾を起し、大川時ありてか横流を生ず、區々として常を守るの士、以て語るに足らず」と。時に狂瀾あり横流あり、以て意氣を壯にするに足るも、たゞ狂瀾と横流とに腐心して常を守るの忍耐なきものも亦以て語るに足らず。

妥協性

現代國民の弊は、餘りに妥協的なるにあり、相和すべくして和す、これ人性の美所なりと雖も、和すべからざるに和して一時を糊塗し、目前を瞞過するは是れ却つて禍を伏する所以、雷雨一過して山更に青し。争ふべきは争ひ、相争うて、而して天空海淵、眞の妥協は此後にあり、誠心ある握手は此に初めて成るべし。一時の權略による政治家の妥協は、よし許すべしとするも、信仰を持つて立つ宗教家が直ちに異教徒外道と妥協せんとするは斷じて不可なり。

相争ふべし

争ふべきは大に争ふべし、しかも相互に理解して、其争ひを君子たらしむるは吾等の忘るべからざる所。從來、異教徒に對し外道に對し、たゞ其の醜所惡所を摘發するを知つて其の美所長所を認容するを知らず、此に於て其争ひや燥狂に失す。是れ君子人の避くべき所。近時世論に上れる宗教家會合が一時の妥協に出でんとするならば害あつて利なきも、單に相互に理解せんとする誠意に出づるものならば又有害の擧にあらす。

神社は宗教にあらず

聞く、頃者基督教の一派に神社崇拜に就いて疑義を挿むものありと、神社は神道にあらず、國家の奉祀する所、之を宗教と同視して疑義を挿むものは、信教自由の名の下に大廟の崇敬をも拒絶せんとする思想を助長せん、我が國體の賊なり。又、聞く、神道者流、神社を我が物顔

として之を自家の宗教中に混入せんとすと。神社と神道との別は厳として國法の規定する所、其の管轄を異にし、其の奉祀を別にす。之を混するものも亦反面より我が國民思想を毒するものなり。

政 教 問 題

政教問題は維新以來未決の問題なり、一たび歴史を無視して神佛耶の三教を同一列に支配せんとしたる宗教政策の失敗に歸したるは人の知る所、今後、宗教としては之を如何に區別すべきか、又は同一視すべきか、神社と神道との混同すべからざるが如く、寺院と佛教とを分離し、寺院は過去の記念物として之を保留し、佛教を宗教として別に取扱ふべきか、慎重なる考量を要すべきものたると共に、佛敎家も亦寺院制度を變更して教會制度と爲すべきか、歴史的習慣たる寺檀の關係を撤廢して信徒と教會との關係たらしむべきか、教團組織の改革に着目するを要す。

宗 教 と 教 育

學校以外の教育は目下通俗教育の名の下に熱心に企劃せらる、此の教育に於て閑却すべからざるものは、宗教の勢力なり、宗教は深く人心の秘奥に入る、教育家の之と分離して社會教化を計る能はざるは當然なれど、現代の宗教が果して悉く提携し得るものなるか、通俗教育は學校教育の擴張なり、新來の宗教の中に國民道德と相背くの思想を含むものあらざるか、舊來の宗教の中に知識の發展を阻害する迷妄の信あらざるか、教育家の考量を要すると共に、宗教家の反省を促さざるを得ず。

政 界 の 墮 落

最良の政治は最良の政治家を得たる獨裁政治なり。しかも人に純全を求め難く、已むを得ずして多數政治を産み來る。多數政治は理に於て公明なるべきも、人々黨あり、達者少く私黨に

偏し私利を計り、其極國家の大計を誤るに至る。多數政治の弊は今や曝露せられたり。議會の喧々囂々、吾等其煩に堪へず。政體に罪なく、罪は人にあり。現代に於て尤も進歩したる政體に於て尙此弊を見、人をして却つて過去の專制時代を追懷せしむるもの、其罪斷じて輕からず。舊態に於ける議會の質問戰、問ふものに誠意なく、答ふるもの亦一時を糊塗す。此の如くにして如何か憲政の美を發揮すべき、國士を以て任ずるもの當に此の如くなるべからず。心に國家百年の大計を湛え、身を以て一國を率ゐる、言々誠意に出で句々眞面目を離るべからず。輕佻浮薄、一國政治の源頭に泥塊を投じて之を溷濁せしむるもの、神人共に許さざるの大罪惡たるを自覺せしむるを要す。

不親切なる國民

頃者、歐米より歸來せる客の語るを聞く、日本の製品は如何にも華麗なり、しかも其の使用さるゝに従つて不親切の曝露せらるゝ多きに驚かざるを得ず。日本の玩具と獨逸の玩具と其の装

飾に於て日本の優ること多きも、壞るゝことの速かなるに於ても亦優る多きを悲むと。製品は一國の代表なり、堅實なる國民は堅實なる製品を出し、不堅實なる國民は不堅實なる製品を出す。外見を飾りて内實を缺く、此の輕佻の風にして一掃せられずんば、一國の品位は沒了せられん。

婦人の活動

深閑に閉居して世の風塵に觸れざりし婦人が、人としての使命を自覺し來れるは慶すべきの事實なるも、自覺せる女の名に放縱なる生活を敢てし、同權の主張の爲に秩序の破壊を敢てするは褒めたることにあらず。佛獨の婦人が男子の缺乏より男子の業に代り、男子をして戦線に立たしめたるは嘉みすべきも、露の婦人が娘子軍を編成して戦陣に臨まんとするは賞すべき擧げにあらず。之に對して露國皇帝が婦人自から婦人の任あり、能く家庭を整理して後顧の憂ひなからしむるは出陣に等しき偉業なりとて諭止せられしとの電報は頗る我意を得たるを覺ゆ。

火災道徳

近來、火災頻々として行はれ、市街の地焦土に歸するもの少からず。これ何の因ぞ。人家の無制限に構比するも其因なるべく、生活の困難より放火を企つるもの少からざるも其因たるべけれど、都會の地には借家の多くして家屋に對する責任の感あるもの少く、よし家屋を有するものも、火災保険の約あつて焼失に苦痛を感ずることの薄くなれるは更に大なる原因なるべく、火を失しては之を消すことを思はずして先づ自己の家財を持ち出さんとする自利心の、終には累を他に及ぼして延焼の災を大ならしむるものも亦與つて力なしと云ふべからず。こゝにも人情の稀薄は現れ、道徳の必要は迫る。消防の事、もとより百般の施設を要すべしと雖も、此の人心の根柢に斧鉞を加ふるも亦今日の急務ならずや。

百年の計

人、須らく一生の計を立つべく、國家、須らく百年の計を立つべし。國家にして百年の計なく徒らに外界の刺戟に適應するのみを事とし、自から何等の目的なく計畫なく、世界の趨勢に左右せられ、列國の行動に支配せられ、一時的間に合せの政策のみを以て、其の時々を糊塗せんとするは、自から其の存在を危くする所以、吾等は我が帝國の政治家が果して此の百年の大計を劃するや否やに疑ひなき能はず。政治家の壽命は限りあれど國家の生命は限りなし。内閣は變移すべきも、國家は永久不動ならざるべからず。變移すべき内閣の政綱なるものは空文ながらも、屢々之を見る。永久不動なるべき國家の前途に就いて百年の大計を明かにしたるものは之を聽くなきを悲まざるを得ず。一時的なる利害に着目して永遠の計圖無きものは亡ぶ。維新の宏謨漸く成りて今は世界の強國と比肩し得るに至れり。此時、此際、我が國家が立脚の地を明かにし、國民を指導するは最大急務にあらざるなきか。

經世の眼光

所謂群小政治家なるものは、起り來る時々の問題に就いて喧囂するのみ。百年の計に至つては風馬牛相關せず。學者深遠の思慮能く百年の計を考ふ。然れども彼等又經世の眼光なく之が實行の方策に於ては何等世と相渉るなし。政治家須らく學者的の思慮を費し、學者須らく經世の眼光を持ち來つて初めて世を指導し得べきか。

都會病より海外熱

地方青年が都會を憧憬することは、殆ど思慮の外にあり。然れども、今日の如く交通の簡易なる世にあつては、都會と田舎とは漸次に接近し來り、天國の如くに夢想せる都會の風は汽車の輪と共に田舎に訪れて、先づ小都市、小都會より町々村々に吹き荒び、また都會を憧憬するの要なし。吾等は此の地方青年の都會病を一掃し、寧ろ更に遠き海外に眼を注がしめんことを欲す。國は小にして人は多し、徒らに都會に集注して同族相食むの窮狀を繰返して何とかする。世界は廣し地廣くして人少く、しかも遺利の拾ふべき少からず。南洋の島々、南米の地、

行くとして可ならざるはなし、それをしも遠しとせば我が殖民區域たるべき朝鮮滿洲の天、更に近くは北海全道樺太の廣野、尙人の努力を待つて開發せらるべき餘地を存す。勞少くして功多からんとする都會病は人心を萎靡せしむ。海外熱は其の氣宇を擴大ならしむるの點に於ても功多きにあらずや。(甲寅一月—十二月)

東洋思想の復活

物質文明に酔ひ、科學萬能に飽きたる歐米の天は、自からなる思想の反動として唯心に傾き精神生活の甘味を嘗めんとし、オイケン、ベルグソンの歡迎せらるゝもの所由なしとせず。しかも彼等のいふ所は、我が東洋に於て既に唱道せられたる所と其の歸結を同じうす。たゞ彼は整然たる秩序を保ち、研鑽の歩武を進めて之に入り、此は深奥なる思索の結果として現れたるもの、此の獨斷的なるに反して彼は實證的なり。之の演繹的なるに反して彼は歸納的なり。西洋の思想は到り盡して東洋の歸結に入り、東洋思想は西洋の研鑽を待つて初めて價値を有す。

今や東西の思想融合して、泰西人の齒牙にも掛けざりし東洋思想は復活し來り、新しき解釋が此の舊き歸結に加へらるゝもの、以て彼の思想に深きを加へ、これが思想に正しきを添ふ。ただ我が日本人、自家の寶藏を抛却して徒らに他の寶を算し、我が思想を逆輸入せられて其の新し味に渴仰せんとするは、寧ろ其愚を表白するものにあらずや、西人、其手を觸れざるに先づ其眞を發揮し、彼未だ云はざるに我これを唱ふるの奮發なくんば、常に他の後塵を拜して自から半文錢なきに到らん。近時流行の寵兒たるタゴールの如きも、其の云ひ現しに新し味あるべきも其の思想は吾等の奉ぜる大乘佛敎に何の加ふる所かある。彼の西洋に唱傳せらるゝ所以を思へば、我が想界一人の偉才あつて大乘の眞義を提唱せば、世界の思想に貢獻する所少からざるものあらん。氣運は熟せり、誰か手を染むるものぞ。

節義

士に貴ぶ所のものは節義のみ。萬人之を非とするも、自から信する所に向つて斷々乎として

憚らず、毀譽を超越し、褒貶を度外視し毫も所信を枉ぐるなき所に、其の貴ぶ所あれ、漫りに權勢に阿附し利祿に眷戀し、平生の主義を抛ち、所信を棄つるものゝ非なるは云ふまでもなけれど、徒らに毀譽褒貶に顧慮して云ふべき所を云はず、行ふべき所を行はざるものも亦無主義無節操の徒たるを免れず。

學者と常人

學藝の發達いよく盛んにして、専門の分科益々多く、學者各其の一を執つて蘊奥を究め、淵源を悉さんとし、常人知識の水平を跨跳すること遠く、専門に没頭するものは直ちに以て常人を教化し難く、常人も亦専門の知識を得るの豫備なし、學者と常人と隔離して學者愈々精しく常人益々疎し、これ豈社會全般の慶事ならんや。兩者の間を疏通し、専門知識を通俗化するものあつて初めて社會知識は健全の發達を遂ぐべし。教育家の任、實に此に在り。(癸丑三月)

修養の感興

追 懷

今年も亦暮れぬ。誰か歳晩に臨みて多少の感慨なからん。此の感慨は常に追想を伴ふ。過去三百六十五日を追想して事の志と違ふを悲むも人情なれば、半生の事業を回顧して砂上の樓閣何の爲すなきを叩つても亦人情なり。漫りに追懷を以て愚人の行爲と傲す勿れ。追懷も何の功なきが如しと雖も、吾等は之によつて反省しつゝ過去の一切を整理して將來の覺悟を定めんとす。蓋し追懷は發展の第一歩にして、之あるが故に立脚殊に鞏きを覺ゆ。追想せよ、回顧せよ。其處に悔恨の涙あつて汝の前途を洗滌せん。されど徒らに追ふべからざるの過去に煩悶して、來るべき新天地に想制せざるものは怯者の繰言、吾等の斷じて取らざる所。吾等は追懷によつて、過去を整理し、其の繁累を去り、紛擾を解きて、向上の道途に利便ならしめんとする

のみ。向上の心、一たび沮まば、生きながら墓中に埋れ去られん。吾等は尙生きたり。更に生きざるべからず。生きるものは之をして意義あらしめざるべからず。吾等の苦悶は、如何にして吾等の生存を意義あらしむるかにあり。それが爲に追想し、悔恨す、偶々以て發展の途を助くる所以たらんのみ。

試みに半生を追懷し見よ。吾れ我が志すまゝに行ひ得たること幾許かある。多くは他の刺戟によつて動き、自からなる衝動によつて運爲したるにあらざるか。已むを得ざるが故に食ひ、食はざるべからざるが故に働く、其の右し左することも亦皆已むを得ざるに出でて毫も自己の意志に於て決したるものなく、偶々自己の自由意志を以て撰擇したりとすることも、亦世間の手前、人の思惑をかねて躊躇逡巡し、其の決行したることを、常に他の爲に掣肘せられたるにあらざりしか。吾等は仔細に我が行動を追懷するため、我爲の我か他の爲の我かに惑はざるを得ず。此の如くにして人格の權威何れの所にあり、自己存在の價值抑も那邊に存する。終生

此の如く、たゞ營々として夢死す。これ實に悲むべきの一生にあらすや。

自己はこれ他人にあらす。自己の理想によつて他を左右し自己の情操によつて他を愛憫すべし、自己を没却しては生存の意義を失墜するにあらすや。無我は佛の教法なりと雖も、謂ふ所の無我は自己没却にあらすして、自己擴張なり。個々の小我を没却して普遍の大我に一致せしめんとなり。我を執りてしかも我を立つる能はず、妄りに他の翻弄する所となる、寧ろ悼むべきのことにあらすや。

鴻雁、尚去つて砂上に爪痕を遺す。人、生れて此の社會に何の足跡をも印する能はずんば、空行く雁にも劣らすや。五十の生命、早幾年をか剩せる、七十を以て常命とするとも吾等が自覺の時には半は過ぎ若くは過ぎなんとせるにあらすや。況んや七十古來稀なるをや。一日の空過は一生の不覺、一年の空過を何れの時にか恢復し得べき。烏兔匆々として人を待たず、

歲月徒らに過ぎて復歸らず、歳晩に當りて悔恨の胸に溢るゝは、愚人の痴情に似たりと雖も、是れ此の悔恨、やがて發展の動機とならざらんや。年の終る毎に悔恨し、一年又二年、かくて過ぎ行く人の身の望みは遠く、力は足らず。追懷はせめてもの慰藉にあらざるか。

一 小事業と雖も、一定の目的を立て、一定の計劃を定む。吾等が此の貴重なる生を送るに、抑も何の目的を立て何の計劃か定めたる。生を營むの計劃はあり、世を送るの目的はあり。されど此の一生を價値あらしめ、意義あらしむるの計劃と目的とは、滔々世間多く之を立つるなくして過ぐ。嗚呼此の如くにして、争でか天地の化育を助くる人類の責務を完うすべき。反省せよ、追懷せよ、吾等は更に新計畫の樹立せざるべからざるものあるを知らん。

希望は光なり。吾等は追懷の情いと切なる時には身も世もあられぬ思ひなれど、希望の光を認めて、こゝに慰藉あり發憤あり、吾等は常に梅花と俱に自から新なる生涯に入るの心掛

なかるべからず。かくて年々歳々、希望を辿りて歩一歩、人類理想の實現に貢献すべきこそ吾等の務めならめ。古人いふ「君子一日生くれば一日世に利あり」と、一日の生は即ち一日の世の利たらしむるの覺悟を以て初めて君子人たるべきか。

年々歳々、希望を以て迎へ、歳々年々、追懷を以て送る。送迎日々これありと雖も、逝くものは返らずして來るべき年には限りあり。人生五十、百年の憂ひを懷き、しかも夢消醉散徒らに我が老を忘る。「年月は返らぬものを我ながら驚かぬ身ぞ驚かれぬる」驚かぬ身と驚く所に覺醒あり、年窮歳盡、吾等を警覺すること些少にあらず。送舊迎新は人生の刺戟劑たり、吾等の興奮料たり。

孤寂の悲み

社會は生活の戰場、人は一個の戰士として此の戰場に立つ、嗚呼實に一個の戰士、然り眞に孤獨の身を以て四面敵の中に立たざるを得ざるなり。相識天下に滿つるも知心其れ幾人かある。徹底して我が味方を檢し見よ。全心を打ち明けて語るを得べき人何處にある。最も親しかるべき親子の間にも、親の心、子知らず、子の心亦悉く親に通ぜず、夫婦の間にも尙且つ多少の祕密無きを得じ。況んや兄弟は是れ他人の初め、否、他人よりも疎隔に過ぐるものあるをや。「親は泣き寄り」といふも親戚豈我心を知るものならんや。他の知人に至つては利あれば集り利無ければ散す。離合彼の都合にあつて我と没交渉なり、心細き哉。生活の戰士たゞ我が腕を頼み我力を頼むの外、何等依るべきなし。しかも非難の矢は我身に集り、攻撃の鋒は悉く我に向ふ。まことに是れ孤軍奮闘、如何か此の圍みを衝くべき、思はずんば則ち已む。思うて生活の現狀に至り、痛切に自己の境遇を察せば、何人も孤寂の悲み無きを得じ、人は獨り生れて獨り死す、生に始り死に終る。一生、獨去獨來、獨往獨歸、徒らに他を頼みては過ち多く、今までも味方と頼みしもの、何時か反旗を我に擧げ、力と継りし人の知らぬ間に心變りて我に袖無き

人の世、眞に我の外、何を頼むべき。此の孤寂の身を以て世路の難に處し人心の險に居る。口に奮闘を標榜し身に努力を實現するものも、獨り心に思ふの時、意氣頓に沮喪するは人生の閱歷に於て、しばし味ひ來るの事實なり、嗚呼何ものか能く此の孤寂を慰むべき、夫婦は形影の相伴ふ如く能く心を慰むといふ。しかも男女性を異にし、如何に情の濃かなるものも亦異性の全心を知り得ず、時には感情の疎隔、其の解するなきを恨むこと少からず。親子兄弟、其情に於て相知るべきものなりと雖も、年齢の差は老を以て壯を推すべからず、壯を以て老を付り難し。たゞ友、面友は云ふに足らず、心友、眞に彼、我を解し、我、彼を解し、妻にも語らぬ心の秘密をも打明けて慰め合ひ、親にも告げぬ心情を明して互に獎まし得べきあり。人生一人の心友あるは一人の味方あるなり。已に一人の味方あり是れ孤寂にあらず、天下皆我を誤解するも、一人の我を知るものあれば以て意を強うすべきにあらずや。

友は實に險惡なる行路の好伴侶なり。人生友なきほど悲しきはなし。孔子の、朋あり遠方より來るまた樂からずやの一語は孤軍奮闘の中に多大の應援を得たるの感とも味ふべく、ゼノ

の、友とは自己以外の自己なりといへるは眞に心友を語るもの。嗚呼友、これを外にして我を慰むべきものなし。されど世果して此の如きの友を得べきか。多くは是れ利害を以て集散し自己を以て他を律し、心合へば百年の知己の如く心離るれば仇敵の如し。人生の葛藤も亦多く友より生ず、如何に會心の友なりとも彼は彼にして我は我たり、其間嚴然たる區劃存す、徒らに之を頼みに失望せざるもの幾人ぞ。殊に人の心の變り易く、昨日までも親しき人の、不圖したる動機にて忌み嫌ふに至ること無きを保せず。我は彼を第二の我と頼めど彼の我を見る他人の如ければ、我心の悶え更に甚だしからずや。此友已に頼み難しとせば、我は畢竟孤寂の悲みを甘受せざるべからざるか。忌はしきは人生、情なきは人心、我は之を咀はざるを得ざるか。否、我は天地の一物、宇宙の一員、天地を離れて我なく、我を離れて宇宙なく、我は慈光周く互る宇宙の實在に抱かれ天地の恩澤に浴す。見よ、天覆ひ地載せ、日月照らさざるなく、雨露潤はざるはなし。草の葉に置く露も月影を宿し、軒にかゝれる蜘蛛の絲にも七彩陸離たる日の光を受く、孤獨なる我にも此に影を宿し光を受くべし。此の宇宙の靈光、天地の惠澤これ豈

佛の慈光、神の攝理にあらすや。久遠の光は我に加はり、永劫の慈悲は我に添ふ。人を相手とするが故に孤寂を啣ちたれ、佛神を相手とせよ、我心の奥の奥までをも見そなはして、慈眼は長へに我を護らせたまふ、何の孤寂をか悲しむべき。

我をひれ伏さしむるものは我を立たしむるの力なり。信仰あるものは力強き哉。彼の生活は孤軍奮闘にあらすして百萬の味方を得たるなり。宗教あるものに幸多き哉。彼の心を知るものは二三の友にあらすして法界に瀾淪せるなり。

病間病後

柳の枝に風折なく、生來健全と云ふにあらねど十二三年前、肺炎にて赤十字社病院の厄介になりたる外、さしたる病氣もなく、殊に毎年夏期には講習會の聘に應じて旅から旅の二月三月、身體疲れて綿の如きも講演に差支ふる程のことなかりしに、今年の夏は如何にしけん、秋田市

七日間の講演にいたく疲れて、翌々日は徳島縣に越く豫定なれば、少しは身を休めんと乗り馴れぬ一等車に投じて、秋田市を立ちしは夜の十二時過ぎなりし。横手、新庄、山形も夢の裡に過ぎて、米澤あたりで目は覺めたれど動くに懶く、そのまゝに福島、郡山と身を車の走るに任せ、正午も餘程過ぎたれば、食事せんとするに、如何にしても氣進まず、うつら／＼と眠りて赤羽に着し、山の手線に乗換へんとするに、ふら／＼として足許さだかならず階段を昇る危さ。やう／＼にして新宿に着し、俵を備うて代々木の寓居に入りたるまゝ行李投げ出して臥蓐に入りぬ。翌日は徳島に向はねばならねば、強つて起きんとすれど、岑々として頭痛み、熱もいと高く、家人も氣遣ふに診を醫師に請へば、こは尋常ならぬ高熱、今晚の出發思ひも寄らずといふ。こゝに心ならずも徳島行を止めることとなり、其の翌日は更に熱高く、翌々日も、翌々翌日も其通りなれば、徳島の次に行くべき島根、愛媛、廣島の各地を斷りて、身は全く醫師と看護婦との厄介となる病人となりぬ。

病中は絶對他力なり。起居動靜、悉く意の如くならず。初めは戸障子を力に歩みしものも、更に衰へては這ひ行くこともならず、寝返りのそれだに他人の力により、治するか、治せざるか、死するか、生きるか、たゞ醫師を信賴するの外なく、我執起らず、妄念絶え、一切を他に任せて、取捨撰擇の心もなし。人、此の如くにして初めて自然の懷に抱かるべきか。

一燈瑩の如く、看護人は晝の疲れに皆眠りたれど、終日半醒半睡の身の、夢破れては眠り難く、靜に越方のことを思へば慙恨の情更に深く、行末を思へば、快癒後の策畫一として新に向はざるなし。病氣は健康時の雜念を芟除し、夜氣は晝間の妄想を枯亡す。

病みて殊に深く感じたるは友人の温情なり。我、生れて弟兄なく雙親既に老いて、兒尙ほ幼、今日までの事業、多く友人の助力に待つ、しかも疎懶、時に友誼に背き、怠慢、常に交情を缺く、幸ひに知友の我を棄てずして、鞭撻し誘導するあつて、漸く蠢動を社會に試むるを得たり。

我、今、病む。療養の費差支ふるなきやと氣遣うて助力を與へられしも友人なれば、醫を送りて快癒の速かならんことを計られしも友人なり。或は遙に書を寄せて之を慰め、或は忙中閑を偷んで半日を不肖の爲に費さる。持つべきものは友、何ぞ又人生の孤寂を悲まむ。

高熱に苦むこと三週日、其後も熱に高低ありたれど、漸次恢復期に向ひて、藪中に坐して友と語り、幾もなくして枕頭の書を繙き得るに至り、四週日の後には漸くに獨立して數歩の所を去來し、室内より室外、庭に下りて、咲き亂れし夏艸の中を逍遙し、一步門前に出でらるゝに至りては、數歩より十歩、十歩より數十歩、終に早曉露を踏んで代々木の原に赴き朝霧の次第に薄れ行くに興じ杖を力に門を入れば、家人漸く眠りより覺めて、後園の朝顔、五つ六つ咲き亂れぬ。

病後の衰弱甚しければ、轉地してはと勸むる人のありたれど、十有餘年、夏といふ夏、我家にありしことなき身の、しかすがに我庭の夏の樂て難く温泉樓上の一室に窟屈な思ひをする

より起居自由なる我家に、睡り來れば眠り、醒め來れば覺め、心のまゝに保養せんと、朝夕の散歩の外は、門を出でず、獨り臥床の上に彼の白居易が

人人避暑走如狂。

獨有禪師不出房。

不是禪房無熱到。

但能心靜即身涼。

の眞趣を味ふ。

○
醫藥に親みし二月ばかりに、夏はいつしか名残を百日紅にとどめ、秋は早や萩の葉風に訪れて、其間に約せしこと、何一つ果さず、今日も亦逝きぬ。幸ひに病魔の既に去るあり、いざさらば微力を世に捧げ、餘生を活社會に投ぜんか。

○
終りに臨みて慰問をたまはりし諸賢并に醫治に力を盡されし、杉山、奥山の兩醫、長谷川下クトル、二木博士の健康を祈る。(甲寅八月)

梅花箴

窓外 梅一枝吾等を啓發すること殊に多きを覺ゆ。「今より克己猶ほ應に及ぶべし、願はくは梅花と俱に自から新ならん」日新の工夫は是れ向上の一路、修養の要訣これに過ぎたるはなし。

○
古來梅を以て悟道をいふもの戴益の詩を推す。

盡日尋春春未到。

芒鞋踏遍隴頭雲。

歸來笑撚梅花嗅。

春在二枝頭已十分。

心裏の靈光、これを他に求めて得ず、盡日隴頭の雲を踏破するとも、距ること遠くして遠し。之を自己に返照する時、春は枝頭にあつて已に十分、求めよ、さらば與へられん、されど是れ他に求めて何の得る所かあらん。

個々良心あり、人の性や善。

折りて後貫ふ聲あり垣の梅。

何ぞ其初めに之を請はざる。

三十一字、我が國民性を顯現す。

勅なればいともかしこし鶯の

宿はといはば如何に答へん

典雅中に崇敬あり、婉約の中に情致を存す。

霜雪を凌ぎて百花の魁たる花兄、これ先覺の士の苦辛を語るものにあらずや。

方鳥山が

凜凜氷清巔壑氣。

亭亭玉廣立堂身。

従前誤把三瑤姬比。

雌了梅花俗了人。

といへるもの眞に能く梅を知るもの。瑳珣たる枝、蟠屈せる根、何の雌了をか許さん。

若し夫れ清香に至つては、彼の菊池三溪が、萬梅林立す、徘徊顧望之を久しうすれば、衣襟鬚眉悉く香しく、苔も亦香しく、石も亦香しく、水聲も香しく、鳥語も香しく、俯仰上下、物として香且つ白ならざる無しといへる如く、人を清殺し、香殺し、淨殺し、薰殺し去る。

宋人、謳うていふ。

冷艶寒光月寫眞。

偏宜雪裡不爭春。

梅花因果如何受。

處士清高是後身。

清節を持して高く世人を下瞰す、處士これ梅に倣ふか、梅また處士を學ぶか。

○ 其雪を得たるは盤根錯節、尙ほ持すること堅きが如く、其月を得たるは高士の世に出でたるにも比すべきか。

東坡が

梅雪争し春未二旨降。

騷人閣筆費三平章。

梅須遜雪三分白。

雪却輸梅一段香。

士は錯節に於て其の清節を試むべく、梅は雪を得て香更に高し。若し夫れ、其月を得て

紙窓窓上月徘徊。

即得窓前弄影梅。

何似三開窓放三明月。

和香和影一時來。

○ 光景に至つては、人生尤も意を得たる所。

○ 梅花、靈あり。方秋崖の

去歲賀猶未三十分。

今年方是十分賀。

因詩揆得賀方好。

只訴梅花不訴人。

○ といへるもの梅花一様の香、我が賀首を微うす。

梅花一様の春、人心自から兩般。

梅遠近南すべく北すべく (蕪村)

梅花簾あり、採つて以て資とせん。(甲寅二月)

眼前小景

蝶 二 一 つ

夜來の雨いつしか止み、薄れ行きし雲も且つ散り且つ消えて、空は一碧拭ふが如く、窓に青

葉の影さして庭前の新樹日を受けて清し。と見れば枝々葉々、尙ほ露を宿し、空は光を宿して其玉の、碧に黄に紅に閃き、枝より枝にかけ渡せる蜘蛛の糸の見えわかぬ織細きにも七の色ゆらめくを花とや見しか蝶二つ、離れては合ひ、合うては離るゝも、春の名残の偲ばれて、少庭自から小庭の趣きあり。眼前の小景、宇宙の眞、一葉頭上、天地の美、昨日まで木の間に見えし富士の根の庭の茂みに隠れしは遺憾なれど、積翠我が家を掩ひて世の塵を絶ちしぞ興深き。こも亦人生の妙と見るべからずや。(癸子六月)

春風

東風隨所に芳華を起し、楊柳依々として綠將に成らんとし、野邊の嫩草、烟るが如くに萌え出で、霞たなびく山々には、花曇りかは白雲の徂徠ひて、春風一夜山河喜色を帯ぶるも、吹き渡りては又散り行く春のあはれあり。世間公道須らく春風を推すべし。朱門白屋其の別を忘れ、賤が伏屋の佗住居にも、鳥謡ひ蝶舞ふの樂みあれば、權貴が後園の櫻狩にも落英繽紛の

哀みあり。謂ふ勿れ、人生禍福の事。笑うて春風の面上を吹く如く、隨所隨時に生意あらしめて漸く可なるにあらずや。(乙卯三月)

春色園

山は淡靄を罩みて錦を包むが如く、地は芳野烟りて氈を布くに似たり。雲雀鳴く野に陽炎のたちそめて、花間に蝶の二つ三つ。泥香しくして燕子銜み、江暖かにして鴛鴦眠る。千紫の色、萬紅の錦。天地粉黛を凝らして春色正に闌なり。年に此の好時節あり。人に青春の存するあり。憾む。年々春去り春來るも、人生の花季は一たび去つて復來らず。年毎に老い行きて春を惜む涙轉た滋きを。たゞ意氣の齡と消磨せざるを保ち得て心胸長へに春なるを得んか。花の春は逝く、されど心の春は不斷に花咲き常住に匂ふべし。修養一段を要す。(乙卯四月)

花王

満天の新緑、満地の苔、中に黄金の蕊、紅玉の房、百花に殿して春を送る花玉の風姿堂々と
して芳香を放つあり。此花、由來富貴を以て擬せらる。彼人知らぬ深山の奥に開かずして後庭
重欄の下に咲き、「蓬生の露もひとつの深見草、げに草の戸に惜しき色かな」、賤が伏屋に相應
しからずして「金屏のかくやくとして牡丹哉」立廻したる金屏の前に美人盛装して端坐せるが
如く、大輪の白く抜け出でたる、野趣に乏しと雖も、氣品自から高きものあり、大丈夫生れて
野人の友たる能はずんば、退いて此花の氣品を貴ぶも興なきにはあらじ。(乙卯五月)

臘 八

自然は外より我に默示して隠すなく、心は内より我を促して、機を得て送り出でんとす。し
かも我自から我を味まし、我自から我眼を閉ぢて、示されたるものを見ず、出でんとするもの
を抑ふ、迷へる哉人。三千年前大聖あり菩提樹下に端坐し寂然として宇宙を觀す。風雲去來す
れども眼を遮らず、心魔跳梁すれども心を止めず、驀直に法を求めて宇宙を體讀し、心性を諦

觀す。風死して樹靜に、夜深うして群動息む。漏は移り刻は進むも、念頭もとより時空の感な
し。たゞ見る、天色漸く曉ならんとして臘八の明星燦として輝くを。此時、世尊と盡大地
と、明星と靈機と映發し渾融して豁然として天地明かなり。大法長く久遠に亙り、教化四海
に遍し。嗚呼たゞ一點の明星、其人を得ては千古を照破す。求めよ、自然。抑も何の隠す所
かあらん。

達觀の氣風

今の世は分業の世なり。今の文明は科學萬能の文明なり。業を分ちて個々枝末に専らにして
大體を忘れ、差別の現象を探究して概括の精神を逸し、小事些事に没頭して達觀の氣風なし。
専門の研究もとより必要ならざるにあらず、部分の熟練もとより貴はざるにあらず。されど部
分の爲に全體を棄て、専門の爲に常識を失却するも亦喜ぶべきにあらず。これを人事の紛糾に
見るも、今人は小事實、小問題に焦慮して大事を誤る。達觀せよ、天地は大、大處に着眼して

小處を下瞰す。何事か快刀亂麻を斷つ如くならさらん。人須らく「振衣千仞岡、濯足萬里流」の氣節と「天空任鳥飛。海濶從魚躍」の度量あるを要す。小事實小問題に齟齬たるもの其れ何をか爲さん。(甲寅三月)

熱殺録

寒時寒殺、熱時熱殺、逆順縱橫、與奪自在、何の寒暑か是れを回避せん。熱湯に浴し來つて涼味掬すべく、冷水浴し去つて體の温かきを覺ゆ。心をもつて境を制すべし、境をして心を制せしむるなかれ。

事を決する癡を斷つが如し、多少の痛苦は之を忍ばざるべからず。薄志弱行、右顧左盼、嗚呼抑も何事をか成さん。

「大名とあふがれながら暑さかな」汝、暑を殺了せずんば暑は汝を悶殺せん。

心頭を滅却すれば火も亦涼し。火豈に涼しからんや、心頭の涼味これを殺了するのみ。

冷眼世上を見る是れ脫俗の人、熱時に熱殺して却つて志士の本領を見る。

「石も木も眼に光る暑さかな」此の炎蒸の中、志氣の迸り出づるを思ふ、其の愛すべきは此にあり。

驟雨一下して暑熱を拂ふ。「大海時に怒濤を生じ、大河時に横流あり、區々常を守るの士、共に語るに足らず」と。先人我を欺かず。(壬丑八月)

感興錄

理解は客觀性を有す、理解を以て破るべし。信仰は主觀的個人的なり、他より變易せしむべからず、主義は他に向つて説くもの、又他によつて變ぜらる。趣味は個人的主觀的なり、變ぜしむべからず。主義としての信仰は危し。これに趣味を有し來つて初めて力あるを覺ゆ。

我をひれ伏さしむるは吾を起たしむるの力なり。渾身の至誠を凝めて至上の權威に服するの時、其の一權威の願使するまゝに働くの力を得べし。眞の信仰はこゝに生く。古人云はずや、絶對の自由は絶對の服從に出づと。至上の權威、我に何の束縛をか與へん。

趣味無き人の如何に落寞たるかを思へば、信仰なき生活の如何に蕭條たるべきを知り難からず。信仰は追懷の涙を薄らげ、希望の笑を増す。笑無きところに光なく、涙の薄らがるるとこ

ろに墮落の淵あり。

朝々神と借に起き、夜々佛を抱いて眠る、不斷の法悦こゝにあり、神の滋味津々として心腸に沁む。

信の高井鴻山、怪山水を善くす、題していふ、

一眼老和尙。三頭小怪童。

估魚還買酒。會飲古洞中。

と、一幅、木人歌ひ石女舞ふの光景、是れ奇か、嗚呼、終に怪にあらず。

九州に遊びて北豊の一客舎に宿す、楣間に掲ぐる所の不倒翁の圖あり、拜山題して、

我愛圓通不倒翁。腹無三物本虚空。

動身旋轉隨入乎。

特立依然是直躬。

と詩は凡庸なれど、守る所あつて能く他と移る處世の要を説き盡せるを覺ゆ。一物無き所、是れ無盡藏、其境の中に我を守り、轉々の中に不動の境あり。

人には包容の量あると共に反撥の氣なかるべからず。反撥の氣なきものは凡、包容の量なきものは偏、偏は以て世に立つ能はず、凡は以て存在の價値無し。(癸子四月)

修養は力なり

人の生涯は力の生涯なり。生に於て發生したる力は、幼時に於て成長し、壯時に於て充實し、老時に於て衰耗し、死に於て放散す。生老死の一期は力の盛衰消長なり。一期の變化は、已むを得ずとするも、生より死に至り吾等の生涯は此の力の支持に忙了せられ、營々として一日も長く此力を保たんとする生の執着は吾等に不斷の努力を強要し、進んで生の向上を計らんとす

る吾等の慾望は、又吾等に飽く無き力を求む。生は力なり。其の物質的なるものは衣食によつて支へられ、其の精神的なるものは心の糧によつて保たる。身體の修養も力の修養なり。精神の修養も力の修養なり。心身不二此力によつて結合す。

一代の修養も此力と關聯す。幼時の教育なるものは其の天賦の力量を發揮せしむるを以て能事とし、壯時の自覺は此力の秤量に出發し、老時の修養は此力を保持するを主とす。修養の工夫、頗る多岐なりと雖も、要は此力を無用に放散せしめざる靜的修養と此力を有効に發揮せんとする動的修養との二に歸す。

蓄積と發揚との差はあれ、靜動二面を通じて主とするものは、此力、而して此力の蓄積にも亦力を要し、此力の發揮にも力を要す。克己といひ忍耐といふは、此力の放散を止むる力にして、靜慮といひ坐禪といふは、其の方法手段なり。努力といひ精進といふは、此力を發揮し

むるの力にして、所謂能率増進の方法も亦、此力の發揮を有效ならしめんと工夫に過ぎず。

既に是れ力なり。大に蓄ふる所のものは大に散すべし。大修爲底の人は以て大力量底の人たるべし。末、終に海に入るべき山川も、しばし木の葉の下くどる。くどる所の潜勢力は汪洋として海に入るの顯勢力となる。修爲の期間の長きほど活動の壽命も長かるべく、蘊蓄の努力多きほど發揚の努力は少なかるべし。

修行二十年、しかも平々凡々たるものあり、僅に三年の修行、早既に一方の大立者たるあり。時を以て云へば彼は長くして此は短かし。短かきもの、成功し、長きもの、碌々たる事の異例に似たるを以て、人呼んで運となすも、仔細に其の蘊蓄を叩けば、天稟の相違も之あるべきも、其の主因は彼は長きも淺く、此は短かきも深きに由らざるなし。蘊蓄は時の問題にあらずして、量の問題なり。此に於て吾等は不徹底なる修養の長年月ならんよりも、短日月なりとも其の修

養の徹底的ならんことを求む。

徹底して其の根本原理を攫めば、枝末の問題は快刀を以て亂麻を斷つが如く解決せらるべきも、徒らに枝末に没頭して根本を逸却せば、幾年月を経るも應用自在なる能はず。

大綱、手にあり、綱目、之に従ふ。綱目を算して、大綱を捕へずんば、終生區々として達するなけん。事を究むれば其の根柢に入れ、業を爲さば其の大綱を捕へよ。是れ我が修養をして徹底せしむる所以。

業は別れて萬般なるも、道は則ち一。浸りに職に尊卑を立て、業に大小を云ふは、因襲に捕へられたる迷信にして、一國を料理する大宰相も、一個のピンを製造する職工も、吾等の生活を助くるは一、人各々天稟あり、能も亦適不適あり、適所に適業に就く、何の大小あり、何の

尊卑あらん、徹底して其職とする所に全力を注げば、其人の生存の價値は自から發揮せらるゝものあらんか。たゞ全力の入たれ。されば汝は成功の鍵を握らん。

○ 全力の人は、事の大小を見ずして其の普通的なるを看取し、見て以て、小とすることも、延いて人生の大に及ぶを知るが故に、事に胡魔化しなく、尊卑を見ずして其の永久的なるを思ひ、目前の一小事も、事終りて消え行くにあらざるを知るが故に、不朽の生命を打込む。打込むは力なり。其の遂げられたる事業は即ち力の發現なり。

○ 吾等をして此力を養はしめよ。是れ表面皮相の力にあらすして心裡の内面に深く潜める先天内容の力に後天の修養の加はれる力なり。此力を内に充實せしめ、事に當つて發揮する、是れ修養の根本要義に培ふものにあらずや。

○ 近時喧傳せらるゝ能率の問題も、要は如何に此力を有効に發揮すべきか、如何にして無用の力を省くべきかの問題に基因す。修養の所詮は此力を逸却する能はず。

○ 正智見を以て迷妄の情執を打破するも力なり。無蓋の大悲を以て他に徹底せしむるも力なり。予豈我を妨ぐる高山あらんやと進み行く意も亦力なり。外圍の力の爲に自から壓迫せられ得るものは、弱きもの、自己の力を以て外界の事情に打勝つものは強きもの。強弱一に力に由る。

宗教と修養

宗教とは何ぞや

宗教は研究せられしか

宗教研究とは何ぞ。云ふまでもなく、之は宗教を研究するのであるが、元來宗教と云ふものは研究すべきものであるか、すべからざるものであるかが劈頭の問題で、私は之から諸君と共に宗教を研究せんとするのであるが、此の企に對しては自から二個の反對説がある。これはマクス・ミュラー博士が其の著書の初めに於ても表示せられた如く、一は宗教は神聖にして侵すべからざるものであつて、其の主張には毫も疑ひを容るべき餘地のあるものでない。既に疑ひを容るべき餘地がない以上は、たゞ之を信仰すべきもので、人間の淺慕なる知識では研究の出來ぬもので、それを生意氣に研究などと云ふのは是れ却つて宗教を冒瀆するものである。如何に

人智が進んだからとて神の御心を量ることは出來ない。宗教は神の啓示、神の御心から出たのだといふ宗教神聖論。今一つは宗教は野蠻時代の遺物で、猶螢のやうなものである。知識の光のない時には光りもするが、知識の太陽赫々として輝く今日には毫も其光を認むることは出來ない。かゝる迷妄なものを研究するなどといふは以ての外のこと、宗教などといふことは到底學者の口にすべきものでないといふ宗教無價値論、神聖として崇め奉るのと無價値として蔑むの差はあるが、其の立脚地の違ふだけで宗教の研究に反對するに於ては即ち一である。宗教は然かく神聖にして研究の餘地無きものであらうか、抑も亦、然かく不稽にして研究すべき價値無きものであらうか。假に前者の説の如く宗教は神の啓示にして我等凡智の企及すべからざるものとするを正しとするも、其の所謂凡智の企及すべからざるものなりとは如何にして知られたであらう。研究に研究を重ねて而して後、是れ到底凡智の企及すべからざる所なりといふのは道理もあらうが、未だ研究に手を着けずして如何にして凡智の企及すべき所にあらずと斷することが出來よう。抑も亦、其の稱して神聖なりといふは世界何れの宗教を指すのであ

らう。若し世界何れの宗教も神聖なりといふならば、正しき信仰と迷妄の信仰とは如何にして區別することが出来る。イヤそれは自から奉ずる宗教のみを神聖なりといふのであるといふならば、其の宗教の他の宗教に優る所を明かにせねばならぬ。これを明かにするには是非宗教研究の坩堝の中に於て世界各宗教を比較し、其の理否を辨じ、優劣を判じて、さて然る後に初めて此の宗教は神聖なり彼の宗教は迷妄なりと宣言し得べきで、未だ信仰せずして獨り自から稱して神聖なりといふは、本末を顛倒した大早計の結論である。これと同じ理窟を以て彼の無價値論者をも評することが出来る。試みに彼等の云ふ所を正しとして宗教は迷妄にして全く研究の價値無しとするも、其の迷妄なりと云ひ無價値なりと判ずるは、矢張り研究して後の話で、未だ研究せずして如何にして迷妄なりと云ひ、無價値なりと斷ずることが出来る。研究すべからずといふも研究の價値無しといふも、共に其の立論の薄弱なるは同じことである。況んや宗教は人生の事實で、凡そ人類の存する所此の現象の無い所はなく、人類生存の歴史と共に永く傳はつて居るのであるから、人事研究の方法としても亦之を黙過することは出来ない。今でこそ

政治とか法律とか文藝とか道德とか、いろ／＼に分化して居るが、其の本源に遡つて見ると、何れも宗教と同居して居つたので、我國に於て政治をマツリゴトと云うて、祖宗の遺靈を祭祀するのを政治の第一義としたのは人の知る所、モーゼの律法マヌの法典、何れも宗教と政法との混合して居つたものであるし、文藝の源泉とも見らるゝ神話は全然宗教と同一家屋に存し、詩篇の古きものも亦神を讚美の聲であるのは舊約全書の中の詩篇に見ても、印度の吠陀 (Veda) の中のマントラ (Mantra) 即ち歌誦の部に見ても明かである。道德は常に宗教の姉妹となり、兄弟となつて近い頃まで來たのであるし、其他一切の人事現象に宗教的意味の混和して居ることは、日常使ふ我等が言語の中にも神佛や經典の中に存して居るものが多いのを見ても明かである。基督教を除いて歐羅巴の文明を研究せんとすることが出来ない相談である如く、儒道の教へを除いて支那の思想を窺ひ、佛教を除いて日本文學を研究しようとしても、それは到底出来ない相談である。

宗教の觀察

宗教研究の必要は上述の如しとするも、さて其の研究せんとする宗教とは何ぞやといふと、此の意味が頗る茫漠たるもので、學者によつて各其の見解が異り、従つて何處までも研究の範圍とすべきかが頗る曖昧である。彼の一文不知の翁媪が蛇や狐を祭つて吉凶禍福を祈つて居るのも宗教現象に相違ないが、彼の學者達が宇宙觀、人生觀の根柢に入り、此に研究不到の境地を認め、可知と不可知の分界に入らんとして頭腦を惱して居るのも亦宗教である。神水や神符に隨喜渴仰して渾身の至誠を凝めて之を拜して居るのも宗教なれば、天啓を説き解脱を談じ、救済を示し濟度を云うて居るのも宗教である。煩瑣なる教理を分解して玄に入り妙を盡さんとするも宗教の研究であるが、不立文字教外別傳と云つて、閑坐默想に耽るのも矢張り宗教研究である。人身を犠牲に供し血を以て祭壇を淨むるのも宗教的儀式なれば、讀經祈禱も亦、宗教的儀式である。一切衆生を濟度して皆共に佛道に入らしめんとする僧侶の事業も、迷へる羊

の如き此世の生靈を救うて靈的生活に導かんとする牧師の事業も亦共に宗教的現象である。宗教とは何ぞや、其の範圍は頗る廣く、其の研究の對象たるべき事態は遍く世界に亘り東西何れの國に於ても之あらざるはない。上は歐洲の大都に巍然として聳ゆる教會堂、下は南洋の土蕃が椰子樹の影暗き處に天の星を拜するに至るまで皆研究の對照である。遠くは太古の蠻族が一切の問題を神に歸して風雨雷電、皆其力なりとしたりしより、近くは文明の紳士が人生の秘奥に潜める靈の閃きといふに至るまで、皆研究の對象として取扱はねばならぬのであるから、實に其の研究の範圍は古今を貫き東西に亘つて手の着け所がないやうで、たゞ茫然たるの外はないと見られるが、研究の面白味はこゝにあるので、此の如き雑多異別の現象の中から同一類似の點を求め、紛々擾々たる中に一脈の系統を立て、行くのが、所謂學者的研究で、異中に同を求め雑多の中に系統を立て、先づ其の觀察の方法を時間的と空間的とに分ける。

宗教研究の方法

時間的といふのは宗教現象の萌芽が初めて人類社會に現れた古代に遡り、それより順序を追うて其の進化の段階を辿り、古往今來、宗教が如何に發達し變遷して來たかといふことを研究するので、之を宗教の史的研究と云ふ。宗教發達史とか宗教進化などといふのは、主として此の方面を研究するので、之にも一般的と部分的との區別がある。一般的といふのは、世界の各宗教を打して一丸とし其の發達の徑路を追うて、其の最も原始的なものより漸次發達せるものに及び、且つ相互の影響や交渉をも併せて觀察して宗教進化の大勢を看取するので、部分的といふのは其の研究の範圍を一宗教に限つて其の發達を見て行くので、佛敎史とか基督教史とか、回教史とかいふのは此中に屬するのである。これにも敎理史と敎會史との別があり、敎理史といふのは其の宗教敎理の原始状態より如何にして今日の状態に立至つたかを見るので、或は敎祖の人格と其の敎理とが如何に變遷して來たか、或は其の根本觀念が如何に應用せられて來たか等の研究で、敎會史といふのは同一信仰の下に集りし敎團が如何に發展したか、其の集會場たる敎會若くは寺院が如何に變遷して來たかを見て行くので、これにも亦いろいろの研究の方法

があるが、要するに是等は皆時間的研究である。空間的研究といふのは世界の各宗教を比較して其の異同を求め、優劣を判じて人心の祕奥に横はる宗教意識の源底を探らんとする比較的的研究である。彼の比較宗敎學といふのは此の立脚地から研究して行くのである。かく分類はするものゝ此の二つは互に交錯して其用を爲すのであるから、一に偏することは出來ない。さて是等の研究によりて、一は宗教意識發達の徑路を觀察し、他の諸種の宗教を比較的觀察して、雜然たる中に系統を立て異中に同を求めて、終に宗教の本質とは如何なるものかを看取し、其の根本問題を科學的に研究して行くのが宗敎學、科學以上の地に進み經驗觀察の外に思索を運らして哲學的に研究して行くのが宗敎哲學の領分で、是等の中にも亦宗教心理とか宗教倫理とかいふ區別に、いろいろに分科せらるゝので、一概に宗教研究といふ中には諸種の研究方面が含蓄せらるゝのであるが、是等の一切を悉きんとするは出來得べきことでないから、茲には僅に宗教上主要なる問題を捉へて諸種の方面から之を解説し、以て臚げながらも宗教とは何ぞやといふ疑問を解答するに止めて置く。

世界宗教の博覽會

本篇の主眼たる宗教とは何ぞやといふ疑問に答へるには、先づ一應、今日我國に於て宗教現象として認めて居るものは、如何なるものであるかを觀察するのが捷徑であると思ふ。今日といひ我國といへば其の範圍が狭いやうであるが、時代は歴史の縮寫で、今日我國に行はれて居る宗教現象の中には、極く古く文運まだ開けざる時代に行はれた宗教の面影もあれば、文華燦然たる今日の文明を以て誇る歐米人士の信する宗教も傳はつて居るばかりでなく、我國は實に世界宗教の博覽會場とも稱すべき所で、世界に於ける有名なる宗教は悉く我が日本に集つて蘭菊の美を競うて居る。

試みに世界に於て最も勢力ある宗教の系統を大別すると、アールヤ人種の宗教と、セム人種の宗教と、漢人種の宗教との三とすることが出来る。アールヤ人種といふのは即ち印度歐羅巴人種で、此の人種の宗教としては婆羅門(後の印度教)佛教、波斯教の三であるが、其中に最も

勢力あるものは佛教と婆羅門教で、波斯教は到底之と肩を並ぶべきものでない。其の佛教は早く我國に傳はつて居るのであるし、セム人種の宗教にも猶太教、基督教、回教の三があるが、其中最も勢力あるのは基督教で、猶太教は僅に餘命を保つて居るに過ぎず、回教は隨分勢力のある宗教であるが、これとても基督教に對しては其勢ひ半にも及ばぬ。此のセム人種の宗教の代表者として恥づかしからぬ基督教は、近く我が日本にも勢ひを得て來て、天下に覇を爭ふべき佛基二教は今や我が日本にある。且つ漢人種の宗教たる儒教並に道教は、これ亦前二教に比して其の勢力に於て多くの遜色を有しない。これも亦早く我が日本に傳はつて居るので、世界の三大教系よりは各其の優秀なるものを我國に出し、世界宗教の博覽會場を賑はして居るのである。

研究の利便

さて又其の研究の方から見ると我國は非常な利便を有するので、アールヤ宗教の最も優秀な

る佛教は、印度より支那に入つて其の教義を大成し、更に我國に入つて特殊の發達を遂げたので、眞言宗とか律宗とかいふ印度的なものもあれば、天台や禪宗や淨土のやうな支那的なものもあり、別に我國に於て開かれた眞宗や日蓮のやうなものがあつて、三國佛教の特色が我が日本に備はつて居るし、是等佛教の研究は佛教以前の宗教たる婆羅門教と關聯して居るのであるし、其又婆羅門教は波斯教と兄弟であるから研究に利便少からず。セム宗教の最も優秀な基督教も亦我國に傳へられ、天主、希臘の諸教並に新教諸派は概ね傳道者を送つて相當の信者を有して居り、其の源泉たる猶太教、傍系たる回教の研究に於ても、不便を感ずることは少いから、アールヤ、セムの二大教系の研究に就いて我國が好個の地位を占めて居るといふのは決して一家の私言でない。若し夫れ我が思想界に多大の影響を與へた漢人種の宗教たる儒教や道教に至つては他國人の窺ひ及ばざる利便を有して居る。

世界三大宗教

さて是等三大教系の代表者に就いて視察するに、三者各其の趣きを異にし、崇拜の對象たる神の數を以て區別すると、セム教系は一神教的で唯一つの神の外には之を拜するを喜ばないが、アールヤ教系は汎神的傾向で、佛教の如きは宇宙を其儘に神として居るので、彼のセム教系に屬するものゝ宇宙以外に神ありといふのに對して各其の異彩を放つて居る。漢人種の教系は何れかといへば多神教で、山河天地禽獸艸木に至るまで皆神として崇拜して居るから、此の三教系の研究によつて一切の成立宗教の神に對する觀念を盡すことが出来る。即ち神の數によりて宗教を分類すると、

- 一、多神教 (Polytheism) 二、一神教 (Monotheism) 三、汎神教 (Pantheism)

の三に過ぎないのである。

以上の三代表者たる佛教基督教並に儒道等は皆世界的宗教 (Universal Religion) であつて、世界何れの國へも傳道することが出来るが、宗教の中には其の一國のみに限りて他の國へ弘通することの出来ないものがある。これを國民的宗教 (National-Religion) とす。セム教系の猶

太教、アールヤ教系の婆羅門教は國民的宗教に屬すべきもので、此の國民的宗教の代表者として、我國に特有なる神道がある。此の神道は佛、基、儒、道の諸教と異つて顯示者を有しない。顯示者といふものは宗教上の眞理を吾等に顯示して下された御方で、佛教の釋迦、基督教の基督、儒教の孔子、道教の老子のやうな教祖であるが、神道には誰が説いたといふことはない。所謂神隨の大道で、自然に開發して來たのであるから之を顯示教に對して自然教と云うて分類することが出来る。勿論其の神道も近世になつては諸種の宗派を生じ、それ／＼宗祖を有するに至つたが、それは極く小部分で大體の神道といふ上では矢張神隨の大道自然の顯示である。

日本宗教の觀察

こゝに少しく注意して置かねばならぬことは、儒、道二教で、これは正當に宗教といふことが出来るか、出来ないかといふことは、随分學者の中でも議論のあることであり、殊に日本に勢力あるのは、其の宗教的部分でなくして寧ろ哲學倫理の方面であるから、日本に傳はつた儒

道二教の狀況を以て直ちに支那の宗教を推すことは出来ないが、支那宗教の民間信仰たる陰陽道は、平安朝の頃から我國に傳はつて、これに巧みに我が固有の神道と結合して禁厭呪符に就いて其の現象を示して居ることが少くない。それらの事も亦日本の宗教觀察に於て缺くべからざることである。そは兎に角、此の神道が日本に於て如何の勢力を有するかを見るに、祖先崇拜として國家若くは町村に於て、祭祀すべきものと認められた神社は、實に五萬六千六百一あつて、此外に民間信仰を繋ぐ境外無格社といふのが十三萬三千八百二十五ある。宗教として弘通する教派としては神道に

- 扶桑教、黒住教、大成教、御嶽教、神道教、大社教、實行教、修成教、神習教、禊教、金光教、天理教、

がある。佛教の方を調べると

- 天台、眞言、禪(臨濟、曹洞、黃蘗)、眞宗、日蓮、時宗、融通念佛、法相、華嚴
- 等あつて各々派を擧げて寺院總數七萬二千百七十七、境外佛堂三萬七千五百六十三を有し、

基督教の方は

天主教、正教ハリストス、日本基督教、フレスピテリアン、組合教會、日本聖公會、浸禮教會、美以監督教會、南美以教會、日本美以教會、美普教會、福音教會、ユニテリアン、救世軍其他

で教會並に講義所は一千一百五十二ヶ所を有して神佛二教に比しては微々たるものだが、其の普及傳播は頗る勢ひあるものである。

日本の民間信仰

併し以上の状態を観察して直ちに日本宗教の全般なりといふものがあらば、それは頗る大早計で、日本に於ける宗教を精到に觀察せんとするには、是等諸宗派の研究の外に民間に於ける信仰状態を観察せねばならぬ。此の民間信仰は頗る原始的なもので、太古の面影を今尚ほ存して居るといっても差支へはない。今日の人は宗教といへば直ちに神や佛に想到するが、其神といひ

佛といふものを目に見えざる靈的存在とするのは餘程人智の進歩した後のことで、之を彫刻や繪畫に標象して崇拜の對象とするものも發達してからのこと、其初めに當つては自然現象を直ちに神とし、風雨を見ては風神あり雨神ありとし、雷電に接しては雷の神あり電の神ありとしたので、原始宗教の状態を研究して神話時代に入ると、此種の信仰を見ることが多いし、蕃族信仰を調べるとこんなことが多い。勿論時代には時代の色彩があつて、今日の民間信仰を直ちに太古のものと同一視したり野蠻人のものと同じだといふことは出来ないが、其の面影を遺して居るといふことは確に出来る。今日我國に行はれて居る民間信仰の對象を擧げて見ると大要左の如くである。

一 天體崇拜

(イ) 日月星辰等の天體を神とする者

(ロ) 風雨雷電等天體の變象を神とする者

二 山嶽崇拜

- (イ) 直ちに山嶽を神とする者
 - (ロ) 單に心身練行の道場とする者
- 三 植物崇拜

- (イ) 直ちに植物を神とする者
- (ロ) 植物を神の愛樹として崇拜する者

四 動物崇拜

- (イ) 動物を以て神體とする者
- (ロ) 動物を神の從者として崇拜する者

五 庶物崇拜

- (イ) 或る物品を神として崇拜する者
- (ロ) 偉人の遺物を神として崇拜する者

六 魂魄崇拜

- (イ) 萬有現象の外に魂魄ありと信する者
- (ロ) 魂魄を以て禍福吉凶を司るものとして崇拜する者

七 祖先崇拜

- (イ) 祖先の魂魄を永生のものとして信する者
- (ロ) 祖先を以て子孫の保護神として崇拜する者

此他に講述するも忌はしき蠻風たる生殖器崇拜も今尙ほ盛に行はれて居る。是等は皆宗教の原始的なもので、今日我が國人の中に遺つて居るものである。勿論其の信仰の態度が餘程變じて居るには相違ないが、是等の研究は宗教の原始状態を研究するに大なる利便を與ふることは事實である。時代は歴史の縮寫であるとは宗教に於て殊に趣きあるを覺ゆるのである。

神とは何ぞや

神の觀念

宗教と名づくべき現象の數、多きこと上來述ぶる所の如きも、決して紛然雜然と此の名を與ふるのではない。其中には動かすべからざる一定の要素を有して、遠くは太古の宗教より近くは現代の宗教に至るまで、高きは哲學、科學の域に入れる學者的の宗教より、低きは民間の俗信に至るまで同一の要素を持つて居るのである。それは外でもない。神とか佛とか天とかいふ超人的な存在物に對する觀念、一括して神の觀念といふべきものである。勿論此の觀念も時代によつて幾變遷を経たので、此神と人類との關係を如何に思惟し來りしかを見るのが、宗教發達の徑路を知る一方法である。

原始民族の神

原始民族の認めて以て神としたのは、決して今日吾等の云ふ如き超人的のものにあらずして、直ちに感覺することの出来る日、月、星、辰、風、雨、雷、電其者を以て不可能なる力を有す

るものと見、其の富贍なる想像力に任せて電光を以て怒れる蛇、雲は奔馬なりと見たのであるが、其の時代には未だ的確に神と名づくべきものを有したのではないが、人智漸く進みて人は身體と精神との二つよりなるてふ觀念を生ずるに至り、此の自然現象をも其の裏面に心靈的作用伏せりと見るに至り、此の内部の力外部に現はると思惟して神の觀念漸く明かになる。一體思慮に淺き太古の民族が如何にして身體以外に精神ありといふ、高尚な思索を致すに至りしかといふに、これには種々の原因があつて、其の主要なるものは人の死である。人の死といふことが全く身體の無くなるものなれば頗る明瞭であるが、死は決して身體の消滅ではない、今まで動いたものが動かなくなり、温かであつたものが冷たくなり、呼吸をしたものが呼吸しなくなる。そこで彼等が人間の身體の中より温かい動く呼吸のやうなもの、抜け出すのが死であると見て、死は則ち精神と身體との分離で、其の精神即ち死後の靈魂なるものはフワ／＼した温かいもの、之が身内にある間は生命があるので、此の靈魂によりて吾等は行動し運爲するのであるから、吾等の身體の活動は全く之によると思惟して、身體以外に精神の存在を認めたと

で、此の觀念を一層明白にしたのは夢である。夢は今日に於ても尙ほ不思議に思ふ人があるほどであるから、太古民族は身は臥床の中にあつて夢魂遠く千里に赴く状態は到底推理することが出来ず、直ちに之を以て靈魂が身體を抜け出るのであると感じ、此の抜け出た靈魂の復び身體に還るのが夢、全く抜け出たのが死であるといふやうに考へた。かく自己の身體にも明かに見得べき顯體の外に、見得べからざる精神、即ち幽體のあるを思ふと共に、身外の萬象にも亦吾等の感覺し得べき顯體以外に、感覺し得べからざる幽體が存在すると考へ、此の幽顯二體の觀念は萬物皆靈ありとする物活教(Animism)となる。之に伴うて木片や石塊を靈力ありとして崇拜する呪物崇拜(Fetichism)の現象となつて今尙ほ其の面影を遺し、一面、死後に靈魂の存在する觀念は祖先の靈魂崇拜の觀念となり、祖先の靈は死後も吾人を監視すとし、又吉凶禍福を司どる等の考へを生じて、文運進歩の今日にも其の信仰の殘骸を遺すが、人智の進歩は幽顯二體を差別して顯體以外にたゞ靈ありとしたるに止まらず、之を見るべからざる神として之に一定の名と一定の力とを付して、彼は何の神、此は何の神と呼んで其の信仰の對象を明かにし、此に組織ある多神教(Polytheism)を生じた。印度希臘の原始宗教、支那宗教及び我國の神道は此の多神教の域にあるものである。

神の觀念と進化

併し如何に高尚であつても、多神教は決して人類の宗教的要求を満足せしむべきものではない。何故かといふに神は超人的のものであるといふ思想と、多くの神々が互に其の權力を異にし妨害抑制しつゝあるといふ思想とは兩立するものではない。神と神との間の嫉妬などの傳説は多神教時代の遺物で、我が俗間信仰にも此種のものが多く、印度や希臘の古代神話にも此類があつて、同じ神の中にも優者と劣者、強者と弱者とがあることとなる。既に優者と劣者とあり、強者と弱者とあれば、人類は何を苦んで其の弱者劣者に拜跪せん、必ず其の優強なるものに敬虔の念を拂ふは自然の順序であるから、多神教は勢ひ一神教的の傾向を取つて諸神の中の最高神を立つるか、汎神教の傾向を取つて、全體を悉く總一神とするかの方法を探らねばな

らぬ。印度の古代に於てブラジヤールパチ (Prājāpati) を以て造物主とし、希臘に於てジューズ (Zeus) を以て最上神としたのは一神教的傾向で、印度に於て梵即ちブラフマン (Brahman) を立て、不變にして變化の本だといひ、希臘の哲學者クセノファネス等の神は一にして總なりといへるは汎神教的傾向である。即ち一は超絶的に諸神の上に至高神を立てんとし、他は諸神を打つて一丸としたる統一を立てんとするので、其の趣く所は異なるが多神に嫌らずして一神を得んとするに於ては一である。されば今日發達したる宗教を以て目せらるゝものは、此の一神教か汎神教かで、此の思潮を世界的に代表するのは、猶太に於ける一神教的思想と印度に於ける汎神教的思想である。猶太に於ける一神教的思想は基督教によりて其の精華を放ち、印度に於ける汎神教的思想は佛教に於て其の眞髓を示して居る。一神、汎神、其の立脚地は異なるが(其の研究は暫く後に譲り)多神教の如く神を以て各々分擔する所ありとし、又は争鬭軋轢するものとせず、絶對無限の力とする點に於ては兩説とも異論はないのである。

神の屬性

されば今日吾等の神として認むるものは

(一) 人間以上の力を有す

人間と同様若くは人間以下の力しか有せないものは、神として崇むべき資格の無いものである。

(二) 神は全智全能なり

神にして全智ならず全能ならず、其の知る所に限りあり、其の行ふ所に缺陷あらば、是れ亦神として崇むるの要を認めない。

(三) 神は到らざる所なし

或所には神あり、或所に神なしとせば、神の全智全能は缺くるので、光明遍照十方世界で、神は如何なる所にも存する普遍のもの不朽のもので無ければならぬ。

(四) 神は至善至美なり

やぞ何はと神

神を以て忌はしき醜體なりとし、若くは罪惡あるものとせば、吾等の美的情操は之を崇むるを拒み、吾等の道德情操は之を拜するを厭ふ。神は其の全智なるが如く、至善たり至美たらねばならぬ。

神と人類

神の屬性此の如し。而して吾等の智や限りあり。吾等の行ひや思ふに任せず、吾等の到る所や普からず、吾等の身は醜汚に満ち、吾等の心や罪惡の府なり、如何にして神に近づくべきか、如何にして此の有限の繫縛を離るべきか。宗教は實に此の吾等の無限を憧憬する心に萌して居るので、之を外にして宗教の起原を求むることは出来ない(チーレの説)。神は無限にして我は有限、神は絶對にして我は相對、神は完全にして我は不完全、此の不完全相對有限なる我は如何にして彼の絶對無限にして然かも完全なる神と結ぶべきか。此の自己の有限を感じて神を望む歸依の情と、神と結合せんとする希望とは宗教を成立せしむる所以の根幹で、宗教は神と人

との結合なりてふ古き定義の今尙ほ生命を有せるは之が爲である。「あゝ有難や南無阿彌陀佛」と唱ふるも、「おゝ神よ」と叫ぶも、神人の關係を論究して宇宙開闢人類の原始に及び、若くは眞如より萬法を如何にして開發すべきかの緣起を論じ、或は佛前讀經の儀式、若くは神前祈禱の方法、懺悔滅罪の儀式、浸禮灌頂或は巡禮苦行のことに至るまで、皆神人結合の方法として定められるもので、一切の信仰、一切の教義、一切の倫條、一切の儀式は、皆神と人とを好意的に結合せしめんとするに外ならない。

宗教の研究は一切の研究で、其の中堅たるべきものは神に對する感想であるから、茲に悉くを繰述することは出来ず、又一切を明瞭ならしむることは出来ないが、吾等は更に他の方面より此の觀念を一層明かならしめんとするのである。それは外でも無い、古來宗教の問題として所詮の理路は

(一) 宇宙開闢

(二) 死後の生活

(三) 現在の運命

(四) 人類の救済

等の問題である。是等の問題に對する世界各宗教の答解を究めて行く中には、自から神に對する感想を明かにして、宗教の目的其他、解脱救済の問題をも解決することが出来るであらうと思ふのである。

宇宙開闢の問題

開闢神話の種類

吾等の住居する此の天地は如何にして出來たか、又此の宇宙は如何にして開闢せられたかは何人も聞くことを欲する問題で、太古蒙昧の時代に於ても疑ひを此の問題に抱かざるはなく、既に疑ひを抱く以上は何等かの方法によつて之を解決せしむれば満足する能はざるは人間自然の

要求で、所謂知識慾と名づくべきものである。

併し如何に解決を求むるの情が切であつても、此の甚大にして然も至深な問題の容易に決せらるべきもので無い。此に於て其の創造者を不可思議なる神の力に歸して以て満足を得て居るので、南洋ポリネシア人は、太古に天神タンゴラなるものあり、天より絲を垂れて海底の土を釣らんとす、其の絲途中に切れて海上に點々たる陸地を生ぜしと信じたる如きは最も簡單なる神話で、我が日本に於て伊弉諾、伊弉冊の二神が天の浮橋に立ち天の瓊鉾を以て滄冥を探り、鉾滴凝つて游能古呂島となつたといふのは、之に似通つた神話である。二神はかくて大八洲國及び艸木の神を生み、何ぞ天下の主なるものを生まさらんやとて日の神を生み給ひ、之を大日靈と名づけ、光華明彩六合を照したれば授くるに天上の神を以てし、次に月の神を生み給ひて、之を月讀命といひて夜の國を治めしめ給ひし如きは、我國の宇宙開闢神話である。宇宙開闢に關する神話は、各國各々其趣きを異にして、いろ／＼の面白い話があるが、これにも至上神を立つる傾向と汎神論的の傾向とがあつて、至上神を立つる傾向を有するものは天地神造説

で、天も地も人も皆神の力によつて造られたといふ汎神的傾向を有するものは屍體化生の説で、神の體から天地萬物が出来たといふ風に説いて居る。一神といひ汎神といふは、勿論多神教の後に來るので、太古に遡れば何れも多神の風を帯びて居るのであるから、直ちに一神汎神の萌芽を此の開闢説のみによつて判することは出來ないが、其の傾向を看取することは困難では無い。

屍體化生の説

屍體化生の考へとして算せらるゝのは支那の盤古氏の神話で、天地の初めは混沌たる雞子の如く、清きものは上に天となり、濁れるものは下に地となり、中に盤古氏を生じたので、天地と人とは此に出来たのである（我が日本の宇宙開闢説も亦其初めは混沌たる浮脂の如く清きものは上に天となり、濁れるものは下に地となり、中に天の御中主神を生ずといふが、これは支那の傳説を襲用して、之に日本の神を以てしたものと思はれる）さて其の盤古氏が死んで其

氣は風雲となり、其聲は雷霆となり、左眼は日となり、右眼は月となり、四肢五體は四極五嶽となり、其の血液は江河となり、筋脈は地理となり、肌肉は田土となり、頭髮は星辰となり、皮毛は草木となり、齒骨は金石、精髓は珠玉となり、汗流は雨澤となるといひ、天地萬物は悉く盤古氏の肢體より成立したものと見る。之と相似たのはスカンディナビヤの神話で、太初は世界二つに分れて一は氷寒界、他は焦熱界であつたが、此にアンノーン即ち不可思議と名づけらるゝ一靈があつて、魔風を起して氷寒界より雪片を飛ばし、此の雪片凝つて巨大の魔物となり、之をイーミルといふ。此のイーミルの時には天なく地なく、晝なく夜なかりしが、漸次にして氷寒界の雪解けて一大巨牛となり、流れ出る河の如き乳を以てイーミルを養ひ、岩石を嘗めけるに、其中に巨人あり、三日にして漸く全形を現す、是れブルといふ神なり。此のブルの孫をオーデンといふ。オーデン武勇絶倫、終に魔物イーミルを殺して之を空際に投じけるに、其肉は平野となり、其骨は山嶽となり、其の毛髪は森林となり、其の齒牙は岩石となり、其の血液は大海となり、其の頭腦は中央に彷徨して空となり。四極の大地に接する所に矮魔を

生ずと云ひ、此世の光は神が南焦熱界より火片を招き給ひしによるものにて、日月を之なりとして居る。印度にも亦同じやうな神話があつて、梵天の身を以て世界の起源とし、其頭は天、足は地、眼は日となり、其口より因陀羅阿耨尼の二神を生じ、其の呼吸は空氣となり、最後に口より婆羅門(僧侶)、腕より刹帝利(軍人、政治家)、腹より吠舍(商人)、脚より首陀(奴隸)の四族を生ずといふ、印度に於ては宇宙開闢の祖神を梵天とし、此の梵天によつて天地は創造せられたりといふのであるが、後世の印度教に至りては更に毘紐奴(Vishnu)、溼婆(civa)の二神を取來りて、并シヌヌは宇宙保護の神、即ち守成の佛とし、シバを以て天地破壊の神とし、創造、守護、破壊の三神、此の宇宙に存せりてふ三種現體の思想を作るに至つた。

善 惡 一 神

翻つて波斯のツアラツストラ(Zarathustra)教を見ると、これは初めより善惡の二神を立てて創造破壊の兩者存せりとし、此の宇宙は善惡二神の争闘で、善神アフラ(Ahura)は光明な

り、眞理なり、善なり、智なりであるが、惡神アーマン(Ahriman)は一々之に反對し、彼に光あれば此に暗あり、彼に眞あれば此に偽りあり、彼に善あれば此に惡あり、彼に智あれば此に愚あり、彼に生あれば此に死ありとして相争ふを宇宙の當相とするのであるが、もとより其の崇拜の對象となるべきは善神アフラで其の從神に六あり、一はバーマン(Bahman)といひて天地の創造を守るの神にして六從神の長とし、他は火、金、地、水、木の五神にして支那の五行説と似て居る。五行の説は古く禹の九疇に出で、木火土金水を以て萬物運用の本とするので、稍其の趣きは異なるが、波斯に於ける善神の屬性を此の五に配せると符合せるを見ても、人類の思想發展の略同一徑路を取つて居るのを見ることが出来る。

天地の創造

以上は屍體化生説を初めとし、アールヤ人種并に支那民族(漢人種)の天地創造に關する話説を見たのであるが、セム民族に至ると其の天地創造説は頗る簡單で天地創造の主を立て之によ

りて造られたりとするの外、別に話すべきことは無い。勿論セム民族の宗教も其初めに當つては多神的なりしも、其の宗教的代表者と目すべき、イスラエルの民族は早くも各種族の神々中ヤーホー (Yahweh) 即ちエホバ (Jehovah) を以て至上最高の神とし、此の天地も亦此神によりて創造せられたとするので、事は詳しく舊約全書之首篇創世記に掲げられてある。即ち天地の初めや地は定形なく、曠空にして黒暗淵の面にありて、神の靈水の面を覆ひたりしが、神、光あれと宣ひければ光あり、此に明と暗とを分ちて明を晝とし、暗を夜とし給ひ、晝夜の別此に成り、此を第一日とし、第二日には天と水とを分ち給ひ、第三日には陸地と水とを造り、其の地上に草木を生ぜしめ給ひ、第四日には地を照らす光となるべき日月星辰を造り、第五日には空飛ぶ鳥と水に棲む魚とを出し、第六日には昆蟲家畜并に諸獸類を出し、最後に神の像に象りて人を造り給ひしといふので、他の民族の如く天地を以て神の分出とし若くは天は神、日は神といへると異なり、天地日月一切のもの悉く一神エホバによりて造られたりとするので、後に基督出でて此神の福音を喧傳し、長く歐羅巴人の思想を支配した天地創造説は即ち此に胚胎したのである。

希臘哲學の見解

簡単に神、宇宙を造り給へりといふ思想で満足して居れば、それまでであるが、人智の進歩は永く之のみにて満足し得べきものではなく、神其者に就いても、宇宙其者に就いても疑ひを抱き、従來の神話以外、傳説以外に、理智を以て之を推さんとする哲學的思辨の萌芽を生じ、希臘の哲學は先づ源を此に發し、其の鼻祖と云はるゝタールスは、萬物悉く水氣を含まざるはなし、水こそ天地萬物の根原なれと立言し、次いで出でたるアナキシマンデルスはト・アパイロン (To Apeiron) と云へる固性なく際限なきものより、天地は開發したので、其初めは濕にして寒なるもの、暖にして乾なる火に包まれしが、其の火、後に分裂して天體の諸星となり、其濕にして寒なるものは火に照されて蒸發し、遂に水陸分れて吾等の住する大地成りしと考へ、其門より出でて一新説を立てたるアナキシメネスは、宇宙の本源を以て空氣にありとし、空氣

の吾等の身體を保全するが如く、世界も亦此の空氣によりて保たれ、其の厚薄によりて寒暖の別を生じ、暖なるものは火と變じ、寒なるものは風となり、雲霧となり、終に水となり、水は凝つて地となり、地は石となると考へ、ヘラクライトスは世界は神の造りしものにあらず、又人の造りしものにあらず、永久に活ける火にして一定の量に従つて断えず燃えては消え、消えては燃えて變々化々止む時なしといひ、火、熱を失へば水となり、水、熱を失へば地となり、地又熱を得て水となり、水又火となる、土地の水は集りて海となり海の水は蒸發して太陽の火となると考へた。下つてエムペドクレースに至つては、此の變々化々の説に對して、萬物を組織する元素は一定不動のもので、變化と見るのは其の元素の集合離散する状態に外ならずとし、其の元素を地、水、火、風の四と説き、アナキサゴラスは萬物の本原を以て本來性質を異にせる多種異様の種子より成るもので、之を合すれば大となり、分れば小となる。此の合併分離によつて千狀萬態の萬物を形成するものにて、此の種子を動かす力をヌウス(Nous)といひ、凡ての物の中に於て最純至清にして且つ凡ての力と知識とを有するものと説き、此のヌウス旋動を

起して諸種子を動かし、其の輕暖なるものは周圍に散じ、其の濃重なるものは中央に集り、之より水、土、石を排出し、其の旋動によつて遠く遠く去りし幾多の石塊は日星となるといふ。隨分奇抜な思索で、ピタゴラス學派は更に推理の歩を進めて萬物の始源を以て一にありとし、球形なる宇宙は此の一を中心として保たれて居るので、之を中央火と云ひ、其の周圍に西より東に廻る十個の天體あり、其の中地球と太陽とが同一の方向に位する時は晝、反對の方向にある時は夜となると示し、且つ地球は一日に、月は一月に、太陽は一年に中央火の周圍を廻轉すると云ひ、デモクリタスは宇宙の始源を以てアトム即ち原子にありとし、相類似せるアトム集合し大きくして重きもの、其の中央に集り、小さくして輕きもの周圍に寄りて此處に一團體を成し、之を一世界と名づく、然も此の空間は無限にして、其中に散布せるアトムも亦無量なれば、無數の團體無數の世界を造るといふ等、古代希臘哲學者の思索は漸次愈より細に入り、宗教を離れて推理したが、此の考察は粗雑なるが如しと雖も其中に近世科學の萌芽を含んで居るので、後の宗教の教義を窺ふに於て一瞥を忘る能はざる學說である。

印度哲學の見解

併し宇宙に對して此の如き思索を運らしたの希臘のみでなく、印度に於ても同じく地論師、服水論師、火論師、風仙論師などといふのがあつて、或は地を以て萬物の因とし、一切衆生並に萬物は皆地より生ずといひ、或は水を以て萬物の眞因とし、或は火を以て天地の本源とし、風仙論師は風は能く萬物を生育し又壞滅する作用があるから、之ぞ宇宙の眞因なりと説くのは、彼のターレスの水と云ひ、ヘラクライトスの火と云ひ、アナキシメネスの空氣と云うたのと同じである。更に此の地水火風の四大を以て萬物普通の原素としたのはエムペドクレースの説も似て居る。若し夫れにデモクリトスのアトム論と似たものを擧げると、順世外道(路迦耶陀)並に勝論師(吠世史迦)の所説たる極微論で、此の二説は共に極微を以て宇宙の本源として居るが、此の極微には例の地水火風の四類があつて、其の各に父たる極微と母たる極微あり、此の二極微合して子微を生じ、子微亦餘りの子微と合して更に一子微を生じ、之を孫微

と云ひ、孫微また孫微と合して孫々微を生ずるといふ順序に増加して、身體となり山河大地を成すといふ風に説くのである。勿論等しく極微の説でも勝論のと順世外道のと趣きは異ふが、共に極微を以て立脚地とすることは相同じである。此の極微論は原始佛教の中にも採用せられて、有形の物體は皆肉眼を以て見る能はざる最小單位たる極微の集合によつて成るもので、此の極微を七倍したるを一微といひ、これは六方中心の容積あるもの、此の一微を七倍したるを一金塵と云ひ、一金塵を七倍したるを一水塵といひ、これを七倍したるを一兔毛塵といひ、更に七倍したるを一羊毛塵と云ひ、これの七倍を隙游塵とて日光の射る所に見える埃のやうな大ききさだと説き、これの七倍を一蟻塵と云ひ、一蟻塵の七倍を一蝨とし、七蝨を一麩麥とし、七麩麥を一指節とし、三指節を一指とするといふ風に漸次集合して、身體となり山河大地となるといふ、此外に空力論師といふがあつて、虚空を以て萬物の眞因とし、虚空の中より風を生じ、風より火を生じ、火より煖を生じ、煖より水を生じ、水凍えて堅く地となり、地より種々の植物を生じ、植物の中に五穀を生じ、五穀によつて生命を生じ、生命没して又虚空に歸すと説き、

別に方論師なるものあつて方位即ち空間を以て萬物の眞因とし、諸方より世間人間を生ずと示し、時論師あつて時間は是れ一切萬物の母なりと説くの類、枚舉に違がない。併し議論は終に其の本の本を究めんとして、時といひ、虚空といひ、極微といふ、抑も何より生ずると推し推して天、即ちデーヴ(Daiva)なるものを立て、萬物の眞因とする宗教的説明に入らざるを得ざるに至つた。

希臘哲學と基督教

人の眼は先づ外を見て而して後に内を見る、神話より離れて哲學的思索に入つても、其の初めは宇宙萬象を視察して其の眞因を物質界に求めんとし、地水火風とかアトムとか極微とかの説を立て、來たのであるが、思索の漸く進んで宇宙に於ける人生の價値などといふことを考ふるに至つては、唯物的なるものは變じて唯心的とならざるを得ない。一體、哲學的に宇宙を歸結すると、何人が考へても之を二大別するの外はない。一とは何ぞ、一は我、他は非我、我と云う

たのは主觀、非我といふは客觀、主觀は是れ精神、客觀は是れ物質、そこで初めは非我たる客觀に眼を注いで物質的に立論するが、さて我これ何者ぞと考察すると議論は主觀に入らざるを得ない。希臘の哲學も、ソクラテース、プラトーンの時代に入つては單に客觀の考察に止まらずして主觀に入り、終に有名なプラトーンのイデアの説となつて、此の天地萬物を以て理想の顯現と見ざるを得ざるに至つた。これも詳しく説くと面白いが、それは哲學の領域に入るから略するとして、たゞプラトーンは大初、造化主があつてイデア並に混沌の物質とを以て「宇宙の靈」を造り、此靈は萬物の生氣精神の根本にして、之より地水火風の四原素を成して天體及び諸種の生物を造つた。それであるから萬物は秩序を有して思考することが出来るので、これは全く宇宙の靈の宿れるからであるといひ、日月星辰等諸の天體は造化主の作れるものなるを以て、不生不滅であると共に人間以上の精神を有する已成の神であるが、一切の生物は此の已成の神が造化の意を體して造つたものであるから、生死あるを免れぬといふ風に見て居るので、希臘思想の此の傾向は後に新に來れる基督教、即ち宇宙を以て神の創造に成れりとするものと

抱合して、此に基督教神學の基礎を立つるに至つた。其の代表と見るべきはフィロソフで、彼は哲學の根本竝に中心觀念を以て神にありとし、神は超絶的のもので、絶對無限しかも亦萬物の淵源となるものであると云ひ、然らば萬物を超絶したる神が如何して萬物の淵源たるべきやとの當然の疑問に答へんが爲め、其の媒介者としてロゴスなるものを置き、神は世界を超越せるものなれども、神の觀念は神の代表者、神の使者たるロゴスなる勢力によりて世界萬物を造つたのであるといふ。

三位一體

元來基督教の思想は簡單明晰のものであつたが、これが希臘の哲學思想に觸れて漸次に哲學的の教義となり來つたもので、其の神學組織は已に基督教の時代を去る遠からざる使徒パウロによりて其の萌芽を出し、ヨハネに至つてはフィロソフ哲學のロゴスの觀念を以て之を教主基督教と同一體ならしめ、基督は即ち神の代表たるロゴスなり、神の子なりと示し、神は主觀と客

觀とを超越したる純粹なる靈にして唯一不變なる者、其の意志により世界を創造したる唯一原因なり、神は父にしてロゴスは子なり、子なる神は顯れたる神にして、父なる神は隠れたる神なり。而して其の相互を交感せしむるものは聖靈の力なりとし、父なる神と子なる神(基督)と聖靈とは三にして一、一にして三なりとして三位一體説を樹立し、凡て世にあるものは神を離れて一物もあることなし、子たる神に於て父たる神の觀念は現れたるにて、更に明快にいへば、天地萬物は、もと神の意中にある觀念の表出せられたるものにして、神の觀念は模型、萬物は其の模型に象つて造られたるものと説くのが基督教理の宇宙創造に對する根本觀念である。これは第十世紀の頃にカンターベリーの大監督たりしアンセルムスによつて言明せられたので、其後教理の發展、宗派の分立等により枝葉の點に於ては諸種の相違もあるが、根本觀念に就いては左したる異論はないと見て差支へはない。

佛教の宇宙觀

基督教の方は常に神なるものを客觀的に存在せしめて之を教理の根本中樞として居るが、佛
教の方は常に自心を本として主觀的考察を以て教理を組織して居る。其爲に宇宙論も亦主觀的
唯心的なるを免れない。古來佛敎が宇宙を説くには常に二つの方面があつて、一は宇宙は如何
にして成りしやといふ縁起論で、他は宇宙とは何ぞやといふ實相論である。縁起論の方は之を
四つに分ちて、

- (一)業感縁起
- (二)頼耶縁起
- (三)眞如縁起
- (四)法界縁起

と見、實相論の方は

- (一)事象各別論
- (二)超絶無象論
- (三)事理圓融論
- (四)事々無礙論

と見るので、これを一々詳しく説明してゐると非常に長くなるから、今簡單に一瞥して見よう
と思ふ。

須彌山説

業感縁起といふのは小乘佛敎の有部の議論、原始佛敎の教理で、此の教理は實相論の方では
事象各別の説で、天地萬物は極微の所成アトムとアトムとの集合になるとし、物質は地、水、
火、風の四大の集合で、四大を離れて別に何ものも存在するのではない。精神といふのも眼耳
鼻舌身(色、聲、香、味、觸)によつて感覺した受と、これにより諸種のおもひを爲す想と、
それによりて動作する行と認識了別する識との集合で、此の以外に一物なし。云はゞ元素と元
素との集合だと説き、此の世の中は變轉極りなきもの(諸行無常)で、それには成、住、壞、空
の四期がある。成といふのは出来るので、住は出来上つた姿、壞は漸次壞れて終には空となる、
此の空から又出来ると示すので、俱舍論には宇宙の開闢を示して初めは空界に大風が起つて殆
んど無限に擴まる、これを持界風といふ。此時に光音金藏の雲がズツと三千大千世界に及び、
雨が車軸の如くに下る。風遏んで金剛界が出来、こゝに金藏の雲、雨を注いで其内に滿つ、そ
れから梵王界といふのが出来、夜摩天といふに至りて風が清水を鼓し、こゝに須彌山が出来、
これが世界だといふ。かく出来てそれから又壞して空となり、空より又成るといふ風に變轉限

りが無いといふ。序であるから須彌山のことを少し話して置かう。これは日本宗教に非常な關係を以て、殆んど西洋新學說の輸入せらるゝまでの凡ての日本人の宇宙説とも見らるゝのである。須彌説は何れの國でも古代人類の想像した如く天動地靜の説であり、又世界は丸くない、平たいものと想像したので、梵語蘇迷盧(Sumeru)これは金、銀、瑠璃、水晶の四寶を以て出來て、其の高さが八萬由旬(我が里數にすると三百二十萬里)此山の周圍に七重の金山があつて、之を七金山といひ、一々の山の間に七重にめぐつて香水の海があり、七金山の外圍に大鹹水海とて鹽水の海があり、此海の外圍に鐵圍山といふ山がある。此の鐵圍山と七金山と須彌山とを九山といひ、香水海と大鹹水海とを八海と云ひ、此の大鹹水海の中、須彌山、七金山の四方に四洲とて四つの國がある。此の四洲が即ち人間の住んで居る所で、東を弗娑提、南を閻浮提、西を俱耶尼、北を鬱單越といひ、吾等の住所は此の南閻浮提洲である。さて此の須彌山の半腹に四王天といふのがあつて東が持國天、西が廣目天、南が增長天、北が多聞天、これが天上界の初まりで、其上が忉利天、これが三十三天に分れて其の中央が帝釋天、四方に八天づつ

ある。是等は未だ須彌を離れないが、其上に空居の天がある。夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天、さて其上が色界の天で、初禪、二禪、三禪、四禪に分れ、其上に無色界の空處天、識處天、無所有天、非想非非想天があるといふ風にいふので、是等は皆人間以上の神としてある、人間以下の者には修羅といふがある。これは須彌山の東西より一千由旬の外にあつて大海の下、一萬一千由旬、畜生といふのは其數三四十億もある禽獸蟲魚。餓鬼界といふのは鐵圍山の間、日月の光を見ざる所に存し、地獄は大地の下四萬由旬の下にあるといふ。此の天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄を六道といひ、過去の業報によつて是等の所へ生れ出るので、善なるものは天上に、惡なるものは地獄に下るといふ道德的因果を示すのだが、かくなる本はといふと真理を眞理とせざる惑、即ち無明によるので、此の無明によつて業、即ちアクション(一行)を爲す、其爲に苦の果を得るので、地獄に生れ人間に生れ天上に生るゝ皆業の結果である。此の結果を受くるに正報と依報とあつて、地獄なり天上なりの身を受くるのは正報、それ相應の場所に生るゝのは依報であるといふやうに微細な説明はあるが、要するに惑業によつて此の世界を

造り出すのであると説くのが、業感縁起の概要である。これは尙後の死後の話をする時に細説することにする。

佛教教理の瞥見

眞理を眞理と見ざる惑ひによつて業を造り、以て此の宇宙を現出するとするが、更に其の惑ひの根本はと尋ねると純粹の唯心論になつて、それは阿頼耶識といふ心の本體から出るので、此識は萬物の種子を藏して居るから之を種子識といふ。此の識の中に既に萬有の模型があつて、之が現れて萬有の現行となると説くのが、所謂頼耶縁起論(即ち法相宗)で、種子より現行を生じ、現行又種子に熏じ、兩々轉ずるといふので、要は萬法は悉く是れ阿頼耶識の上に見れたる假象であるといふ。然らば其の阿頼耶の本體はといふと終に眞如といふものを擔ぎ出さざるを得ない。佛教で眞如といふのは基督教の神の如く主觀と客觀とを超越した實在と見るから、彼に於て萬物はたゞ神、神の外に一物無しといふ如く、此には萬物はたゞ眞如、眞如以

外に一物無しといふ超越無象論で、宗旨を云へば三論宗、此宗では諸法皆空を立て、眞如の廓然たるをいふ一種の無宇宙論で、頗る中世教父時代の哲學者スコトス・エリケナの「神は凡て物の大原にして絶對的原因なり、凡ての實在は彼の中にある萬物の存在するといふは神がそれに就いて現るゝのみ」と爲したるに似て、現象は夢の如く幻の如し、たゞ皆眞如界上の假象、彼の阿頼耶なるものも亦是れ一切の物質現象と同じく眞如界上の假象のみと説く。されど基督教神學に於て神と萬物との關係を説くにロゴスの必要なりしが如く、眞如と萬法との關係を明かにするにあらずんば、此の宇宙論は成立つことが出来ない。此に於て時間的に眞如縁起論となり、空間的に事理圓融論となる。即ち眞如と萬法との關係は必ずしも二物にあらずして、即ち一なり、眞如は是れ宇宙の本體、萬法は是れ宇宙の現象、本體は水の如く、現象は波の如し。水を離れて波なく、波を離れて水なし、水と波とは二にして而も一なるが如く、宇宙の本體たる眞如(理)と現象たる萬法(事)とは圓融して不二なるものである。見渡せば、宇宙萬象森々羅々としてさまざまであるが、其の本體は即ち一である。一にして異、異にして一、猶

水波は相離れざる如きが宇宙の實相であると説く。即ち

宇宙	現象(萬法)	雜多	差別	依立	相對	不完全	不自由
本體(眞如)	純一	平等	獨立	絕對	完全	全	自由

なるものであると説くのが、大乘佛教の立脚地で、日本に於ける佛教各宗は此の見地の上に立つて居るので、今日の語を以て云へば、現象即實在論なのである。さて然らば其の萬法と萬法との相互關係は何うであるかといふに、法界緣起論や事々無礙論は之を説明して、本體の現象とは水波の關係であるから、物と云ひ心と云ひ種々あつても、其の本源は即ち一眞如に過ぎないから、天地同根、萬物一體であると共に其の現象相互の關係は又波と波とが相影響して、一波動いて萬波應ずるが如く、萬物は相互に影響し合つて居るので、斷じて一物のみの存在を許さない。即ち萬有は相關的のもので甲から乙、乙から丙丁と無限に關係して盡きる所の無いものであると示す。是等のことを精細に云うて居ると緻密なことにも入らねばならぬのであるから、今は略するとし、此にはたゞ大乘佛教に於ては萬物一體、萬物相關の二則を立て、此

の宇宙を説明するのであると見てよい。併したゞ斯く説明しただけでは、佛教は一種の哲學であつて、毫も宗教的の立脚地が無いやうだが、佛教は此の萬物一體萬物相關の理法の無限に行はるゝ宇宙の實體を以て眞に神と見るので、其の靈妙なる作用、其の不可思議なる秩序は、到底言説思慮の及ぶ所でない。此の靈妙なる作用、不可思議なる秩序は神の顯現に外ならぬ。

佛教と基督教

宇宙は即ち所として遍からざるなき法身佛の顯現、否、法身佛其者であるといふ。此處が基督教と佛教との趣きを異にする所で、基督教で宇宙は神によりて造られたるもの神の意匠の現れであるといふが、佛教では直ちに宇宙を神とする。其の差は一步だが彼は宇宙以外に神を置く一神論で、これは宇宙の本體を直ちに神とする汎神論である。更に語を換へて云へば、基督教では宇宙萬有の目的を以て宇宙萬有以外の神にありとし、佛教では其の目的を以て宇宙に内蔵せりとするのである。既に内蔵せりとするが故に宇宙は創造せられたるものにあらすして開發

したるものなりと云ひ、既に萬有以外にありとするが故に開發したるものにあらずして創造せられたるものなりと云ふ。これが佛耶二教の宇宙に關する教理上の根本差異である。併し佛敎にも基督敎的な宗派があり、基督敎にも佛敎的な宗派があるから、一概に定むることは出來ないが、飽くまでも此の根本差異を離れない。

此の一節は議論が高遠に亘つて或は解し難き點もあるであらうが、宇宙に關する教義は、これ位にして置いて、更に此の宇宙論が如何に現在生活に及ぶか、又其の宗敎的要義たる救濟并に解脱の方面に如何に關係するかを説明して、此に洩らしたるを補ふことにするから、後の説く所を参照して反覆玩味、其の主旨の存する所を會得して貰ひたい。

死後の問題

夢と靈魂

宇宙其者の吾等の經驗以外に屬すること多くして、到底觀察と實驗とを根據とする科學の力に於て其の全部を明瞭ならしむる能はず、勢ひ宗教の領域に入らざるべからざりしは以上示す所の如くであるが、尙ほ其一部分は吾等が實驗し觀察し得るものであるから、稍議論や推測の根柢を得るが、死後の問題に至つては全然觀察することも實驗することも出來ない爲に、此の問題は重に宗教の領域に葬られて居つたので、經驗智を以ては其の有無をだも判することを許さないから、古昔の疑問は依然今日の疑問として横はつて居る。學術の進歩は重に宗教の領域を狭めて諸種の問題を宗教の中より分離し去つたが、死の問題は何等の奪はるゝこと無くして遺つて居る。死抑も何者ぞ、死が若し肉身の絶滅ならば死は一切の終りとして何等の觀察をも要しなかつたであらうが、死と生との最初の差異は温かゝつた身體が冷たくなり、動いたものが動かなくなり、呼吸をしたものがしなくなり、喋つたものが喋らなくなるのみで、其の形骸は依然として其處に横はつて居る、死とは如何になり行いたのであらう。太古の民族は此の現象を見て終に肉體と靈魂の分離なることを考へ浮べ、肉體は存するも此の肉體を動かしたる所

の靈魂なるもの、肉體より分離したのが死であると見るに至つた。彼等は我が身の影を見て、もとより光線的作用などといふ高尚な理を知る由なければ、之を以て肉體以外の或者と思惟して曠野を彷徨ひつゝ、其影に驚き、水面に映るを見ては其何たるやを怪しみ、更に睡眠中に夢を見るに至つては其の解釋に苦み、之を以て肉體以外の靈魂が分離して暫し身外に出るものなりと考へて、夢は靈魂の遊離なりとの考へは何れの民族にも行はれた信仰で、此考へがやがて夢と覺醒時との生活とに何等かの交渉あり關係あるものと見て、夢占などが行はれ、我國に於ても夢を以て吉凶を卜したる例は少くないし、支那にも此風があつて悪夢を見るときは婆娑婆演帝との呪を書いて寢所の上に貼り置けば禍を轉ずるとか、獾といふ獸は悪夢を食ふとかの信仰があつて、之が我國にも傳はつて居る。これらは夢中生活と現實生活との間には抜くべからざる關係ありと見たのである。さて夢は靈魂の一たび出でて歸り來るのであるが、若しも其の靈魂が出で去つたものは死であると考へ、死は靈魂の肉體より分離するものなりとの思想を養成したのである。されば其の靈魂といふのは如何なるものなるかといふに、濫かき身體を冷

たくし、動く身體を動かなくし、呼吸ある身體を呼吸なくするのであるから、濫かい動く風やうなものであらうと考へた。

靈魂の歸趣

これで靈魂といふものゝ思想は出來たが、其の肉體より分離したる靈魂は那邊に赴くか、即ち靈魂の歸趣如何といふ問題となる。支那では魂は死後天に歸し、魄は死後地に歸す、鬼は歸なりと説明して居るが、其他の諸國に於てはかゝる單純な解釋を以て満足せず、死後の生活と現在の生活との間には離るべからざる關係ありとし、現世に於て善を爲したるものと惡を爲したるものとは、自から其の赴く所を異にする考へ、善人の赴くべき天國若くは極樂と、惡人の赴くべき地獄との別を立て、死後の生活を道德的に説明することゝなつて居る。されば何れの國の神話にも天國地獄の考へがあるとすれば、何人が使者をして天國に行かしめ、地獄へ行かしむることを判定するか、即ち死後には必ず之を審判する所のものが無ければならぬとの思想

次いで起り、此に死後の裁判といふ神話を生ずるに至つた。

死後の裁判

凡そ原始民族の想像は其の日常目睹する所に基いて類推して行くのであるから、猛獸に襲はれ毒蛇に噛まれ、若くは敵人の爲に害せらるゝ目前の事實に基いて、自然に死することにまで類推を及ぼし、こは目に見えざる何者かの他より力を加へて死せしむるに外ならしとし、例の一切の不可知の神の所爲とする。彼等の感想は直ちに死神なるものを想像し、印度に於ては夜摩を以て死の神とし、此の死神が死後の裁判を計ると考へた。我國に於て地獄の國王を閻魔とする思想の傳はつたのは此の夜摩のことである。支那に於ても亦冥官といふ考へがある。埃及に於てはオシリスなる神あつて死後の裁判を司どると傳へられ、人は死に於て其の肉體は腐爛するも身體以外に自我（エゴ）なるものあつて、生前と同じく營養娛樂社交等をするので、此カーは決して腐るものでないと信じ、其の死後裁判の豫審とも目すべき儀式が、葬祭の時にあ

死後の問題

つて生前其ものに恩怨あるものは之を僧侶に訴へ出で、其の裁決によりて葬らるゝ所を異にするのであつた。波斯教に於ては死を以て悪神アングラ・マニユー（又はダエヴ）の成す妖術と信ぜられ、北方地獄の方より目に見えざる死の箭は來りて人の肉に潜み入り、終に死に至らしむと傳へられ、さて死者は計算の橋（*Cinvaro peretusi*）といへる所を過ぎて、生前に於ける善惡の行爲を計算し、罪なきものは満足に其橋を渡り得べきも、悪行多きものは其の橋忽ちに破壊して悪魔の配下にある地獄に落ちざるを得ずといふ。希臘に於ても亦罪重きものは地獄に入り罪輕きものは應報を受けて再び生れ、たゞ純潔の靈魂のみは天國に赴くと信ぜられて居つたので、プラトーンの「レパブリック」中にはアルメニオスの子エルの物語を載せて、死後は長途の旅行を重ねて天上と地心とに通ずる二條の道ある所に赴き、此處に判官ありて生前の功罪を較して善人は其證を額に受けて天に上り、悪人は背に其證を付せられて地心に墮すといひ、別に運命の籤あつて、來世の運命を定めらるゝ旨が記されてある。猶太に於ても天國地獄の思想は認められ、神を信ぜるものは死して地獄の痛苦を免るゝ能はざれど、神を信ずるの人々は死

後復活して樂園にあり、川には乳と蜜との流れて山には百合の花咲ける所に祖先と共に快樂を極めて末日審判の日を待つとし、其の思想を繼承したる基督教にも此の觀念ありて、現在の善悪は末日に於て神の御前に於て審判を受け、クリストを信するものは天國に赴くべきも然らざるものは地獄の苦みを免れずとし、回教に於ては其の經典たる「コーラン」に「天國は樂むべし、地獄は怖るべし、善と悪とは必ず報償あり」と示し、七重の地獄を立て、罪の輕重によりて差等を立て、天國も亦七重ありて善の輕重によりて定むといふ。之を要するに各宗教を通じて死後の存在を信じ地獄天國の考へはあるが、たゞ其考へが單に地獄と天國とに定むるか地獄に赴くもの再び生れ歸るかに至つては、多少其の所説を異にし、我が國民宗教に最も影響ある支那竝に印度の思想は泰西思想と趣きを同じうせざるものがある、即ち支那には再生の説あり（勿論希臘の古代に於ても存したのであるが）、佛教には輪廻の説がある（これも埃及其他に面影は存したか）。

再生の説

基督教に復活の説はあるが、これは人類の救主たるクリストの上に立論したので、一般信徒は末日の審判により決せらるゝが、支那の再生説は一たび死したる人が生れ代るといふので、鮑靚、字は大玄、東海の人、生れて五歳、父母に語つていふには、我はもと曲陽の李家の兒で、九歳の時井に墮ちて死し、此に生れたのだというたので、父母が其家を探ねると果して九歳で死んだ子があつたなぞの話は支那の民間信仰として多いのである。

輪廻轉生の説

佛教の輪廻といひ、轉生といふのは之と趣きを異にして、其の教義頗る緻密なのである。即ち人類生死の状態を四期に分ちて

- 一 本有 生より死に至るの間